高瀬

森　林太郎

内容

高瀬舟

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。德川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、此同心は罪人の親類の中で、主立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた默許であつた。

當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盜をするために、人を殺し火を放つたと云ふやうな、獰惡な人物が多數を占めてゐたわけではない。高瀬舟に乘る罪人の過半は、所謂心得違のために、想はぬ科を犯した人であつた。有り觸れた例を擧げて見れば、當時相對死と云つた情死を謀

つて、相手の女を殺して、自分だけ活き殘つた男と云ふやうな類である。
さう云ふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕ぎ出された高瀬舟は、黑ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つつ、東へ走つて、加茂川を横ぎつて下るのであつた。此舟の中で、罪人と其親類の者とは夜どほし身の上を語り合ふ。いつもいつも悔やんでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲慘な境遇を細かに知ることが出來た。所詮町奉行の白洲で、表向の口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を讀んだりする役人の夢にも窺ふことの出來ぬ境遇である。

同心を勤める人にも、種々の性質があるから、此時只うるさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみじみと人の哀を身に引き受けて、役柄ゆゑ氣色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲慘な境遇に陷つた罪人と其親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになると、其同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間で、不快な職務として嫌はれてゐた。

いつの頃であつたか。多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃ででもあつただらう。智恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍らしい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。固より牢屋敷に呼び出されるやうな親類はないので、舟にも只一人で乘つた。

護送を命ぜられて、一しよに舟に乘り込んだ同心羽田庄兵衞は、只喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、この痩肉の、色の蒼白い喜助の樣子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆はぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、温順を裝つて權勢に媚びる態度ではない。

庄兵衞は不思議に思つた。そして舟に乘つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絕えず喜助の擧動に、細かい注意をしてゐた。

其日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪廓をかすませ、やうやう近寄つて來る夏の溫さが、兩岸の土からも、川床の土からも、霧になつて立ち昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、加茂川を橫ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、只舳に割かれる水のささやきを聞くのみである。

夜舟で寢ることは、罪人にも許されてゐるのに、喜助は橫にならうともせず、雲の濃淡に從つて、光の增したり減じたりする月を仰いで、默つてゐる。其額は晴やかで目には微かなかがやきがある。

庄兵衞はまともには見てゐぬが、始終喜助の顏から目を離さずにゐる。そして不思議だ、不思議だと、心の內で繰り返してゐる。それは喜助の顏が縱から見ても、橫から見ても、いかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼がなかつたなら、口笛を吹き

、はじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衞は心の内に思つた。これまで此高瀬舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それに此男はどうしたのだらう。遊山船にでも乘つたやうな顏をしてゐる、罪は弟を殺したのださうだが、よしや其弟が惡い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い瘦男が、その人の情と云ふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な惡人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いやいや。それにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。此男はどうしたのだらう。庄兵衞がためには喜助の態度が考へれば考へる程わからなくなるのである。

暫くして、庄兵衞はこらへ切れなくなつて呼び掛けた。「喜助。お前何を思つてゐる

のか。」
「はい」と云つてゐたりを見廻した喜助は、何事をかお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衛の氣色を伺つた。
庄兵衛は自分が突然問を發した動機を明して、役目を離れた應對を求める分疏をしなくてはならぬやうに感じた。そこでかう云つた。「いや。別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、己は先刻からお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれまで此舟で大勢の人を島へ送つた。それは隨分いろいろな身の上の人だつたが、どれもどれも島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て、一しよに舟に乘る親類のものと、夜どほし泣くに極まつてゐた。それにお前の樣子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだい。」
喜助はにつこり笑つた。「御親切に仰やつて下すつて、難有うございます。なる程島へ往くといふことは、外の人には悲しい事でございませう。其心持はわたくしにも思

ひ遣つて見ることが出來ます。しかしそれは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまでわたくしのいたして參つたやうな苦みは、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございますまい。わたくしはこれまで、どこと云つて自分のゐて好い所と云ふものがございませんでした。こん度お上で島にゐろと仰やつて下さいます。そのゐろと仰やる所に落ち著いてゐることが出來ますのが、先づ何よりも難有い事でございます。それにわたくしはこんなにかよわい體ではございますが、つひぞ病氣をいたしたことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい爲事をしたつて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それからこん度島へお遣下さるに付きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをここに持つてをります。」かう云ひ掛けて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百銅を遣すと云ふのは、當時の掟であつ

た。

喜助は語を續いだ。「お恥かしい事を申し上げなくてはなりませぬが、わたくしは今日まで二百文と云ふお足を、かうして懷に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで爲事に取り附きたいと思つて、爲事を尋ねて歩きまして、それが見附かり次第、骨を惜まずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりませなんだ。それも現金で物が買つて食べられる時は、わたくしの工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、又跡を借りたのでございます。それがお牢に這入つてからは、爲事をせずに食べさせて戴きます。わたくしはそればかりでも、お上に對して濟まない事をいたしてゐるやうでなりませぬ。それにお牢を出る時に、此二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此二百文はわたくしが使はずに持つてゐることが出來ます。お足を自分の物にして持つてゐると云ふことは、わたくしに取つては、これが始でございます。島へ往つ

て見ますまでは、どんな爲事が出來るかわかりませんが、わたくしは此二百文を島でする爲事の本手にしようと樂んでをります。」かう云つて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衞は「うん、さうかい」とは云つたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何も云ふことが出來ずに、考へ込んで默つてゐた。

庄兵衞は彼此初老に手の屆く年になつてゐて、もう女房に子供を四人生ませてゐる。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇と云はれる程の、儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために著るものの外、寢卷しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕な家に可哀がられて育つた癖があるので、夫が滿足する程手元を引き締めて暮して行くことが出來ない。動もすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が内證で里から金を持つて來て帳尻を合はせる。それは夫が借財と云ふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さ

う云ふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衞は五節句だと云つては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと云つては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を塡めて貰つたのに氣が附いては、好い顏はしない。格別平和を破るやうな事のない羽田の家に、折々波風の起るのは、是が原因である。

庄兵衞は今喜助の話を聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引き比べて見た。喜助は爲事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して亡くしてしまふと云つた。いかにも哀な、氣の毒な境界である。しかし一轉して我身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば十露盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の難有がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其心持はこつちから察して遣ることが出來る。しかしいかに桁

を遂へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で爲事を見附けるのに苦んだ。それを見附けさへすれば、骨を惜まずに働いて、やうやう口を糊することの出來るだけで滿足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて生れてから知らぬ滿足を覺えたのである。

庄兵衞はいかに桁を違へて考へて見ても、ここに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るにそこに滿足を覺えたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。しかし心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようと云ふ疑懼が潛んでゐて、折々妻が里方から金を取り出して來て穴塡をしたこと

などがわかると、此疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである
　一體此懸隔はどうして生じて來るだらう。只上澄だけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだと云つてしまへばそれまでである。しかしそれは譃である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衞は思つた。
　庄兵衞は只漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此病がなかつたらと思ふ。其日其日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又其蓄がもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏み止まることが出來るものやら分からない。それを今目の前で踏み止まつて見せてくれるのが此喜助だと、庄兵衞は氣が附いた。
　庄兵衞は今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此時庄兵衞は空を仰いでゐ

る喜助の頭から毫光がさすやうに思つた。

庄兵衛は喜助の顔をまもりつつ又「喜助さん」と呼び掛けた。今度は「さん」と云つたが、これは十分の意識を以て稱呼を改めたわけではない。其聲が我口から出て我耳に入るや否や、庄兵衛は此稱呼の不穩當なのに氣が附いたが、今さら既に出た詞を取り返すことも出來なかつた。

「はい」と答へた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思ふらしく、おそる〳〵庄兵衛の氣色を覗つた。

庄兵衛は少し間の惡いのをこらへて云つた。「色々の事を聞くやうだが、お前は今度島へ遣られるのは、人をあやめたからだと云ふ事だ。己に序にそのわけを話して聞せてくれぬか。」

喜助はひどく恐れ入つた樣子で、「かしこまりました」と云つて、小聲で話し出した。

「どうも飛んだ心得違で、恐ろしい事をいたしまして、なんとも申し上げやうがございませぬ。跡で思つて見ますと、どうしてあんな事が出來たかと、自分ながら不思議でなりませぬ。全く夢中でいたしましたのでございます。わたくしは小さい時に二親が時疫で亡くなりまして、弟と二人跡に殘りました。初は丁度軒下に生れた狗の子にふびんを掛けるやうに町内の人達がお惠下さいますので、近所中の走使などをいたして、飢ゑ凍えもせずに、育ちました。次第に大きくなりまして職を搜しますにも、なるたけ二人が離れないやうにいたして、一しよにゐて、助け合つて働きました。去年の秋の事でございます。わたくしは弟と一しよに、西陣の織場に這入りまして、空引と云ふことをいたすことになりました。そのうち弟が病氣で働けなくなつたのでございます。其頃わたくし共は北山の掘立小屋同様の所に寢起をいたして、紙屋川の橋を渡つて織場へ通つてをりましたが、わたくしが暮れてから、食物などを買つて歸ると、弟は待ち受けてゐて、わたくしを一人で稼がせては濟まない／＼と申して

をりました。或る日いつものやうに何心なく歸つて見ますと、弟は布團の上に突つ伏してゐまして、周圍は血だらけなのでございます。わたくしはびつくりいたして、手に持つてゐた竹の皮包や何かを、そこへおつぽり出して、傍へ往つて『どうした〳〵』と申しました。すると弟は眞蒼な顏の、兩方の頰から腮へ掛けて血に染つたのを擧げて、わたくしを見ましたが、物を言ふことが出來ませぬ。息をいたす度に、創口でひゆう〳〵と云ふ音がいたすだけでございます。わたくしにはどうも樣子がわかりせんので、『どうしたのだい、血を吐いたのかい』と云つて、傍へ寄らうといたすと、弟は右の手を床に衝いて、少し體を起しました。左の手はしつかり腮の下の所を押へてゐますが、其指の間から黑血の固まりがはみ出してゐます。弟は目でわたくしの傍へ寄るのを留めるやうにして口を利きました。やう〳〵物が言へるやうになつたのでございます。『濟まない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなほりさうにもない病氣だから、早く死んで少しでも兄きに樂がさせたいと思つたのだ。笛を切つたら、す

ぐ死ねるだらうと思つたが息がそこから漏れるだけで死ねない。深く〳〵と思つて、力一ぱい押し込むと、横へすべつてしまつた。刃は飜れはしなかつたやうだ。これを旨く抜いてくれたら己は死ねるだらうと思つてゐる。物を言ふのがせつなくつて可けない。どうぞ手を借して抜いてくれ』と云ふのでございます。弟が左の手を弛めるとそこから又息が漏ります。わたくしはなんと云はうにも、聲が出ませんので、默つて弟の喉の創を覗いて見ますと、なんでも右の手に剃刀を持つて、横に笛を切つたが、それでは死に切れなかつたので、其儘剃刀を、刳るやうに深く突つ込んだものと見えます。柄がやつと二寸ばかり創口から出てゐます。わたくしはそれだけの事を見て、どうしようと云ふ思案も附かずに、弟の顔を見ました。弟はぢつとわたくしを見詰めてゐます。わたくしはやつとの事で、『待つてゐてくれ、お醫者を呼んで來るから』と申しました。弟は怨めしさうな目附をいたしましたが、又左の手で喉をしつかり押へて、『醫者がなんになる、あゝ苦しい、早く抜いてくれ、頼む』と云ふのでございま

す。わたくしは途方に暮れたやうな心持になつて、只弟の顔ばかり見てをります。こんな時は、不思議なもので、目が物を言ひます。弟の目は『早くしろ、早くしろ』と云つて、さも怨めしさうにわたくしを見てゐます。わたくしの頭の中では、なんだかかう車の輪のやうな物がぐる〳〵廻つてゐるやうでございましたが、弟の目は恐ろしい催促を罷めません。それに其目の怨めしさうなのが段々險しくなつて來て、とう〳〵敵の顔をでも睨むやうな、憎々しい目になつてしまひます。それを見てゐて、わたくしはとう〳〵、これは弟の言つた通にして遣らなくてはならないと思ひました。わたくしは『しかたがない、抜いて遣るぞ』と申しました。すると弟の目の色がからりと變つて、晴やかに、さも嬉しさうになりました。わたくしはなんでも一と思にしなくてはと思つて膝を撞くやうにして體を前へ乗り出しました。弟は衝いてゐた右の手を放して、今まで喉を押へてゐた手の肘を床に衝いて、横になりました。わたくしは剃刀の柄をしつかり握つて、ずつと引きました。此時わたくしの内から締めて

置いた表口の戸をあけて、近所の婆あさんが這入つて來ました。留守の間、弟に藥を飲ませたり何かしてくれるやうに、わたくしの頼んで置いた婆あさんなのでございます。もう大ぶ内のなかが暗くなつてゐましたから、わたくしには婆あさんがどれだけの事を見たのだかわかりませんでしたが、婆あさんはあつと云つた切、表口をあけ放しにして置いて駈け出してしまひました。わたくしは剃刀を抜く時、手早く抜かう、眞直に抜かうと云ふだけの用心はいたしましたが、どうも抜いた時の手應は、今まで切れてゐなかつた所を切つたやうに思はれました。刃が外の方へ向いてゐましたから、外の方が切れたのでございませう。わたくしは剃刀を握つた儘、婆あさんの這入つて來て又駈け出して行つたのを、ぼんやりして見てをりました。婆あさんが行つてしまつてから、氣が附いて弟を見ますと、弟はもう息が切れてをりました。創口からは大そうな血が出てをりました。それから年寄衆がお出になつて、役場へ連れて行かれますまで、わたくしは剃刀を傍に置いて、目を半分あいた儘死んでゐる弟の顔を見

詰めてゐたのでございます。」

少し俯向き加減になつて庄兵衛の顔を下から見上げて話してゐた喜助は、かう云つてしまつて視線を膝の上に落した。

喜助の話は好く條理が立つてゐる。殆ど條理が立ち過ぎてゐると云つても好い位である。これは半年程の間、當時の事を幾度も思ひ浮べて見たのと、役場で問はれ、町奉行所で調べられる其度毎に、注意に注意を加へて浚つて見させられたのとのためである。

庄兵衛は其場の樣子を目のあたり見るやうな思ひをして聞いてゐたが、これが果して弟殺しと云ふものだらうか、人殺しと云ふものだらうかと云ふ疑が、話を半分聞いた時から起つて來て、聞いてしまつても、其疑を解くことが出來なかつた。弟は剃刀を抜いてくれたら死なれるだらうから、抜いてくれと云つた。それを抜いて遣つて死なせたのだ、殺したのだとは云はれる。しかし其儘にして置いても、どうせ死

ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと云つたのは、苦しさに耐へなかつたからである。喜助は其苦を見てゐるに忍びなかつた。苦から救つて遣らうと思つて命を絶つた。それが罪であらうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救ふためであつたと思ふと、そこに疑が生じて、どうしても解けぬのである。

庄兵衛の心の中には、いろ／＼に考へて見た末に、自分より上のものの判断に任す外ないと云ふ念、オオトリテエに従ふ外ないと云ふ念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、其儘自分の判断にしようと思つたのである。さうは思つても、庄兵衛はまだどこやらに腑に落ちぬものが殘つてゐるので、なんだかお奉行様に聞いて見たくてならなかつた。

次第に更けて行く朧夜に、沈默の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべつて行つた。

附高瀬舟縁起

京都の高瀬川は、五條から南は天正十五年に、二條から五條までは慶長十七年に、角倉了以が掘つたものださうである。そこを通ふ舟は曳舟である。原來たかせは舟の名で、其舟の通ふ川を高瀬川と云ふのだから、同名の川は諸國にある。しかし舟は曳舟には限らぬので、和名鈔には釋名の「艇小而深者曰舼」とある舼の字をたかせに當ててある。竹柏園文庫の和漢船用集を借覽するに、「おもて高く、とも、よこともにて、低く平なるものなり」と云つてある。そして圖には篙で行る舟がかいてある。

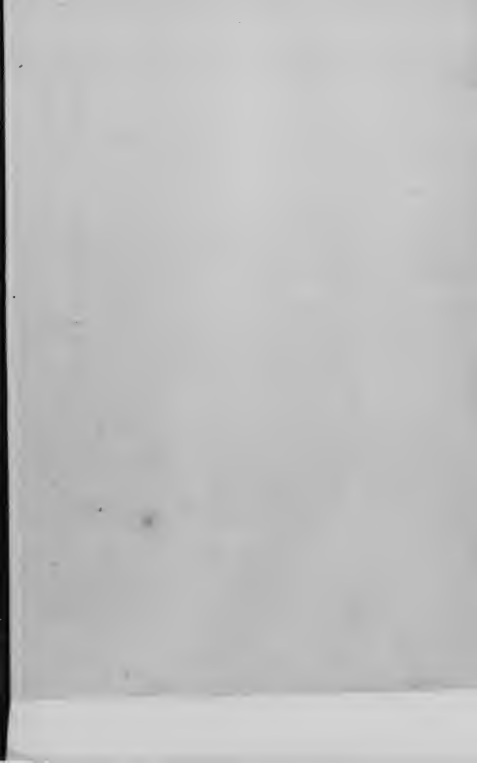
德川時代には京都の罪人が遠島を言ひ渡されると、高瀬舟で大阪へ廻されたさうである。それを護送して行く京都町奉行附の同心が悲しい話ばかり聞せられる。或るとき此舟に載せられた兄弟殺しの科を犯した男が、少しも悲しがつ

てゐなかつた。其仔細を尋ねると、これまで食を得ることに困つてゐたのに、遠島を言ひ渡された時、銅錢二百文を貰つたが、錢を使はずに持つてゐるのは始だと答へた。又人殺しの科はどうして犯したかと問へば、兄弟で西陣に傭はれて、空引と云ふことをしてゐたが、給料が少くて暮しが立ち兼ねた、其内同胞が自殺を謀つたが、死に切れなかつた、そこで同胞が所詮助からぬから殺してくれと頼むので、殺して遣つたと云つた。

此話は翁草に出てゐる。池邊義象さんの校訂した活字本で一ペエジ餘に書いてある。私はこれを讀んで、其中に二つの大きい問題が含まれてゐると思つた。一つは財產と云ふものの觀念である。錢を持つたことのない人の錢を持つた喜は、錢の多少には關せない。人の欲には限がないから、錢を持つて見るといくらあればよいといふ限界は見出されないのである。二百文を財產として喜んだのが面白い。今一つは死に掛かつてゐて死なれずに苦んでゐる人を、死な

せて遣ると云ふ事である。人を死なせて遣れば、即ち殺すと云ふことになる。どんな場合にも人を殺してはならない。翁草にも、教のない民だから、悪意がないのに人殺しになつたと云ふやうな、批評の詞があつたやうに記憶する。しかしこれはさう容易に杓子定木で決してしまはれる問題ではない。こゝに病人があつて死に瀕して苦んでゐる。それを救ふ手段は全くない。傍からその苦むのを見てゐる人はどう思ふであらうか。縦令教のある人でも、どうせ死ななくてはならぬものなら、あの苦みを長くさせて置かずに、早く死なせて遣りたいと云ふ情は必ず起る。こゝに麻酔薬を與へて好いか悪いかと云ふ疑が生ずるのである。其薬は致死量でないにしても、薬を與へれば、多少死期を早くするかも知れない。それゆゑ遣らずに置いて苦ませてゐなくてはならない。従來の道徳は苦ませて置けと命じてゐる。しかし醫學社會には、これを非とする論がある。即ち死に瀕して苦むものがあつたら、樂に死なせて、其苦を救つて遣るが

好いと云ふのである。これをユウタナジイといふ。樂に死なせると云ふ意味である。高瀬舟の罪人は、丁度それと同じ場合にゐたやうに思はれる。私にはそれがひどく面白い。

かう思つて私は「高瀬舟」と云ふ話を書いた。中央公論で公にしたのがそれである。

おぢいさんばあさん

文化六年の春が暮れて行く頃であつた。麻布龍土町の、今步兵第三聯隊の兵營になつてゐる地所の南隣で、三河國奥殿の領主松平平七郎乘羨と云ふ大名の邸の中に、大工が這入つて小さい明家を修復してゐる。近所のものが誰の住まひになるのだと云つて聞けば、松平の家中の士で、宮重久右衞門と云ふ人が隱居所を拵へるのだと云ふことである。なる程宮重の家の離座敷と云つても好いやうな明家で、只臺所だけが、小さいながらに、別に出來てゐたのである。近所のものが、そんなら久右衞門さんが隱居しなさるのだらうかと云つて聞けば、さうではないさうである。田舍にゐた久右衞門さんの兄きが出て來て這入るのだと云ふことである。

四月五日に、まだ壁が乾き切らぬと云ふのに、果して見知らぬ爺いさんが小さい荷物を持つて、宮重方に著いて、すぐに隱居所に這入つた。久右衞門は胡麻鹽頭をしてゐ

るのに、此爺いさんは髪が眞白である。それでも腰などは少しも曲がつてゐない。結構な拵の兩刀を挿した姿がなか〳〵立派である。どう見ても田舍者らしくはない。

爺いさんが隱居所に這入つてから二三日立つと、そこへ婆あさんが一人來て同居した。それも眞白な髪を小さい丸髷に結つてゐて、爺いさんに負けぬやうに品格が好い。それまでは久右衛門方の勝手から膳を運んでゐたのに、婆あさんが來て、爺いさんと自分との食べる物を、子供がまま事をするやうな工合に拵へることになつた。

此翁媼二人の中の好いことは無類である。近所のものは、若しあれが若い男女であつたら、どうも平氣で見てゐることが出來まいなどと云つた。中には、あれは夫婦ではあるまい、兄妹だらうと云ふものもあつた。その理由とする所を聞けば、あの二人は隔てのない中に禮儀があつて、夫婦にしては、少し遠慮をし過ぎてゐるやうだと云ふのであつた。

二人は富裕とは見えない。しかし不自由はせぬらしく、又久右衛門に累を及ぼすや

うな事もないらしい。殊に婆あさんの方は、跡から大分荷物が來て、衣類なんぞは立派な物を持つてゐるやうである。荷物が來てから間もなく、誰が言ひ出したか、あの婆あさんは御殿女中をしたものだと云ふ噂が、近所に廣まつた。

二人の生活はいかにも隱居らしい、氣樂な生活である。爺いさんは眼鏡を掛けて本を讀む。細字で日記を附ける。毎日同じ時刻に刀劍に打粉を打つて拭く。體を極めて木刀を揮る。婆あさんは例のまま事の眞似をして、其隙には爺いさんの傍に來て團扇であふぐ。もう時候がそろ／＼暑くなる頃だからである。婆あさんが暫くあふぐうちに、爺いさんは讀みさした本を置いて話をし出す。二人はさも樂しさうに話すのである。

どうかすると二人で朝早くから出掛けることがある。最初に出て行つた跡で、久右衛門の女房が近所のものに話したと云ふ詞が偶然傳へられた。「あれは菩提所の松泉寺へ往きなすつたのでございます。息子さんが生きてゐなさると、今年三十九になりなさるのだから、立派な男盛と云ふものでございますのに」と云つたと云ふのである。松

泉寺と云ふのは、今の青山御所の向裏に當る、赤坂黒鍬谷の寺である。これを聞いて近所のものは、二人が出歩くのは、最初の其日に限らず、過ぎ去つた昔の夢の迹を辿るのであらうと察した。

兎角するうちに夏が過ぎ秋が過ぎた。もう物珍らしげに爺いさん婆あさんの噂をするものもなくなつた。所が、もう年が押し詰まつて十二月二十八日となつて、きのふの大雪の跡の道を、江戸城へ往反する、歳暮拜賀の大小名諸役人織るが如き最中に、宮重の隱居所にゐる婆あさんが、今お城から下がつたばかりの、邸の主人松平左七郎に廣間へ呼び出されて、將軍徳川家齊の命を傳へられた。「永年遠國に罷在候夫の爲、貞節を盡候趣聞召され、厚き思召を以て褒美として銀十枚下し置かる」と云ふ口上であつた。

今年の暮には、西丸にゐた大納言家慶と有栖川織仁親王の女樂宮との婚儀などがあつたので、頂戴物をする人數が例年よりも多かつたが、宮重の隱居所の婆あさんに銀

十枚を下さつたのだけは、異數として世間に評判せられた。

これがために宮重の隱居所の翁媼二人は、一時江戶に名高くなつた。爺いさんは元大番石川阿波守總恒組美濃部伊織と云つて、宮重久右衞門の實兄である。婆あさんは伊織の妻るんと云つて、外櫻田の黑田家の奧に仕へて表使格になつてゐた女中である。るんが褒美を貰つた時、夫伊織は七十二歲、るん自身は七十一歲であつた。

明和三年に大番頭になつた石川阿波守總恒の組に、美濃部伊織と云ふ士があつた。劍術は儕輩を拔いてゐて、手跡も好く和歌の嗜もあつた。石川の邸は水道橋外で、今白山から來る電車が、お茶の水を降りて來る電車と行き逢ふ邊の角屋敷になつてゐた。しかし伊織は番町に住んでゐたので、上役とは詰所で落ち合ふのみであつた。

石川が大番頭になつた年の翌年の春、伊織の叔母壻で、矢張大番を勤めてゐる山中藤右衞門と云ふのが、丁度三十歲になる伊織に妻を世話をした。それは山中の妻の親

戚に、戸田淡路守氏之の家來有竹某と云ふものがあつて、其有竹のよめの姉を世話をしたのである。

なぜ妹が先によめに往つて、姉が殘つてゐたかと云ふと、それは姉が邸奉公をしてゐたからである。素二人の女は安房國朝奈郡眞門村で由緒のある內木四郎右衛門と云ふものの娘で、姉のるんは寶曆二年十四歲で、市ケ谷門外の尾張中納言宗勝の奧の輕い召使になつた。それから寶曆十一年尾州家では代替があつて、宗睦の世になつたが、るんは續いて奉公してゐて、とう〳〵明和三年まで十四年間勤めた。其留守に妹は戸田の家來有竹の息子の妻になつて、外櫻田の邸へ來たのである。

尾州家から下がつたるんは二十九歲で、二十四歲になる妹の所へ手助に入り込んで、なるべくお旗本の中で相應な家へよめに往きたいと云つてゐた。それを山中が聞いて、伊織に世話をしようと云ふと、有竹では喜んで親元になつて嫁入をさせることにした。そこで房州うまれの內木氏のるんは有竹氏を冐して、外櫻田の戸田邸から番

町の美濃部方へよめに來たのである。

るんは美人と云ふ性の女ではない。若し床の間の置物のやうな物を美人としたら、るんは調法に出來た器具のやうな物であらう。體格が好く、押出しが立派で、それで目から鼻へ拔けるやうに賢く、いつでもぼんやりして手を明けて居ると云ふことがない。顏も顴骨が稍出張つてゐるのが疵であるが、眉や目の間に才氣が溢れて見える。伊織は武藝が出來、學問の嗜もあつて、色の白い美男である。只此人には肝癪持と云ふ病があるだけである。さて二人が夫婦になつたところが、るんはひどく夫を好いて、手に据ゑるやうに大切にし、七十八歳になる夫の祖母にも、血を分けたものも及ばぬ程やさしくするので、伊織は好い女房を持つたと思つて滿足した。それで不斷の肝癪は全く迹を斂めて、何事をも勘辨するやうになつてゐた。

翌年は明和五年で伊織の弟宮重はまだ七五郎と云つてゐたが、主家の其時の當主松平石見守乘穩が大番頭になつたので、自分も同時に大番組に入つた。これで伊織、

七五郎の兄弟は同じ勤をすることになつたのである。

此大番と云ふ役には、京都二條の城と大坂の城とに交代して詰めることがある。伊織が妻を娶つてから四年立つて、明和八年に松平石見守が二條在番の事になつた。そこで宮重七五郎が上京しなくてはならぬのに病氣であつた。當時は代人差立と云ふことが出來たので、伊織が七五郎の代人として石見守に附いて上京することになつた。伊織は、丁度妊娠して臨月になつてゐるるんを江戸に殘して、明和八年四月に京都へ立つた。

伊織は京都で其年の夏を無事に勤めたが、秋風の立ち初める頃、或る日寺町通の刀劍商の店で、質流れだと云ふ好い古刀を見出した。兼て好い刀が一腰欲しいと心掛けてゐたので、それを買ひたく思つたが、代金百五十両と云ふのが、伊織の身に取つては容易ならぬ大金であつた。

伊織は萬一の時の用心に、いつも百両の金を胴巻に入れて體に附けてゐた。それを

出すのは惜しくはない。しかし跡五十兩の才覺が出來ない。そこで百五十兩は高くはないと思ひながら、商人にいろ〳〵說いて、とう〳〵百三十兩までに負けて貰ふことにして、買ひ取る約束をした。三十兩は借財をする積なのである。

伊織が金を借りた人は相番の下島甚右衞門と云ふものである。平生親しくはせぬが工面の好いと云ふことを聞いてゐた。そこで此下島に三十兩借りて刀を手に入れ、拵へを直しに遣つた。

そのうち刀が出來て來たので、伊織はひどく嬉しく思つて、恰も好し八月十五夜に親しい友達柳原小兵衞等二三人を招いて、刀の披露旁馳走をした。友達は皆刀を褒めた。酒酣になつた頃、ふと下島が其席へ來合せた。めつたに來ぬ人なので、伊織は金の催促に來たのではないかと、先づ不快に思つた。しかし金を借りた義理があるので、杯をさして團欒に入れた。

暫く話をしてゐるうちに、下島の詞に何となく角があるのに、一同氣が附いた。下

島は金の催促に來たのではないが、自分の用立てた金で買つた刀の披露をするのに自分を招かぬのを不平に思つて、わざと酒宴の最中に尋ねて來たのである。

下島は二言三言伊織と言ひ合つてゐるうちに、どう〳〵かう云ふ事を言つた。「刀は御奉公のために大切な品だから、隨分借財をして買つて好からう。しかしそれに結構な拵をするのは贅澤だ。其上借財のある身分で刀の披露をしたり、月見をしたりするのは不心得だ」と云つた。

此詞の意味よりも、下島の冷笑を帶びた語氣が、いかにも聞き苦しかつたので、俯向いて聞いてゐた伊織は勿論、一座の友達が皆不快に思つた。

伊織は顏を擧げて云つた。「只今のお詞は確に承つた。その御返事はいづれ恩借の金子を持參した上で、改て申上げる。親しい間柄と云ひながら、今晩わざ〳〵請待した客の手前がある。どうぞ此席はこれでお立下されい」と云つた。

下島は面色が變つた。「さうか。返れと云ふなら返る。」かう言ひ放つて立ちしなに、

下島は自分の前に据ゑてあつた膳を蹴返した。
「これは」と云つて、伊織は傍にあつた刀を取つて立つた。伊織の面色は此時變つてゐた。
伊織と下島とが向き合つて立つて、二人が目と目を見合せた時、下島が一言「たはけ」と叫んだ。其聲と共に、伊織の手に白刃が閃いて、下島は額を一刀切られた。
下島は切られながら刀を拔いたが、伊織に刃向ふかと思ふと、さうでなく、白刃を提げた儘、身を飜して玄關へ逃げた。
伊織が續いて出ると、脇差を拔いた下島の仲間が立ち塞がつた。「退け」と叫んだ伊織の横に挪つた刀に仲間は腕を切られて後へ引いた。
其隙に下島との間に距離が生じたので、伊織が一飛に追ひ縋らうとした時、跡から附いて來た柳原小兵衛が、「逃げるなら逃がせい」と云ひつつ、背後からしつかり抱き締めた。相手が死なずに濟んだなら、伊織の罪が輕減せられるだらうと思つたからで

ある。
伊織は刀を柳原にわたして、しを／＼と座に返つた。そして默つて俯向いた。
柳原は伊織の向ひにすわつて云つた。「今晩の事は己を始、一同が見てゐた。いかにも勘辨出來ぬと云へばそれまでだ。しかし先へ刀を拔いた所存を、一應聞いて置きたい」と云つた。
伊織は目に涙を浮べて暫く答へずにゐたが、口を開いて一首の歌を誦した。

「いまさらに何とか云はむ黑髪の
　みだれ心はもとすゑもなし」

下島は額の創が存外重くて、二三日立つて死んだ。伊織は江戸へ護送せられて取調を受けた。判決は「心得違の廉を以て、知行召放され、有馬左兵衛佐允純へ永の御預仰付らる」と云ふことであつた。伊織が幸橋外の有馬邸から、越前國丸岡へ遣られ

たのは、安永と改元せられた翌年の八月である。

跡に殘つた美濃部家の家族は、それ／＼親類が引き取つた。伊織の祖母貞松院は宮重七五郎方に往き、父の顔を見ることの出來なかつた嫡子平内と、妻るんとは有竹の分家になつてゐる笠原新八郎方に往つた。

二年程立つて、貞松院が寂しがつてよめの所へ一しよになつたが、間もなく八十三歳で、病氣と云ふ程の容體もなく死んだ。安永三年八月二十九日の事である。翌年又五歳になる平内が流行の疱瘡で死んだ。これは安永四年三月二十八日の事である。

るんは祖母をも息子をも、力の限介抱して臨終を見屆け、松泉寺に葬つた。そこでるんは一生武家奉公をしようと思ひ立つて、世話になつてゐる笠原を始、親類に奉公先を捜すことを頼んだ。

暫く立つと、有竹氏の主家戸田淡路守氏養の鄰邸、筑前國福岡の領主黒田家の當主

松平筑前守治之の奥で、物馴れた女中を欲しがつてゐると云ふ噂が聞えた。笠原は人を頼んで、そこへるんを目見えに遣つた。氏養と云ふのは、六年前に氏之の跡を續いだ戸田家の當主である。

黑田家ではるんを一目見て、すぐに雇ひ入れた。これが安永六年の春であつた。

るんはこれから文化五年七月まで、三十一年間黑田家に勤めてゐて、治之、治高、齊隆、齊清四代の奥方に仕へ、表使格に進められ、隱居して終身二人扶持を貰ふことになつた。此間るんは給料の中から松泉寺へ金を納めて、美濃部家の墓に香華を絶やさなかつた。

隱居を許された時、るんは一旦笠原方へ引き取つたが、間もなく故郷の安房へ歸つた。當時の朝奈郡眞門村で、今の安房郡江見村である。

其翌年の文化六年に、越前國丸岡の配所で、安永元年から三十七年間、人に手跡や劍術を敎へて暮してゐた夫伊織が、「三月八日浚明院殿御追善の爲、御慈悲の思召を以

て、永の御預御免仰出されて、江戸へ歸ることになつた。それを聞いたるんは、喜んで安房から江戸へ來て、龍土町の家で、三十七年振に再會したのである。

最後の一句

元文三年十一月二十三日の事である。大阪で、船乘業桂屋太郎兵衞と云ふものを、木津川口で三日間曝した上、斬罪に處すると、高札に書いて立てられた。市中到る處太郎兵衞の噂ばかりしてゐる中に、それを最も痛切に感ぜなくてはならぬ太郎兵衞の家族は、南組堀江橋際の家で、もう丸二年程、殆ど全く世間との交通を絶つて暮してゐるのである。

この豫期すべき出來事を、桂屋へ知らせに來たのは、程遠からぬ平野町に住んでゐる太郎兵衞が女房の母であつた。この白髮頭の媼の事を桂屋では平野町のおばあ樣と云つてゐる。おばあ樣とは、桂屋にゐる五人の子供がいつも好い物をお土產に持つて來てくれる祖母に名づけた名で、それを主人も呼び、女房も呼ぶやうになつたのである。

おばあ様を慕つて、おばあ様にあまえ、おばあ様にねだる孫が、桂屋に五人ゐる。その四人は、おばあ様が十七になつた娘を桂屋へよめによこしてから、今年十六年目になるまでの間に生れたのである。長女いちが十六歳、二女まつが十四歳になる。其次に、太郎兵衞が娘をよめに出す覺悟で、平野町の女房の里方から、赤子のうちに貰ひ受けた、長太郎と云ふ十二歳の男子がある。其次に又生れた太郎兵衞の娘は、とくと云つて八歳になる。最後に太郎兵衞の始て設けた男子の初五郎がゐて、これが六歳になる。

平野町の里方は有福なので、おばあ様のお土産はいつも孫達に滿足を與へてゐた。それが一昨年太郎兵衞の入牢してからは、兎角孫達に失望を起させるやうになつた。おばあ様が暮し向の用に立つ物を主に持つて來るので、おもちやお菓子は少くなつたからである。

しかしこれから生ひ立つて行く子供の元氣は盛んなもので、只おばあ様のお土産が

乏しくなつたばかりでなく、おつ母樣の不機嫌になつたのにも、程なく馴れて、格別萎れた樣子もなく、相變らず小さい爭鬪と小さい和睦との刻々に交代する、賑やかな生活を續けてゐる。そして「遠い遠い所へ往つて歸らぬ」と言ひ聞された父の代りにこのおばあ樣の來るのを歡迎してゐる。

これに反して、厄難に逢つてからこのかた、いつも同じやうな悔恨と悲痛との外に何物をも心に受け入れることの出來なくなつた太郎兵衛の女房は、手厚くみついでくれる親切に慰めてくれる母に對しても、ろく／＼感謝の意をも表することがない。母がいつ來ても、同じやうな繰言を聞せて歸すのである。

厄難に逢つた初には、女房は只茫然と目を睜つてゐて、食事も子供のために、器械的に世話をするだけで、自分は殆ど何も食はずに、頻に咽が乾くと云つては、湯を少しづつ呑んでゐた。夜は疲れてぐつすり寢たかと思ふと、度々目を醒まして溜息を衝く。それから起きて、夜なかに裁縫などをすることがある。そんな時は、傍に母の寢

てゐぬのに氣が附いて、最初に四歳になる初五郎が目を醒ます。次いで六歳になるとくが目を醒ます。女房は子供に呼ばれて床にはいつて、子供が安心して寢附くと、又大きく目をあいて溜息を衝いてゐるのであつた。それから二三日立つて、やう〳〵泊り掛に來てゐる母に繰言を言つて泣くことが出來るやうになつた。それから丸二年程の間、女房は器械的に立ち働いては、同じやうに繰言を言ひ、同じやうに泣いてゐるのである。

高札の立つた日には、午過ぎに母が來て、女房に太郎兵衛の運命の極まつたことを話した。しかし女房は、母の恐れた程驚きもせず、聞いてしまつて、又いつもと同じ繰言を言つて泣いた。母は餘り手ごたへのないのを物足らなく思ふ位であつた。此時長女のいちは、襖の蔭に立つて、おばあ樣の話を聞いてゐた。

桂屋にかぶさつて來た厄難と云ふのはかうである。主人太郎兵衛は船乘とは云つて

も、自分が船に乗るのではない。北國通ひの船を持つてゐて、それに新七と云ふ男を乘せて、運送の業を營んでゐる。大阪では此太郎兵衞のやうな男を居船頭と云つてゐた。居船頭の太郎兵衞が沖船頭の新七を使つてゐるのである。

元文元年の秋、新七の船は、出羽國秋田から米を積んで出帆した。其船が不幸にも航海中に風波の難に逢つて、半難船の姿になつて、積荷の半分以上を流失した。新七は殘つた米を賣つて金にして、大阪へ持つて歸つた。

さて新七が太郎兵衞に言ふには、難船をしたことは港々で知つてゐる。殘つた積荷を賣つた此金は、もう米主に返すには及ぶまい。これは跡の船をしたてる費用に當てようぢやないかと云つた。

太郎兵衞はそれまで正直に營業してゐたのだが、營業上に大きい損失を見た直後に現金を目の前に並べられたので、ふと良心の鏡が曇つて、其金を受け取つてしまつた。

すると、秋田の米主の方では、難船の知らせを得た後に、殘り荷のあつたことやら、

それを買つた人のあつたことやらを、人傳に聞いて、わざ〳〵人を調べに出した。そして新七の手から太郎兵衞に渡つた金高までを探り出してしまつた。

米主は大阪へ出て訴へた。新七は逃走した。そこで太郎兵衞が入牢してとう〳〵死罪に行はれることになつたのである。

平野町のおばあ樣が來て、恐ろしい話をするのを姉娘のいちが立聞をした晩の事である。桂屋の女房はいつも繰言を言つて泣いた跡で出る疲が出て、ぐつすり寐入つた。女房の兩脇には、初五郎と、とくとが寢てゐる。初五郎の隣には長太郎が寢てゐる。とくの隣にまつ、それに並んでいちが寢てゐる。

暫く立つて、いちが何やら布團の中で獨言を言つた。「ああ、さうしよう。きつと出來るわ」と、云つたやうである。

まつがそれを聞き附けた。そして「姉えさん、まだ寐ないの」と云つた。

「大きい聲をおしでない。わたし好い事を考へたから」。いちは先づかう云つて妹を制して置いて、それから小聲でかう云ふ事をささやいた。お父つさんはあさつて殺されるのである。自分はそれを殺させぬやうにすることが出來ると思ふ。どうするかと云ふと、願書と云ふものを書いてお奉行樣に出すのである。しかし只殺さないで置いて下さいと云つたつて、それでは聽かれない。お父つさんを助けて、其代りにわたくし共子供を殺して下さいと云つて頼むのである。それをお奉行樣が聽いて下すつてお父つさんが助かれば、それで好い。子供は本當に皆殺されるやら、わたしが殺されて、小さいものは助かるやら、それはわからない。只お願をする時、長太郎だけは一しよに殺して下さらないやうに書いて置く。あれはお父つさんの本當の子でないから死ななくても好い。それにお父つさんが此家の跡を取らせようと云つて入らつしやつたのだから、殺されない方が好いのである。いちは妹にそれだけの事を話した。

「でもこはいわねえ」と、まつが云つた。

「そんなら、お父つさんが助けてもらひたくないの。」

「それは助けてもらひたいわ。」

「それ御覧。まつさんは只わたしに附いて來て同じやうにさへしてゐれば好いのだよ。わたしが今夜願書を書いて置いて、あしたの朝早く持つて行きませうね。」

いちは起きて、手習の清書をする半紙に、平假名で願書を書いた。父の命を助けて、其代りに自分と妹のまつ、とく、弟の初五郎をおしおきにして戴きたい、實子でない長太郎だけはお許下さるやうにと云ふだけの事ではあるが、どう書き綴つて好いかわからぬので、幾度も書き損つて、清書のためにもらつてあつた白紙が殘少になつた。しかしとう〳〵一番鷄の啼く頃に願書が出來た。

願書を書いてゐるうちに、まつが寐入つたので、いちは小聲で呼び起して、床の傍に疊んであつた不斷着に著更へさせた。そして自分も支度をした。

女房と初五郎とは知らずに寐てゐたが、長太郎が目を醒まして、「ねえさん、もう夜

が明けたの」と云つた。

いちは長太郎の床の傍へ往つてささやいた。「まだ早いから、お前は寢ておいで。ねえさん達は、お父つさんの大事な御用で、そつと往つて來る所があるのだからね。」

「そんならおいらも往く」と云つて、長太郎はむつくり起き上がつた。

いちは云つた。「ぢやあ、お起。著物を著せて上げよう。長さんは小さくても男だから、一しよに往つてくれれば、其方が好いのよ」と云つた。

女房は夢のやうにあたりの騷がしいのを聞いて、少し不安になつて寢がへりをしたが、目は醒めなかつた。

三人の子供がそつと家を拔け出したのは、二番鷄の啼く頃であつか。戸の外は霜の曉であつた。提灯を持つて、拍子木を敲いて來る夜廻の爺いさんに、お奉行樣の所へはどう往つたら往かれようと、いちがたづねた。爺いさんは親切な、物分りの好い人で、子供の話を眞面目に聞いて、月番の西奉行所のある所を、丁寧に敎へてくれた。

當時の町奉行は、東が稻垣淡路守種信で、西が佐佐又四郎成意である。そして十一月には西の佐佐が月番に當つてゐたのである。

蛯いさんが敎へてゐるうちに、それを聞いてゐた長太郎が、「そんなら、おいらの知つた町だ」と云つた。そこで姉妹は長太郎を先に立てて步き出した。

やう〳〵西奉行所に辿り附いて見れば、門がまだ締まつてゐた。門番所の窓の下に往つて、いちが「もし〳〵」と度々繰り返して呼んだ。

暫くして窓の戶があいて、そこへ四十恰好の男の顏が覗いた。「やかましい。なんだ。」

「お奉行樣にお願があつてまゐりました」と、いちが丁寧に腰を屈めて云つた。

「ええ」と云つたが、男は容易に詞の意味を解し兼ねる樣子であつた。

いちは又同じ事を言つた。

男はやう〳〵わかつたらしく、「お奉行樣には子供が物を申し上げることは出來ない、親が出て來るが好い」と好つた。

「いゝえ、父はあしたおしおきになりますので、それに就いてお願がございます。」

「なんだ。あしたおしおきになる。それぢやむ、お前は桂屋太郎兵衛の子か。」

「はい」といちが答へた。

「ふん」と云つて、男は少し考へた。そして云つた。「怪しからん。子供までが上を恐れんと見える。お奉行様はお前達にお逢はない。歸れ歸れ。」かう云つて、窓を締めてしまつた。

まつが姉に言つた。「ねえさん、あんなに叱るから歸りませう。」

いちは云つた。「默つてお出。叱られたつて歸るのぢやありません。ねえさんのする通りにしてお出。」かう云つて、いちは門の前にしやがんだ。まつと長太郎とは附いてしやがんだ。

三人の子供は門のあくのを大ぶ久しく待つた。やう〳〵貫木をはづす音がして、門があいた。あけたのは、先に窓から顏を出した男である。

いちが先に立つて門内に進み入ると、まつと長太郎とが背後に續いた。
いちの態度が餘り平氣なので、門番の男は急に支へ留めようともせずにゐた。そして暫く三人の子供の玄關の方へ進むのを、目を睜つて見送つて居たが、やう／＼我に歸つて、「これこれ」と聲を掛けた。
「はい」と云つて、いちはおとなしく立ち留まつて振り返つた。
「どこへ往くのだ。さつき歸れと云つたぢやないか。」
「さう仰やいましたが、わたくし共はお願を聞いて戴くまでは、どうしても歸らない積りでございます。」
「ふん。しぶとい奴だな。兎に角そんな所へ往つてはいかん。こつちへ來い。」
子供達は引き返して、門番の詰所へ來た。それと同時に玄關脇から、「なんだ、なんだ」と云つて、二三人の詰衆が出て來て、子供達を取り卷いた。いちは殆どかうなるのを待ち構へてゐたやうに、そこに蹲つて、懷中から書附を出して、眞先にゐる與

力の前に差し附けた。まつと長太郎とも一しよに蹲つて禮をした。

書附を前へ出された與力は、それを受け取つたものか、どうしたものかと迷ふらしく、默つていちの顏を見卸してゐた。

「お願でございます」と、いちが云つた。

「こいつ等は木津川口で曝し物になつてゐる桂屋太郎兵衞の子供でございます。親の命乞をするのだと云つてゐます」と、門番が傍から說明した。

與力は同役の人達を顧みて、「では兎に角書附を預かつて置いて、伺つて見ることにしませうかな」と云つた。それには誰も異議がなかつた。

與力は願書をいちの手から受け取つて、玄關にはいつた。

西町奉行の佐佐は、兩奉行の中の新參で、大阪に來てから、まだ一年立つてゐない。役向の事は總て同役の稻垣に相談して、城代に伺つて處置するのであつた。それであ

るから、桂屋太郎兵衛の公事に就いて、前役の申繼を受けてから、それを重要事件として氣に掛けてゐて、やうやう處刑の手續が濟んだのを重荷を卸したやうに思つてゐた。

そこへ今朝になつて、宿直の與力が出て、命乞の願に出たものがあると云つたので、佐佐は先づ切角運ばせた事に邪魔がはいつたやうに感じた。

「參つたのはどんなものか。」佐佐の聲は不機嫌であつた。

「太郎兵衞の娘兩人と倅とがまゐりまして、年上の娘が願書を差上げたいと申しますので、これに預つてをります。御覽になりませうか。」

「それは目安箱をもお設になつてをる御趣意から、次第によつては受け取つても宜しいが、一應はそれぞれ手續のあることを申聞せんではなるまい。兎に角預かつてをるなら、内見しよう。」

與力は願書を佐佐の前に出した。それを披いて見て佐佐は不審らしい顏をした。「い

ちと云ふのがその年上の娘であらうが、何歳になる。」

「取り調べはいたしませんが、十四五歳位に見受けまする。」

「さうか。」佐佐は暫く書附を見てゐた。不束な假名文字で書いてはあるが、條理が善く整つてゐて、大人でもこれだけの短文に、これだけの事柄を書くのは、容易であるまいと思はれる程である。大人が書かせたのではあるまいかと云ふ念が、ふと萌した。續いて、上を僞る横着物の所爲ではないかと思議した。それから一應の處置を考へた。太郎兵衞は明日の夕方迄曝すことになつてゐる。刑を執行するまでには、まだ時がある。それまでに願書を受理しようとも、すまいとも、同役に相談し、上役に伺ふことも出來る。又縦しや其間に情僞があるとしても、相當の手續をさせるうちには、それを探ることも出來よう。兎に角子供を歸さうと、佐佐は考へた。

そこで與力にはかう云つた。此願書は內見したが、これは奉行に出されぬから、持つて歸つて町年寄に出せと云へと云つた。

與力は、門番が歸さうとしたが、どうしても歸らなかつたと云ふことを、佐佐に言つた。佐佐は、そんなら菓子でも遣つて、賺して歸せ。それでも聽かぬなら引き立てて歸せと命じた。

與力の座を起つた跡へ、城代太田備中守資晴が訪ねて來た。正式の見廻りではなく、私の用事があつて來たのである。太田の用事が濟むと、佐佐は只今かやうかやうの事があつたと告げて、自分の考を述べ、指圖を請うた。

太田は別に思案もないので、佐佐に同意して、午過ぎに東町奉行稻垣をも出席させて、町年寄五人に桂屋太郎兵衞が子供を召し連れて出させることにした。情僞があらうかと云ふ、佐佐の懸念も尤もだと云ふので、白洲へは責道具を並べさせることにした。これは子供を嚇して實を吐かせようと云ふ手段である。

丁度此相談が濟んだ所へ、前の與力が出て、入口に控へて氣色を伺つた。

「どうぢや、子供は歸つたか」と、佐佐が聲を掛けた。

「御意でございまする。お菓子を遣しまして歸さうと致しましたが、いちと申す娘がどうしても聽きませぬ。とうとう願書を懷へ押し込みまして、引き立てて歸しました。妹娘はしくしく泣きましたが、いちは泣かずに歸りました。」

「餘程情の剛い娘と見えますな」と、太田が佐佐を顧みて云つた。

十一月二十四日の未の下刻である。西町奉行所の白洲ははればれしい光景を呈してゐる。書院には兩奉行が列座する。奧まつた所には別席を設けて、表向の出座ではないが、城代が取調の摸樣を餘所ながら見に來てゐる。緣側には取調を命ぜられた與力が、書役を隨へて著座する。

同心等が三道具を衝き立てて、嚴めしく警固してゐる庭に、拷問に用ゐる、あらゆる道具が並べられた。そこへ桂屋太郎兵衞の女房と五人の子供とを連れて、町年寄五人が來た。

尋問は女房から始められた。しかし名を問はれ、年を問はれた時に、かつがつ返事をしたばかりで、其外の事を問はれても、「一向に存じませぬ」、「恐れ入りました」と云ふより外、何一つ申し立てない。

次に長女いちが調べられた。當年十六歳にしては、少し穉く見える、痩肉の小娘である。しかしこれは些の臆する氣色もなしに、一部始終の陳述をした。祖母の話を物蔭から聞いた事、夜になつて床に入つてから、出願を思ひ立つた事、妹まつに打明けて勸誘した事、自分で願書を書いた事、長太郎が目を醒したので同行を許し、奉行所の町名を聞いてから、案内をさせた事、奉行所に來て門番と應對し、次いで詰衆の與力に願書の取次を頼んだ事、與力等に強要せられて歸つた事、凡そ前日來經歷した事を問はれる儘に、はつきり答へた。

「それではまつの外には誰にも相談はいたさぬのぢやな」と、取調役が問うた。

「誰にも申しません。長太郎にも精しい事は申しません。お父さんを助けて戴く樣に

お願しに往くと申しただけでございます。お役所から歸りまして、年寄衆のお目に掛かりました時、わたくし共四人の命を差し上げて、父をお助け下さるやうに願ふのだと申しましたら、長太郎が、それでは自分も命が差し上げたいと申して、とうとうわたくしに自分だけのお願書を書かせて、持つてまゐりました。」

いちがかう申し立てると、長太郎が懐から書附を出した。

取調役の指圖で、同心が一人長太郎の手から書附を受け取つて、緣側に出した。

取調役はそれを披いて、いちの願書と引き比べた。いちの願書は町年寄の手から、取調の始まる前に、出させてあつたのである。

長太郎の願書には、自分も姉や姉弟と一しよに、父の身代りになつて死にたいと、前の願書と同じ手跡で書いてあつた。

取調役は「まつ」と呼びかけた。しかしまつは呼ばれたのに氣が附かなかつた。いちが「お呼になつたのだよ」と云つた時、まつは始めておそるおそる項垂れてゐた頭を

擧げて、縁側の上の役人を見た。
「お前は姉と一しよに死にたいのだな」と、取調役が問うた。
まつは「はい」と云つて頷いた。
次に取調役は「長太郎」と呼び掛けた。
長太郎はすぐに「はい」と云つた。
「お前は書附に書いてある通りに、兄弟一しよに死にたいのぢやな。」
「みんな死にますのに、わたしが一人生きてゐたくはありません」と、長太郎ははつきり答へた。
「とく」と取調役が呼んだ。とくは姉や兄が順序に呼ばれたので、こん度は自分が呼ばれたのだと氣が附いた。そして只目を睜つて役人の顏を仰ぎ見た。
「お前も死んでも好いのか。」
とくは默つて顏を見てゐるうちに、唇に血色が亡くなつて、目に涙が一ぱい溜ま

つて來た。

「初五郎」と取調役が呼んだ。

やうやう六歳になる末子の初五郎は、これも默つて役人の顏を見たが、「お前はどうぢや、死ぬるのか」と問はれて、活潑にかぶりを振つた。書院の人々は覺えず、それを見て微笑んだ。

此時佐佐が書院の敷居際まで進み出て、「いち」と呼んだ。

「はい。」

「お前の申立には譃はあるまいな。若し少しでも申した事に間違があつて、人に敎へられたり、相談をしたりしたのなら、今すぐに申せ。隱して申さぬと、そこに並べてある道具で、誠の事を申すまで責めさせるぞ。」佐佐は責道具のある方角を指さした。

いちは指された方角を一目見て、少しもたゆたはずに、「いえ、申した事に間違はございません」と言ひ放つた。其目は冷かで、其詞は徐かであつた。

「そんなら今一つお前に聞くが、身代りをお聞届けになると、お前達はすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることは出來ぬが、それでも好いか。」

「よろしうございます」と、同じやうな、冷かな調子で答へたが、少し間を置いて、何か心に浮んだらしく、「お上の事には間違はございますまいから」と言ひ足した。

佐佐の顔には、不意打に逢つたやうな、驚愕の色が見えたが、それはすぐに消えて險しくなつた目が、いちの面に注がれた。憎惡を帶びた驚異の目とでも云はうか。しかし佐佐は何も言はなかつた。

次いで佐佐は何やら取調役にささやいたが、間もなく取調役が町年寄に、「御用が濟んだから、引き取れ」と言ひ渡した。

白洲を下がる子供等を見送つて、佐佐は太田と稻垣とに向いて、「生先の恐ろしいものでございますな」と云つた。心の中には、哀な孝行娘の影も殘らず、人に敎唆せられた、おろかな子供の影も殘らず、只氷のやうに冷かに、刃のやうに鋭い、いちの最

後の詞の最後の一句が反響してゐるのである。元文頃の德川家の役人は、固より「マルチリウム」といふ洋語も知らず、又當時の辭書には獻身と云ふ譯語もなかつたので、人間の精神に、老若男女の別なく、罪人太郎兵衞の娘に現れたやうな作用があることを、知らなかつたのは無理もない。しかし獻身の中に潜む反抗の鋒は、いちと語を交へた佐佐のみではなく、書院にゐた役人一同の胸をも刺した。

城代も兩奉行もいちを「變な小娘だ」と感じて、その感じには物でも憑いてゐるのではないかと云ふ迷信さへ加はつたので、孝女に對する同情は薄かつたが、當時の行政司法の、元始的な機關が自然に活動して、いちの願意は期せずして貫徹した。桂屋太郎兵衞の刑の執行は、「江戶へ伺中日延」と云ふことになつた。これは取調のあつた翌日、十一月二十五日町年寄に達せられた。次いで元文四年三月二日に、「京都に於いて大嘗會執行相成候てより日限も不相立儀に付、太郎兵衞事、死罪御赦免被仰出、

大阪北、南組、天滿の三口御構の上追放」と云ふことになつた。桂屋の家族は、再び西奉行所に呼び出されて、父に別を告げることが出來た。大嘗會と云ふのは、貞享四年に東山天皇の盛儀があつてから、桂屋太郎兵衞の事を書いた高札の立つた元文三年十一月二十三日の直前、同じ月の十九日に、五十一年目に、櫻町天皇が擧行し給ふまで、中絶してゐたのである。

山椒大夫

越後の春日を經て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十歳を踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて、草臥れた同胞二人を、「もうぢきにお宿にお著なさいます」と云つて勵まして歩かせようとする。二人の中で、姉娘は足を引き摩るやうにして歩いてゐるが、それでも氣が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折々思ひ出したやうに彈力のある歩附をして見せる。近い道を物詣にでも歩くのなら、ふさはしくも見えさうな一群であるが、笠やら杖やら甲斐々々しい出立をしてゐるのが、誰の目にも珍らしく、又氣の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の斷えたり續いたりする間を通つてゐる。砂や小石は多いが、秋日和に好く乾いて、しかも粘土が雜つてゐるために、好く固まつてゐて、海の傍のやうに踝

を埋めて人を惱ますことはない。
藁葺の家が何軒も立ち並んだ一構が柞の林に圍まれて、それに夕日がかつと差してゐる處に通り掛かつた。
「まああの美しい紅葉を御覽」と、先に立つてゐた母が指さして子供に言つた。子供は母の指さす方を見たが、なんとも云はぬので、女中が云つた。「木の葉があんなに染まるのでございますから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね。」
姉娘が突然弟を顧みて云つた。「早くお父う樣の入らつしやる處へ往きたいわね。」
「姉えさん。まだなか／＼往かれはしないよ。」弟は賢しげに答へた。
母が諭すやうに云つた。「さうですとも。今まで越して來たやうな山を澤山越して、河や海をお船で度々渡らなくては往かれないのだよ。毎日精出して大人しく步かなくては。」
「でも早く往きたいのですもの」と、姉娘は云つた。

一群は暫く默つて歩いた。
向うから空桶を擔いで來る女がある。鹽濱から歸る潮汲女である。
それに女中が聲を掛けた。「申し〳〵。此邊に旅の宿をする家はありませんか。」
潮汲女は足を駐めて、主從四人の群を見渡した。そしてかう云つた。「まあ、お氣の毒な。生憎な所で日が暮れますね。此土地には旅の人を留めて上げる所は一軒もありません。」
女中が云つた。「それは本當ですか。どうしてそんなに人氣が惡いのでせう。」
二人の子供は、はずんで來る對話の調子を氣にして、潮汲女の傍へ寄つたので、女中と三人で女を取り卷いた形になつた。
潮汲女は云つた。「いゝえ。信者が多くて人氣の好い土地ですが、國守の掟だから爲方がありません。もうあそこに」と言ひさして、女は今來た道を指さした。「もうあそこに見えてゐますが、あの橋までお出でなさると、高札が立つてゐます。それに精し

く書いてあるさうですが、近頃惡い人買が此邊を立ち廻ります。それで旅人に宿を貸して足を留めさせたものにはお咎があります。あたり七軒巻添になるさうです。」

「それは困りますね。子供衆もお出なさるし、もうさう遠くまでは行かれません。どうにか爲樣はありますまいか。」

「さうですね。わたしの通ふ鹽濱のあるあたりまで、あなた方がお出なさると、夜になつてしまひませう。どうもそこらで好い所を見附けて、野宿をなさるより外、爲方がありますまい。わたしの思案では、あそこの橋の下にお休なさるが好いでせう。岸の石垣にぴつたり寄せて、河原に大きい材木が澤山立ててあります。荒川の上から流して來た材木です。晝間は其下で子供が遊んでゐますが、奥の方には日も差さず、暗くなつてゐる所があります。そこなら風も通しますまい。わたしはかうして毎日通ふ鹽濱の持主の所にゐます。ついそこの柞の森の中です。夜になつたら、藁や薦を持つて往つてあげませう。」

子供等の母は一人離れて立つて、此話を聞いてゐたが、此時潮汲女の傍に進み寄つて云つた。「好い方に出逢ひましたのは、わたし共の爲合せでございます。そこへ往つて休みませう。どうぞ藁や薦をお借申したうございます。せめて子供達にでも敷かせたり被せたりいたしたうございます。」

潮汲女は受け合つて、柞の林の方へ歸つて行く。主從四人は橋のある方へ急いだ。

荒川に掛け渡した應化橋の袂に一群は來た。潮汲女の云つた通に、新しい高札が立つてゐる。書いてある國守の掟も、女の詞に違はない。

人買が立ち廻るなら、其人買の詮議をしたら好ささうなものである。旅人に足を留めさせまいとして、行き暮れたものを路頭に迷はせるやうな掟を、國守はなぜ定めたものか。不束な世話の焼きやうである。併し昔の人の目には掟である。子供等の母は只さう云ふ掟のある土地に來合せた運命を歎くだけで、掟の善惡は思はない。

橋の袂に、河原へ洗濯に降りるものの通ふ道がある。そこから一群は河原に降りた。なる程大層な材木が石垣に立て掛けてある。一群は石垣に沿うて材木の下へ潜つて這入つた。男の子は面白がつて、先に立つて勇んで這入つた。

奥深く潜つて這入ると、洞穴のやうになつた所がある。下には大きい材木が横になつてゐるので、床を張つたやうである。

男の子が先に立つて、横になつてゐる材木の上に乘つて、一番隅へ這入つて、「姉えさん、早くお出なさい」と呼ぶ。

姉娘はおそる〳〵弟の傍へ往つた。

「まあ、お待遊ばせ」と女中が云つて、背に負つてゐた包を卸した。そして着換の衣類を出して、子供を脇へ寄らせて、隅の處に敷いた。そこへ親子をすわらせた。

母親がすわると、二人の子供が左右から縋り附いた。岩代の信夫郡の住家を出て、親子はここまで來るうちに、家の中ではあつても、此材木の蔭より外らしい所に寢た

ことがある。不自由にも次第に慣れて、もうさ程苦にはしない。
女中の包から出したのは衣類ばかりではない。用心に持つてゐる食物もある。女中はそれを親子の前に出して置いて云つた。「ここでは焚火をいたすことは出來ません。若し惡い人に見附けられてはならぬからでございます。あの鹽濱の持主とやらの家まで往つて、お湯を貰つてまゐりませう。そして藁や薦の事も頼んでまゐりませう。」女中はまめ〳〵しく出て行つた。子供は樂しげに粔籹やら、乾した果やらを食べはじめた。
暫くすると、此材木の蔭へ人の這入つて來る足音がした。「姥竹かい」と母親が聲を掛けた。併し心の内には、柞の森まで往つて來たにしては、餘り早いと疑つた。姥竹と云ふのは女中の名である。
這入つて來たのは四十歳ばかりの男である。骨組の逞しい、筋肉が一つ〳〵肌の上から數へられる程、脂肪の少い人で、牙彫の人形のやうな顔に笑を湛へて、手に數珠

を持つてゐる。我家を歩くやうな、慣れた歩附をして、親子の潛んでゐる處へ進み寄つた。そして親子の座席にしてゐる材木の端に腰を掛けた。

親子は只驚いて見てゐる。仇をしさうな樣子も見えぬので、恐ろしいとも思はぬのである。

男はこんな事を言ふ。「わしは山岡大夫と云ふ船乘ぢや。此頃此土地を人買が立ち廻ると云ふので、國守が旅人に宿を貸すことを差し止めた。人買を搦まへることは、國守の手に合はぬと見える。氣の毒なは旅人ぢや。そこでわしは旅人を救うて遣らうと思ひ立つた。さいはひわしが家は街道を離れてゐるので、こつそり人を留めても、誰に遠慮もいらぬ。わしは人の野宿をしさうな森の中や橋の下を尋ね廻つて、これまで大勢の人を連れて歸つた。見れば子供衆が菓子を食べてゐなさるが、そんな物は腹の足しにはならいで、齒に障る。わしが所ではさしたる饗應はせぬが、芋粥でも進ぜませう。どうぞ遠慮せずに來て下されい。」男は強ひて誘ふでもなく、獨語のやうに言つ

たのである。

子供の母はつく〴〵聞いてゐたが、世間の掟に背いてまでも人を救はうと云ふ難有い志に感ぜずにはゐられなかつた。そこでかう云つた。「承はれば殊勝なお心掛と存じます。貸すなと云ふ掟のある宿を借りて、ひよつと宿主に難儀を掛けようかと、それが氣掛かりではございますが、わたくしは兎も角も、子供等に温いお粥でも食べさせて、屋根の下に休ませることが出來ましたら、其御恩は後の世までも忘れますまい。」

山岡大夫は頷いた。「さて〳〵好う物のわかる御婦人ぢや。そんならすぐに案内をして進ぜませう。」かう云つて立ちさうにした。

母親は氣の毒さうに云つた。「どうぞ少しお待下さいませ。わたくし共三人がお世話になるさへ心苦しうございますのに、こんな事を申すのはいかがと存じますが、實は今一人連がございます。」

山岡大夫は耳を欹てた。「連がおありなさる。それは男か女子か。」

「子供達の世話をさせに連れて出た女中でございます。湯を貰ふと申して、街道を三四町跡へ引き返してまゐりました。もう程なく歸つてまゐりませう。」

「お女中かな。そんなら待つて進ぜませう。」山岡大夫の落ち著いた、底の知れぬやうな顏に、なぜか喜の影が見えた。

ここは直江の浦である。日はまだ米山の背後に隱れてゐて、紺青のやうな海の上には薄い靄が掛かつてゐる。

一群の客を舟に載せて纜を解いてゐる船頭がある。船頭は山岡大夫で、客はゆうべ大夫の家に泊つた主從四人の旅人である。

應化橋の下で山岡大夫に出逢つた母親と子供二人とは、女中姥竹が缺け損じた瓶子に湯を貰つて歸るのを待ち受けて、大夫に連れられて宿を借りに往つた。姥竹は不安らしい顏をしながら附いて行つた。大夫は街道を南へ這入つた松林の中の草の家に四

人を留めて、芋粥を進めた。そしてどこからどこへ往く旅かと問うた。草臥れた子供等を先へ寢させて、母は宿の主人に身の上のおほよそを、微かな燈火の下で話した。自分は岩代のものである。夫が筑紫へ往つて歸らぬので、二人の子供を連れて尋ねに往く。姥竹は姉娘の生れた時から守をしてくれた女中で、身寄のないものゆゑ、遠い、覺束ない旅の伴をすることになつたと話したのである。

さてここまでは來たが、筑紫の果へ往くことを思へば、まだ家を出たばかりと云つても好い。これから陸を行つたものであらうか。又は船路を行つたものであらうか。主人は船乗であつて見れば、定めて遠國の事も知つてゐるだらう。どうぞ教へて貰ひたいと、子供等の母が頼んだ。

大夫は知れ切つた事を問はれたやうに、少しもためらはずに船路を行くことを勸めた。陸を行けば、ちき隣の越中の國に入る界にさへ、親不知子不知の難所がある。削り立てたやうな巖石の裾には荒浪が打ち寄せる。旅人は横穴に這入つて、波の引くの

を待つてゐて、狹い巖石の下の道を走り拔ける。其時は親は子を顧みることが出來ず子も親を顧みることが出來ない。それは海邊の難所である。又山を越えると、踏まへた石が一つ搖げば、千尋の谷底に落ちるやうな、あぶない岨道もある。西國へ往くまでには、どれ程の難所があるか知れない。それとは違つて、船路は安全なものである。慥な船頭にさへ賴めば、ゐながらにして百里でも千里でも行かれる。自分は西國まで往くことは出來ぬが、諸國の船頭を知つてゐるから、船に載せて出て、西國へ往く舟に乘り換へさせることが出來る。あすの朝は早速船に載せて出ようと、大夫は事もなげに云つた。

夜が明け掛かると、大夫は主從四人をせき立てて家を出た。其時子供等の母は小さい嚢から金を出して、宿賃を拂はうとした。大夫は留めて、宿賃は貰はぬ、併し金の入れてある大切な嚢は預つて置かうと云つた。なんでも大切な品は、宿に著けば宿の主人に、舟に乘れば舟の主に預けるものだと云ふのである。

子供等の母は最初に宿を借ることを許してから、主人の大夫の言ふ事を聽かなくてはならぬやうな勢になつた。掟を破つてまで宿を貸してくれたのを、難有くは思つても、何事によらず言ふが儘になる程、大夫を信じてはゐない。かう云ふ勢になつたのは、大夫の詞に人を押し附ける強みがあつて、母親はそれに抗ふことが出來ぬからである。その抗ふことの出來ぬのは、どこか恐ろしい處があるからである。併し母親は自分が大夫を恐れてゐるとは思つてゐない。自分の心がはつきりわかつてゐない。

母親は餘儀ない事をするやうな心持で舟に乘つた。子供等は凪いだ海の、青い氈を敷いたやうな面を見て、物珍しさに胸を跳らせて乘つた。只姥竹が顏には、きのふ橋の下を立ち去つた時から、今舟に乘る時まで、不安の色が消え失せなかつた。

山岡大夫は纜を解いた。櫓で岸を一押押すと、舟は搖めきつつ浮び出た。

山岡大夫は暫く岸に沿うて南へ、越中境の方角へ漕いで行く。靄は見る〳〵消えて、

波が日に赫く。

人家のない岩蔭に、波が砂を洗つて、海松や荒布を打ち上げてゐる處があつた。そこに舟が二艘止まつてゐる。船頭が大夫を見て呼び掛けた。

「どうぢや。あるか。」

大夫は右の手を擧げて、大拇を折つて見せた。そして自分もそこへ舟を舫つた。大拇だけ折つたのは、四人あると云ふ相圖である。

前からゐた船頭の一人は宮崎の三郎と云つて、越中宮崎のものである。左の手の拳を開いて見せた。右の手が貨の相圖になるやうに、左の手は錢の相圖になる。これは五貫文に附けたのである。

「氣張るぞ」と今一人の船頭が云つて、左の臂をつと伸べて、一度拳を開いて見せ、次いで示指を竪てて見せた。此男は佐渡の二郎で六貫文に附けたのである。

「横着者奴」と宮崎が叫んで立ち掛かれば、「出し抜かうとしたのはおぬしぢや」と佐

渡が身構をする。二艘の舟がかしいで、舷が水を啜つた。
大夫は二人の船頭の顔を冷かに見較べた。「慌てるな。どつちも空手では還さぬ。お客様が御窮屈でないやうに、お二人づつ分けて進ぜる。賃錢は跡で附けた値段の割ぢや。」かう云つて置いて、大夫は客を顧みた。「さあ、お二人づつあの舟へお乗なされどれも西國への便船ぢや。舟足と云ふものは、重過ぎては走りが悪い。」
二人の子供は宮崎が舟へ、母親と姥竹とは佐渡が舟へ、大夫が手を執つて乗り移らせた　移らせて引く大夫が手に、宮崎も佐渡も幾緡かの錢を握らせたのである。
「あの。主人にお預けなされた嚢は」と、姥竹が主の袖を引く時、山岡大夫は空舟をつと押し出した。
「わしはこれでお暇をする。慥かな手から慥かな手へ渡すまでがわしの役ぢや。御機嫌好うお越しなされ。」
艪の音が忙しく響いて、山岡大夫の舟は見る／＼遠ざかつて行く。

母親は佐渡に言つた。「同じ道を漕いで行つて、同じ港に著くのでございませうね。」

佐渡と宮崎とは顔を見合せて、聲を立てて笑つた。そして佐渡が云つた。「乘る舟は弘誓の舟、著くは同じ彼岸と、蓮華峰寺の和尚が云うたげな。」

二人の船頭はそれ切り默つて舟を出した。佐渡の二郎は北へ漕ぐ。宮崎の三郎は南へ漕ぐ。「あれあれ」と呼びかはす親子主従は、只遠ざかり行くばかりである。

母親は物狂ほしげに舷に手を掛けて伸び上がつた。「もう爲方がない。これが別だよ。安壽は守本尊の地藏樣を大切におし。厨子王はお父樣の下さつた護刀を大切におし。どうぞ二人が離れぬやうに。」安壽は姉娘、厨子王は弟の名である。

子供は只「お母あ樣、お母あ樣」と呼ぶばかりである。

舟と舟とは次第に遠ざかる。後には餌を待つ雛のやうに、二人の子供が開いた口が見えてゐて、もう聲は聞えない。

姥竹は佐渡の二郎に「申し船頭さん、申し〳〵」と聲を掛けてゐたが、佐渡は構は

ぬので、とう〳〵赤松の幹のやうな脚に縋つた。「船頭さん。これはどうした事でございます。あのお嬢様、若様に別れて、生きてどこへ往かれませう。奥様も同じ事でございます。これから何をたよりにお暮らしなさいませう。どうぞあの舟の往く方へ漕いで行つて下さいまし。後生でございます。」

「うるさい」と佐渡は後様に蹴つた。姥竹は舟笭に倒れた。髪は亂れて舷に掛かつた。

姥竹は身を起した。「えゝ。これまでぢや。奥様、御免下さいまし。」かう云つて眞つ逆様に海に飛び込んだ。

「こら」と云つて船頭は臂を差し伸ばしたが、間に合はなかつた。

母親は袿を脱いで佐渡が前へ出した。「これは粗末な物でございますが、お世話になつたお禮に差し上げます。わたくしはもうこれでお暇を申します。」かう云つて舷に手を掛けた。

「たはけが」と、佐渡は髪を掴んで引き倒した。「うぬまで死なせてなるものか。大事な貨ぢや。」

佐渡の二郎は牽紋を引き出して、母親をくる〳〵巻にして轉がした。そして北へ〳〵と漕いで行つた。

「お母あ様〳〵」と呼び續けてゐる姉と弟とを載せて、宮崎の三郎が舟は岸に沿うて南へ走つて行く。

「もう呼ぶな」と宮崎が叱つた。「水の底の鱗介には聞えても、あの女子には聞えぬ。女子共は佐渡へ渡つて粟の鳥でも逐はせられることだらう。」

姉の安壽と弟の厨子王とは抱き合つて泣いてゐる。故郷を離れるも、遠い旅をするも母と一しよにすることだと思つてゐたのに、今料らずも引き分けられて、二人はどうして好いかわからない。只悲しさばかりが胸に溢れて、此別が自分達の身の上を

どれだけ變らせるか、其程さへ辨へられぬのである。

午になつて宮崎は餅を出して食つた。そして安壽と厨子王とにも一つ宛くれた。二人は餅を手に持つて食べようともせず、目を見合せて泣いた。夜は宮崎が被せた苫の下で、泣きながら寐入つた。

かうして二人は幾日か舟に明かし暮らした。宮崎は越中、能登、越前、若狹の津々浦々を賣り歩いたのである。

併し二人が穉いのに、體もか弱く見えるので、なか〳〵買はうと云ふものがない。たまに買手があつても、値段の相談が調はない。宮崎は次第に機嫌を損じて、「いつまでも泣くか」と二人を打つやうになつた。

宮崎が舟は廻り廻つて、丹後の由良の港に來た。ここには石浦と云ふ處に大きい邸を構へて、田畑に米麥を植ゑさせ、山では獵をさせ、海では漁をさせ、蠶飼をさせ、機織をさせ、金物、陶物、木の器、何から何まで、それ〴〵の職人を使つて造らせる

山椒大夫と云ふ分限者がゐて、人なら幾らでも買ふ。宮崎はこれまでも、餘所に買手のない貨があると、山椒大夫が所へ持つて來ることになつてゐた。

港に出張つてゐた大夫の奴頭は、安壽、厨子王をすぐに七貫文に買つた。

「やれ〳〵、餓鬼共を片附けて身が輕うなつた」と云つて、宮崎の三郎は受け取つた錢を懷に入れた。そして波止場の酒店に這入つた。

一抱に餘る柱を立て並べて造つた大廈の奧深い廣間に一間四方の爐を切らせて、炭火がおこしてある。其向に茵を三枚疊ねて敷いて、山椒大夫は几に倚れてゐる。左右には二郎、三郎の二人の息子が狛犬のやうに列んでゐる。もと大夫には三人の男子があつたが、太郎は十六歳の時、逃亡を企てて捕へられた奴に、父が手づから烙印をするのをぢつと見てゐて、一言も物を言はずに、ふいと家を出て行方が知れなくなつた。今から十九年前の事である。

奴頭が安壽、厨子王を連れて前へ出た。そして二人の子供に辭儀をせいと云つた。二人の子供は奴頭の詞が耳に入らぬらしく、只目を瞬つて大夫を見てゐる。今年六十歳になる大夫の、朱を塗つたやうな顔は、額が廣く腭が張つて、髪も鬚も銀色に光つてゐる。子供等は恐ろしいよりは不思議がつて、ぢつと其顔を見てゐるのである。

大夫は云つた。「買うて來た子供はそれか。いつも買ふ奴と違うて、何に使うて好いかわからぬ、珍らしい子供ぢやと云ふから、わざ〲連れて來させて見れば、色の蒼ざめた、か細い童共ぢや。何に使うて好いかは、わしにもわからぬ。」

傍から三郎が口を出した。末の弟ではあるが、もう三十になつてゐる。「いやお父つさん。さつきから見てゐれば、辭儀をせいと云はれても辭儀もせぬ。外の奴のやうに名告もせぬ。弱々しう見えてもしぶとい者共ぢや。奉公初は男が柴苅、女が汐汲と極まつてゐる。其通にさせなされい。」

「仰やるとほり、名はわたくしにも申しませぬ」と、奴頭が云つた。

大夫は嘲笑つた。「愚者と見える。名はわしが附けて遣る。姉はいたつきを垣衣、弟は我名を萱草ぢや。垣衣は濱へ往つて、日に三荷の潮を汲め。萱草は山へ往つて日に三荷の柴を刈れ。弱々しい體に免じて、荷は輕うして取らせる。」

三郎が云つた。「過分のいたはり樣ぢや。こりや、奴頭。早く連れて下がつて道具を渡して遣れ。」

奴頭は二人の子供を新參小屋に連れて往つて、安壽には桶と杓、厨子王には鎌籠とを渡した。どちらにも午餉を入れる樏子が添へてある。新參小屋は外の奴婢の居所とは別になつてゐるのである。

奴頭が出て行く頃には、もうあたりが暗くなつた。此屋には燈火もない。

翌日の朝はひどく寒かつた。ゆうべは小屋に備へてある衾が餘りきたないので、厨子王が薦を探して來て、舟で苫をかづいたやうに、二人でかづいて寢たのである。

きのふ奴頭に教へられたやうに、厨子王は樏子を持つて厨へ餉を受け取りに往つた。屋根の上、地にちらばつた藁の上には霜が降つてゐる。厨は大きい土間で、もう大勢の奴婢が來て待つてゐる。男と女とは受け取る場所が違ふのに、厨子王は姉のと自分のと貰はうとするので、一度は叱られたが、あすからは銘々が貰ひに來ると誓つて、やう〳〵樏子の外に、面桶に入れた饘と、木の椀に入れた湯との二人前をも受け取つた。饘は鹽を入れて炊いてある。

姉と弟とは朝餉を食べながら、もうかうした身の上になつては、運命の下に項を屈めるより外はないと、けなげにも相談した。そして姉は濱邊へ、弟は山路をさして行くのである。大夫が邸の三の木戸、二の木戸、一の木戸を一しよに出て、二人は霜を履んで、見返り勝に左右へ別れた。

厨子王が登る山は由良が嶽の裾で、石浦からは少し南へ行つて登るのである。柴を刈る所は、麓から遠くはない。所々紫色の岩の露れてゐる所を通つて、稍廣い平地

に出る。そこに雜木が茂つてゐるのである。

厨子王は雜木林の中に立つてあたりを見廻した。併し柴はどうして苅るものかと、暫くは手を著け兼ねて、朝日に霜の融け掛かる、茵のやうな落葉の上に、ぼんやりすわつて時を過した。やう／＼氣を取り直して、一枝二枝苅るうちに、厨子王は指を傷めた。そこで又落葉の上にすわつて、山でさへこんなに寒い。濱邊に往つた姉樣は、さぞ潮風が寒からうと、ひとり涙をこぼしてゐた。

日が餘程昇つてから、柴を背負つて麓へ降りる、外の樵が通り掛かつて、「お前も大夫の所の奴か、柴は日に何荷苅るのか」と問うた。

「日に三荷苅る筈の柴を、まだ少しも苅りませぬ」と厨子王は正直に云つた。

「日に三荷の柴ならば、午までに二荷苅るが好い。柴はかうして苅るものぢや。」樵は我荷を卸して置いて、すぐに一荷苅つてくれた。

厨子王は氣を取り直して、やう／＼午までに一荷苅り、午から又一荷苅つた。

濱邊に往く姉の安壽は、川の岸を北へ行つた。さて潮を汲む場所に降り立つたが、これも汐の汲みやうを知らない。心で心を勵まして、やう〱杓を卸すや否や、波が杓を取つて行つた。

隣で汲んでゐる女子が、手早く杓を拾つて戻した。そしてかう云つた。「汐はそれでは汲まれません。どれ汲みやうを敎へて上げよう。右手の杓でかう汲んで、左手の桶でかう受ける。」とう〱一荷汲んでくれた。

「難有うございます。汲みやうが、あなたのお蔭で、わかつたやうでございます。自分で少し汲んで見ませう。」安壽は汐を汲み覺えた。

隣で汲んでゐる女子に、無邪氣な安壽が氣に入つた。二人は午餉を食べながら、身の上を打ち明けて、姉妹の誓をした。これは伊勢の小萩と云つて、二見が浦から買はれて來た女子である。

最初の日はこんな工合に、姉が言ひ附けられた三荷の潮も、弟が言ひ附けられた

三荷の柴も、一荷づつの勸進を受けて、日の暮までに首尾好く調つた。

姉は潮を汲み、弟は柴を苅つて、一日一日と暮らして行つた。姉は濱で弟を思ひ、弟は山で姉を思ひ、日の暮を待つて小屋に歸れば、二人は手を取り合つて、筑紫にゐる父が戀しい、佐渡にゐる母が戀しいと、言つては泣き、泣いては言ふ。

兎角するうちに十日立つた。そして新參小屋を明けなくてはならぬ時が來た。小屋を明ければ、奴は奴、婢は婢の組に入るのである。

二人は死んでも別れぬと云つた。奴頭が大夫に訴へた。

大夫は云つた。「たはけた話ぢや。奴は奴の組へ引き摩つて往け。婢は婢の組へ引き摩つて往け。」

奴頭が承つて起たうとした時、二郎が傍から呼び止めた。そして父に言つた。「仰やる通に童共を引き分けさせても宜うございますが、童共は死んでも別れぬと申

すさうでございます。恐なものゆゑ、死ぬるかも知れません。苅る柴はわづかでも、沒む潮はいささかでも、人手を耗すのは損でございます。わたくしが好いやうに計らつて遣りませう。」

「それもさうか。損になる事はわしも嫌ぢや。どうにでも勝手にして置け。」大夫はかう云つて脇へ向いた。

二郎は三の木戸に小屋を掛けさせて、姉と弟とを一しよに置いた。

或日の暮に二人の子供は、いつものやうに父母の事を言つてゐた。それを二郎が通り掛かつて聞いた。二郎は邸を見廻つて、強い奴が弱い奴を虐げたり、諍をしたり、盜をしたりするのを取り締まつてゐるのである。

二郎は小屋に這入つて二人に言つた。「父母は戀しうても佐渡は遠い。筑紫はそれより又遠い。子供の往かれる所ではない。父母に逢ひたいなら、大きうなる日を待つが好い。」かう云つて出て行つた。

程經て又或日の暮に、二人の子供は父母の事を言つてゐた。それを今度は三郎が通り掛かつて聞いた。三郎は寢鳥を取ることが好で邸の內の木立々々を、手に弓矢を持つて見廻るのである。

二人は父母の事を言ふ度に、どうしようか、かうしようかと、逢ひたさの餘に、あらゆる手立を話し合つて、夢のやうな相談をもする。けふは姉がかう云つた。「大きくなつてからでなくては、遠い旅が出來ないと云ふのは、それは當り前の事よ。わたし達はその出來ない事がしたいのだわ。だがわたし好く思つて見ると、どうしても二人一しよにこゝを逃げ出しては駄目なの。わたしには構はないで、お前一人で逃げなくては。そして先へ筑紫の方へ往つて、お父様にお目に掛かつて、どうしたら好いか伺ふのだね。それから佐渡へお母様のお迎に往くが好いわ。」三郎が立聞をしたのは、生憎この安壽の詞であつた。

三郎は弓矢を持つて、つと小屋の內に這入つた。「こら。お主達は逃げる談合をして

をるな、逃亡の企をしたものには烙印をする。それが此邸の掟ぢや。赤うなつた鐵は熱いぞよ。」

二人の子供は眞つ蒼になつた。安壽は三郎が前に進み出て云つた。「あれは誠でございます。弟が一人で逃げたつて、まあ、どこまで往かれませう。餘り親に逢ひたいので、あんな事を申しました。こなひだも弟と一しよに、鳥になつて飛んで往かうと申したこともございます。出放題でございます。」

厨子王は云つた。「姉えさんの云ふ通りです。いつでも二人で今のやうな、出來ない事ばかし言つて、父母の戀しいのを紛らしてゐるのです。」

三郎は二人の顏を見較べて、暫くの間默つてゐた。「ふん。誠なら誠でも好い。お主達が一しよにをつて、なんの話をすると云ふことを、己が慥に聞いて置いたぞ。」から云つて三郎は出て行つた。

其晩は二人が氣味惡く思ひながら寢た。それからどれ丈寐たかわからない。二人は

ふと物音を聞き附けて目を醒ました。今の小屋に來てからは、燈火を置くことが許されてゐる。その微かな明りで見れば、枕元に三郎が立つてゐる。三郎は、つと寄つて、兩手で二人の手を摑まへる。そして引き立てゝ戸口を出る。蒼ざめた月を仰ぎながら、二人は目見えの時に通つた、廣い馬道を引かれて行く。階を三段登る。廊を通る。廻り廻つて前の日に見た廣間に這入る。そこには大勢の人が默つて並んでゐる。三郎は二人を炭火の眞つ赤におこつた爐の前まで引き摩つて出る。二人は小屋で引き立てられた時から、只「御免なさい〳〵」と云つてゐたが、三郎は默つて引き摩つて行くので、しまひには二人も默つてしまつた。爐の向側には茵三枚を疊ねて敷いて、山椒大夫がすわつてゐる。大夫の赤顏が、座の右左に焚いてある炬火を照り反して、燃えるやうである。三郎は炭火の中から、赤く燒けてゐる火筋を拔き出す。それを手に持つて、暫く見てゐる。初め透き通るやうに赤くなつてゐた鐵が、次第に黑ずんで來る。そこで三郎は安壽を引き寄せて、火筋を顏に當てようとする。厨子王は其肘に

絡み附く。三郎はそれを蹴倒して右の膝に敷く。とう〳〵火筋を安壽の額に十文字に當てる。安壽の悲鳴が一座の沈默を破つて響き渡る。三郎は安壽を衝き放して、膝の下の厨子王を引き起し、其額にも火筋を十文字に當てる。新に響く厨子王の泣聲が、稍微かになつた姉の聲に交る。三郎は火筋を棄てゝ、初め二人を此廣間へ連れて來た時のやうに、又二人の手を摑まへる。そして一座を見渡した後、廣い母屋を廻つて、二人を三段の階の所まで引き出し、凍つた土の上に衝き落す。二人の子供は創の痛と心の恐とに氣を失ひさうになるのを、やう〳〵堪へ忍んで、どこをどう歩いたともなく、三の木戸の小家に歸る。臥所の上に倒れた二人は、暫く死骸のやうに動かずにゐたが、忽ち厨子王が「姉えさん、早くお地藏樣を」と叫んだ。安壽はすぐに起き直つて、肌の守袋を取り出した。わなゝく手に紐を解いて、袋から出した佛像を枕元に据ゑた。二人は右左にぬかづいた。其時齒をくひしばつてもこらへられぬ額の痛が、搔き消すやうに失せた。掌で額を撫でて見れば、創は痕もなくなつた。はつと思つ

て、二人は目を醒ました。
二人の子供は起き直つて夢の話をした。同じ夢を同じ時に見たのである。安壽は守本尊を取り出して、夢で据ゑたと同じやうに、枕元に据ゑた。二人はそれを伏し拜んで、微かな燈火の明りにすかして、地藏尊の額を見た。白毫の右左に、鑿で彫つたやうな十文字の疵があざやかに見えた。

二人の子供が話を三郎に立聞せられて、其晩恐ろしい夢を見た時から、安壽の樣子がひどく變つて來た。顔には引き締まつたやうな表情があつて、眉の根には皺が寄り、目は遙に遠い處を見詰めてゐる。そして物を言はない。日の暮に濱から歸ると、これまでは弟の山から歸るのを待ち受けて、長い話をしたのに、今はこんな時にも詞少にしてゐる。厨子王が心配して、「姉えさんどうしたのです」と云ふと、「どうもしないの、大丈夫よ」と云つて、わざとらしく笑ふ。

安壽の前と變つたのは只これだけで、言ふ事が間違つてもをらず、爲る事も平生の通である。併し厨子王は互に慰めもし、慰められもした一人の姉が、變つた樣子をするのを見て、際限なくつらく思ふ心を、誰に打ち明けて話すことも出來ない。二人の子供の境界は、前より一層寂しくなつたのである。

雪が降つたり歇んだりして、年が暮れ掛かつた。奴も婢も外に出る爲事を止めて、家の中で働くことになつた。安壽は絲を紡ぐ。厨子王は藁を擣つ。藁を擣つのは修行はいらぬが、絲を紡ぐのはむづかしい。それを夜になると伊勢の小萩が來て、手傳つたり敎へたりする。安壽は弟に對する樣子が變つたばかりでなく、小萩に對しても詞少になつて、動もすると不愛想をする。併し小萩は機嫌を損せずに、いたはるやうにして附き合つてゐる。

山椒大夫が邸の木戸にも松が立てられた。併しこゝの年の始めは何の晴れがましい事もなく、又族の女子達は奥深く住んでゐて、出入することが稀なので、賑はしい事。

もない。只上も下も酒を飲んで、奴の小屋には諍が起るだけである。常は諍をすると、嚴しく罰せられるのに、かう云ふ時は奴頭が大目に見る。血を流しても知らぬ顔をしてゐることがある。どうかすると、殺されたものがあつても構はぬのである。

寂しい三の木戸の小屋へは、折々小萩が遊びに來た。婢の小屋の賑はしさを持つて來たかと思ふやうに、小萩が話してゐる間は、陰氣な小屋も春めいて、此頃樣子の變つてゐる安壽の顔にさへ、めつたに見えぬ微笑の影が浮ぶ。

三日立つと、又家の中の爲事が始まつた。安壽は絲を紡ぐ。厨子王は藁を擣つ。もう夜になつて小萩が來ても、手傳ふに及ばぬ程、安壽は紡錘を廻すことに慣れた。樣子は變つてゐても、こんな靜かな、同じ事を繰り返すやうな爲事をするには差支なく、又爲事が却つて一向になつた心を散らし、落著を與へるらしく見えた。姉と前のやうに話をすることの出來ぬ厨子王は、紡いでゐる姉に、小萩がゐて物を言つてくれるのが、何よりも心強く思はれた。

水が溫み、草が萠える頃になつた。あすからは外の爲事が始まると云ふ日に、二郎が邸を見廻る序に、三の木戶の小屋に來た。「どうぢやな。あす爲事に出られるかな。大勢の人の中には病氣でをるものもある。奴頭の話を聞いたばかりではわからぬから、けふは小屋々々を皆見て廻つたのぢや。」

藁を擣つてゐた厨子王が返事をしようとして、まだ詞を出さぬ間に、此頃の樣子にも似ず、安壽が絲を紡ぐ手を止めて、つと二郎の前に進み出た。「それに就いてお願がございます。わたくしは弟と同じ所で爲事がいたしたうございます。どうか一しよに山へ遣つて下さるやうに、お取計らひなすつて下さいまし。」蒼ざめた顏に紅が差して、目が赫いてゐる。

厨子王は姉の樣子が二度目に變つたらしく見えるのに驚き、又自分になんの相談もせずにゐて、突然柴苅に往きたいと云ふのをも訝しがつて、只目を睜つて姉をまもつ

てゐる。
二郎は物を言はずに、安壽の様子をぢつと見てゐる。安壽は「外にない、只一つのお願でございます、どうぞ山へお遣なすつて」と繰り返して言つてゐる。
暫くして二郎は口を開いた。「此邸では奴婢のなにがしになんの爲事をさせると云ふことは、重い事にしてあつて、父がみづから極める。併し垣衣、お前の願はよく／＼思ひ込んでの事と見える。わしが受け合つて取りなして、きつと山へ往かれるやうにして遣る。安心してゐるが好い。まあ、二人の穉いものが無事に冬を過して好かつた。」かう云つて小屋を出た。
厨子王は杵を措いて姉の側に寄つた。「姉えん。どうしたのです。それはあなたが一しよに山へ來て下さるのは、わたしも嬉しいが、なぜ出し抜に賴んだのです。なぜわたしに相談しません。」
姉の顔は喜に赫いてゐる。「ほんにさうお思ひのは尤もだが、わたしだつてあの人

の顔を見るまで、頼まうとは思つてゐなかつたの。ふいと思ひ附いたのだもの。」

「さうですか。感心ですなあ。」厨子王は珍らしい物を見るやうに姉の顔を眺めてゐる。

奴頭が籠と鎌とを持つて這入つて來た。「垣衣さん。お前に汐汲をよさせて、柴を苅りに遣るのださうで、わしは道具を持つて來た。代りに桶と杓を貰つて往かう。」

「これはどうもお手數でございました。」安壽は身輕に立つて、桶と杓とを出して返した。

奴頭はそれを受け取つたが、まだ歸りさうにはしない。顔には一種の苦笑のやうな表情が現れてゐる。此男は山椒大夫一家のものゝ言附を、神の託宣を聽くやうに聽く。そこで隨分情ない、苛酷な事をもためらはずにする。併し生得、人の悶え苦んだり、泣き叫んだりするのを見たがりはしない。物事が穩かに運んで、そんな事を見ずに濟めば、其方が勝手である。今の苦笑のやうな表情は人に難儀を掛けずには濟まぬとあきらめて、何か言つたり、したりする時に、此男の顔に現れるのである。

奴頭は安壽に向いて云つた。「さて今一つ用事があるて。實はお前さんを柴苅に遣る事は、二郎様が大夫様に申し上げて拵へなさつたのぢや。すると其座に三郎様がをられて、そんなら垣衣を大童にして山へ遣れと仰つた。大夫様は、好い思附ぢやとお笑なされた。そこでわしはお前さんの髮を貰うて往かねばならぬ。」

傍で聞いてゐる厨子王は、此詞を胸を刺されるやうな思をして聞いた。そして目に涙を浮べて姉を見た。

意外にも安壽の顔からは喜の色が消えなかつた。「ほんにさうぢや。柴苅に往くからは、わたしも男ぢや。どうぞ此鎌で切つて下さいまし。」安壽は奴頭の前に項を伸ばした。

光澤のある、長い安壽の髮が、鋭い鎌の一掻にさつくり切れた。

あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ腰に鎌を挿して、手を引き合つて木戸を出

た。山椒大夫の所に來てから、二人一しよに歩くのはこれが始である。

厨子王は姉の心を忖り兼ねて、寂しいやうな、悲しいやうな思に胸が一ぱいになつてゐる。きのふも奴頭の歸つた跡で、いろ〳〵に詞を設けて尋ねたが、姉はひとりで何事をか考へてゐるらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまつた。

山の麓に來た時、厨子王はこらへ兼ねて云つた。「姉えさん。わたしはかうして久し振で一しよに歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはかうして手を引いてゐながら、あなたの方へ向いて、その禿になつたお頭を見ることが出來ません。姉えさん。あなたはわたしに隱して、何か考へてゐますね。なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです。」

安壽はけさも毫光のさすやうな喜を額に湛へて、大きい目を赫かしてゐる。併し弟の詞には答へない。只引き合つてゐる手に力を入れただけである。

山に登らうとする所に沼がある。汀には去年見た時のやうに、枯葦が縱横に亂れて

ゐるが、道端の草には黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔から右に折れて登ると、そこに岩の隙間から清水の湧く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見つゝ、うねつた道を登つて行くのである。

丁度岩の面に朝日が一面に差してゐる。安壽は疊なり合つた岩の、風化した間に根を卸して、小さい菫の咲いてゐるのを見附けた。そしてそれを指さして厨子王に見せて云つた。「御覽。もう春になるのね。」

厨子王は默つて頷いた。姉は胸に祕密を蓄へ、弟は憂ばかりを抱いてゐるので、兎角受應が出來ずに、話は水が砂に沁み込むやうにとぎれてしまふ。

去年柴を苅つた木立の邊に來たので、厨子王は足を駐めた。「ねえさん。ここらで苅るのです。」

「まあ、もつと高い所へ登つて見ませうね。」安壽は先に立つてずん〳〵登つて行く。厨子王は訝りながら附いて行く。暫くして雜木林よりは餘程高い、外山の頂とも云

ふべき所に來た。

安壽はそこに立つて、南の方をぢつと見てゐる。目は、石浦を經て由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり隔つた川向に、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山に止まつた。そして「廚子王や」と弟を呼び掛けた。「わたしが久しい前から考事をしてゐて、お前ともいつもの樣に話をしないのを、變だと思つてゐたでせうね。もうけふは柴なんぞは苅らなくても好いから、わたしの言ふ事を好くお聞。小萩は伊勢から賣られて來たので、故郷から此土地までの道を、わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引き返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。お母あ樣と御一しよに岩代を出てから、わたし共は恐ろしい人にばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、此土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登つておくれ。神佛のお導

で、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたお父う様のお身の上も知れよう。佐渡へお母あ様のお迎に往くことも出來よう。籠や鎌は棄てて置いて、樏子だけ持つて往くのだよ。」

厨子王は默つて聞いてゐたが、涙が頬を傳つて流れて來た。「そして、姉えさん、あなたはどうしようと云ふのです。」

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにする積でしておくれ。お父う様にもお目に掛かり、お母あ様をも島からお連申した上で、わたしをたすけに來ておくれ。」

「でもわたしがゐなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。」厨子王が心には烙印をせられた、恐ろしい夢が浮ぶ。

「それは意地めるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買つた婢をあの人達は殺しはしません。多分お前がゐなくなつたら、わたしを二人前働かせよう

とするでせう。お前の敎へてくれた木立の所で、わたしは柴を澤山苅ります。六荷までは苅れないでも、四荷でも五荷でも苅りませう。さあ、あそこまで降りて行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」かう云つて安壽は先に立つて降りて行く。

厨子王はなんとも思ひ定め兼ねて、ぼんやりして附いて降りる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上物に憑かれたやうに、聰く賢しくなつてゐるので、厨子王は姉の詞に背くことが出來ぬのである。

木立の所まで降りて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、こん度逢ふまでお前に預けます。此地藏樣をわたしだと思つて、護刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ。」

「でも姉えさんにお守がなくては。」

「いゝえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らな

いと、きつと討手が掛かります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追ひ附かれるに極まつてゐます。さつき見た川の上手を和江と云ふ所まで往つて、首尾好く人に見附けられずに、向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えてゐたお寺に這入つて隱しておもらひ。暫くあそこに隱れてゐて、討手が歸つて來た跡で、寺を逃げてお出。」

「でもお寺の坊さんが隱して置いてくれるでせうか。」

「さあ、それが運驗しだよ。開ける運なら坊さんがお前を隱してくれませう。」

「さうですね。姉えさんのけふ仰やる事は、まるで神樣か佛樣が仰やるやうです。わたしは考を極めました。なんでも姉えさんの仰やる通にします。」

「おう、好く聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隱してくれます。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都へも往かれます。お父う樣やお母あ樣にも逢はれます。姉えさんのお迎にも來られます。」厨子王の目が姉

と同じ樣に赫いて來た。

「さあ、麓まで一しよに行くから、早くお出。」

二人は急いで山を降りた。足の運も前とは違つて、姉の熱した心持が、暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の湧く所へ來た。姉は樏子に添へてある木の椀を出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」かう云つて一口飮んで弟に差した。

弟は椀を飮み干した。「そんなら姉えさん、御機嫌好う。きつと人に見附からずに、中山まで參ります。」

厨子王は十歩ばかり殘つてゐた坂道を、一走りに驅け降りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向かつて急ぐのである。

安壽は泉の畔に立つて、並木の松に隱れては又現れる後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸にけふは此方角の

山で木を樵る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。

後に同胞を捜しに出た、山椒大夫一家の討手が、此坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履であつた。

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が籠み入つて來る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挾んだ、山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に云つた。「これへ參つたのは、石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人が、此山に逃げ込んだのを、慥に認めたものがある。隱れ場は寺内より外にはない。すぐにこゝへ出して貰はう。」附いて來た大勢が、「さあ、出して貰はう、出して貰はう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。其石の上には、今手に〳〵松明を

持つた、三郎が手のものが押し合つてゐる。又石疊の兩側には、境内に住んでゐる限の僧俗が、殆ど一人も殘らず簇つてゐる。これは討手の群が門外で騷いだ時、內陣からも、庫裡からも、何事が起つたかと、怪んで出て來たのである。

初め討手が門外から門を開けいと叫んだ時、開けて入れたら、亂暴をせられはすまいかと心配して、開けまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師が開けさせた。併し今三郎が大聲で、逃げた奴を出せと云ふのに、本堂は戶を閉ぢた儘、暫くの間ひつそりとしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰り返した。手のもの丶中から「和尙さん、どうしたのだ」と呼ぶものがある。それに短い笑聲が交る。

やうやうの事で本堂の戶が靜かに開いた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明を背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い巖疊な體と、眉のまだ黑い廉張つた顏とが、搖めく火に照らし

出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。
律師は徐に口を開いた。騒がしい討手のものも、律師の姿を見ただけで默つたので、聲は隅々まで聞えた。「逃げた下人を捜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて、多人數押し寄せて參られ、三門を開けと云はれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思うて、三門を開けさせた。それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かれると、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうも知れぬ。そこを好う思うて見て、早う引き取られたが好からう。惡い事は言はぬ。お身達のためぢや。」かう云つて律師は徐かに戸を締めた。
三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。併し戸を打ち破つて踏み込むだけの勇氣もな

かつた。手のもの共は只風に木葉のざわつくやうに囁きかはしてゐる。

此時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたと云ふのは十二三の小わつぱぢやあらう。それならわしが知つてをる。」

三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、此寺の鐘樓守である。親爺は詞を續いで云つた。「そのわつぱはな、わしが午頃鐘樓から見てをると、築泥の外を通つて南へ急いだ。かよわい代には身が輕い。もう大分の道を行つたぢやろ。」

「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。續け」と云つて三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やう／＼落ち著いて寝ようとした鴉が二三羽又驚いて飛び立つた。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた討手が田邊まで往つて引き返した事を聞いて來た。

中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。跡からは頭を剃りこくつて三衣を著た厨子王が附いて行く。

二人は眞晝に街道を歩いて、夜は所々の寺に泊つた。山城の朱雀野に來て、律師は權現堂で休んで、厨子王に別れた。「守本尊を大切にして往け、父母の消息はきつと知れる」と言ひ聞かせて、律師は踵を旋した。亡くなつた姉と同じ事を言ふ坊樣だと、厨子王は思つた。

都に上つた厨子王は、僧形になつてゐるので、東山の清水寺に泊つた。

籠堂に寢て、あくる朝目が醒めると、直衣に烏帽子を著て指貫を穿いた老人が、枕元に立つてゐて云つた。「お前は誰の子ぢや。何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞ己に見せてくれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆうべこゝに參籠した。すると夢にお告があつた。左の格子に寢てゐる童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませいと云ふ事ぢや。けさ左の格子に來て見れば、お前がゐる。どうぞ己に身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。己は關白師實ぢや。」

厨子王は云つた。「わたくしは陸奧椽正氏と云ふものゝ子でございます。父は十二年前に筑紫の安樂寺へ往つた切り、歸らぬさうでございます。母は其年に生れたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡に住むことになりました。そのうちわたくしが大ぶ大きくなつたので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐ろしい人買に取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしとは丹後の由良へ賣られました。姉は由良で亡くなりました。わたくしの持つてゐる守本尊

は此地藏様でございます。かう云つて守本尊を出して見せた。

師實は佛像を手に取つて、先づ額に當てるやうにして禮をした。それから面背を打ち返し打ち返し、丁寧に見て云つた。「これは兼ねて聞き及んだ、尊い放光王地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にしてお出なされた。これを持ち傳へてをるからは、お前の家柄に紛れはない。仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初に、國守の違格に連座して、筑紫へ左遷せられた平正氏が嫡子に相違あるまい。若し還俗の望があるなら、追つては受領の御沙汰もあらう。先づ當分は己の家の客にする。己と一しよに館へ來い。」

關白師實の娘と云つたのは、仙洞に傅いてゐる養女で、實は妻の姪である。此后は久しい間病氣でゐられたのに、厨子王の守本尊を借りて拜むと、すぐに拭ふやうに本復せられた。

師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に正氏が謫所へ、赦免狀を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。併し此使が往つた時、正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名告つてゐる厨子王は、身の窶れる程歎いた。

其年の秋の除目に正道は丹後の國守にせられた。これは遙授の官で、任國には自分で往かずに、椽を置いて治めさせるのである。併し國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁じた。そこで山椒大夫も悉く奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。大夫が家では一時それを大きい損失のやうに思つたが、此時から農作も工匠の業も前に增して盛になつて、一族はいよ〳〵富み榮えた。國守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、國守の姉をいたはつた小萩は故郷へ還された。安壽が亡き迹は懇に弔はれ、又入水した沼の畔には尼寺が立つことになつた。

正道は任國のためにこれだけの事をして置いて、特に假寧を申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

佐渡の國府は雜太と云ふ所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。

或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立ち並んだ所を離れて、畑中の道に掛かつた。空は好く晴れて日があか／＼と照つてゐる。正道は心の中に、「どうしてお母あ樣の行方が知れないのだらう、若し役人なんぞに任せて調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神佛が憎んで逢はせて下さらないのではあるまいか」などと思ひながら歩いてゐる。ふと見れば、大ぶ大きい百姓家がある。家の南側の疎な生垣の內が、土を敲き固めた廣場になつてゐて、其上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈り取つた粟の穗が干してある。その眞ん中に、襤褸を著た女がすわつて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つてゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、此女に心が牽かれて、立ち止まつて覗いた。女の亂れた髮は

塵に塗れてゐる。顏を見れば盲である。正道はひどく哀れに思つた。そのうち女のつぶやいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて來た。それと同時に正道は瘧病のやうに身内が震つて、目には涙が湧いて來た。女はかう云ふ詞を繰り返してつぶやいてゐたのである。

安壽戀しや、ほうやれほ。
厨子王戀しや、ほうやれほ。
鳥も生あるものなれば、
疾う〳〵逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、此詞に聞き惚れた。そのうち臓腑が煮え返るやうになつて、獸めいた叫が口から出ようとするのを、歯を食ひしばつてこらへた。忽ち正道は縛られた縄が解けたやうに垣の内へ駆け込んだ。そして足には粟の穗を踏み散らしつつ、女の前に俯伏した。右の手には守本尊を捧げ持つて、俯伏した時に、それを額に

押し當ててゐた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知つた。そしていつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目でぢつと前を見た。其時干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出た。女は目が開いた。

「厨子王」と云ふ叫が女の口から出た。二人はぴつたり抱き合つた。（終）

寒山拾得

唐の貞觀の頃だと云ふから、西洋は七世紀の初日本は年號と云ふもののやつと出來掛かつた時である。閭丘胤と云ふ官吏がゐたさうである。尤もそんな人はゐなかつたらしいと云ふ人もある。なぜかと云ふと、閭は台州の主簿になつてゐたと言ひ傳へられてゐるのに、新舊の唐書に傳が見えない。主簿と云へば、刺史とか太守とか云ふと同じ官である。支那全國が道に分れ、道が州又は郡に分れ、それが縣に分れ、縣の下に鄕があり鄕の下に里がある。州には刺史と云ひ、郡には太守と云ふ。一體日本で縣より小さいものに郡の名を附けてゐるのは不都合だと、吉田東伍さんなんぞは不服を唱へてゐる。閭が果して台州の主簿であつたとすると日本の府縣知事位の官吏である。さうして見ると、唐書の列傳に出てゐる筈だと云ふのである。しかし閭がゐなくては話が成り立たぬから、兎も角もゐたことにして置くのである。

さて閭が台州に著任してから三日目になつた。長安で北支那の土埃を被つて、濁つた水を飲んでゐた男が台州に來て中央支那の肥えた土を踏み、澄んだ水を飲むことになつたので、上機嫌である。それに此三日の間に、多人數の下役が來て謁見をする。受持々々の事務を形式的に報告する。その慌ただしい中に、地方長官の威勢の大きいことを味つて、意氣揚々としてゐるのである。

閭は前日に下役のものに言つて置いて、今朝は早く起きて、天台縣の國清寺をさして出掛けることにした。これは長安にゐた時から、台州に著いたら早速往かうと極めてゐたのである。

何の用事があつて國清寺へ往くかと云ふと、それには因縁がある。閭が長安で主簿の任命を受けて、これから任地へ旅立たうとした時、生憎こらへられぬ程の頭痛が起つた。單純なレウマチス性の頭痛ではあつたが、閭は平生から少し神經質であつたので、掛かり附の醫者の藥を飲んでもなか〳〵なほらない。これでは旅立の日を延ばさ

なくてはなるまいかと云つて、女房と相談してゐると、そこへ小女が來て、「只今御門の前へ乞食坊主がまゐりまして、御主人にお目に掛かりたいと申しますがいかがいたしませう」と云つた。

「ふん、坊主か」と云つて閭は暫く考へたが、「兎に角逢つて見るから、こゝへ通せ」と言ひ附けた。そして女房を奥へ引つ込ませた。

元來閭は科擧に應ずるために、經書を讀んで、五言の詩を作ることを習つたばかりで、佛典を讀んだこともなく、老子を研究したこともない。しかし僧侶や道士と云ふものに對しては、何故と云ふこともなく尊敬の念を持つてゐる。自分の會得せぬものに對する、盲目の尊敬とでも云はうか。そこで坊主と聞いて逢はうと云つたのである。

間もなく這入つて來たのは、一人の背の高い僧であつた。垢つき弊れた法衣を着て、長く伸びた髮を、眉の上で切つてゐる。目に被さつてうるさくなるまで打ち遣つ

て置いたものと見える。手には鐵鉢を持つてゐる。
僧は默つて立つてゐるので閭が問うて見た。「わたしに逢ひたいと云はれたさうだが、なんの御用かな。」
僧は云つた。「あなたは台州へお出なさることにおなりなすつたさうでございますね。それに頭痛に惱んでお出なさると申すことでございます。わたくしはそれを直して進ぜようと思つて參りました。」
「いかにも言はれる通で、其頭痛のために出立の日を延ばさうかと思つてゐますが、どうして直してくれられる積か。何か藥方でも御存じか。」
「いや。四大の身を惱ます病は幻でございます。只清淨な水が此受糧器に一ぱいあれば宜しい。呪で直して進ぜます。」
「はあ。呪をなさるのか。」かう云つて少し考へたが「仔細あるまい、一つまじなつて下さい」と云つた。これは醫道の事などは平生深く考へてもをらぬので、どう云ふ治

療ならさせる、どう云ふ治療ならさせぬと云ふ定見がないから、只自分の悟性に依頼して、其折々に判斷するのであつた。勿論さう云ふ人だから、掛かり附の醫者と云ふのも善く人選をしたわけではなかつた。素問や靈樞でも讀むやうな醫者を捜して極めてゐたのではなく、近所に住んでゐて呼ぶのに面倒のない醫者に懸かつてゐたのだから、ろくな藥は飮ませて貰ふことが出來なかつたのである。今乞食坊主に頼む氣になつたのは、なんとなくえらさうに見える坊主の態度に信を起したのと、水一ぱいでするなら間違つた處で危險な事もあるまいと思つたのとのためである　丁度東京で高等官連中が紅療治や氣合術に依賴するのと同じ事である。

閭は小女を呼んで、汲立の水を鉢に入れて來いと命じた。水が來た。僧はそれを受け取つて、胸に捧げて、ぢつと閭を見詰めた。清淨な水でも好ければ、不潔な水でも好い、湯でも茶でも好いのである。不潔な水でなかつたのは、閭がためには勿怪の幸であつた。暫く見詰めてゐるうちに、閭は覺えず精神を僧の捧げてゐる水に集注

した。
此時僧は鐵鉢の水を口に銜んで、突然ふつと閭の頭に吹き懸けた。
閭はびつくりして、背中に冷汗が出た。
「お頭痛は」と僧が問うた。
「あ。癒りました。」實際閭はこれまで頭痛がする、頭痛がすると氣にしてゐて、どうしても癒らせずにゐた頭痛を、坊主の水に氣を取られて、取り逃がしてしまつたのである。
僧は徐かに鉢に殘つた水を床に傾けた。そして「そんならこれでお暇をいたします」と云ふや否や、くるりと閭に背中を向けて、戸口の方へ歩き出した。
「まあ、一寸」と閭が呼び留めた。
僧は振り返つた。「何か御用で。」
「寸志のお禮がいたしたいのですが。」

「いや。わたくしは群生を福利し、憍慢を折伏するために、乞食はいたしますが、療治代は戴きませぬ。」

「なる程。それでは强ひては申しますまい。あなたはどちらのお方か、それを伺つて置きたいのですが。」

「これまでをつた處でございますか。それは天台の國淸寺で。」

「はあ。天台にをられたのですな。お名は。」

「豐干と申します。」

「天台國淸寺の豐干と仰しやる。」閭はしつかりおぼえて置かうと努力するやうに、眉を顰めた。「わたしもこれから台州へ往くものであつて見れば、殊さらお懷かしい。序だから伺ひたいが、台州には逢ひに往つて爲めになるやうな、えらい人はをられませんかな。」

「さやうでございます。國淸寺に拾得と申すものがをります。實は普賢でございま

す。それから寺の西の方に、寒巖と云ふ石窟があつて、そこに寒山と申すものがをり
ます。實は文殊でございます。さやうならお暇をいたします。」かう言つてしまつて、
ついと出て行つた。

かう云ふ因縁があるので、閭は天台の國清寺をさして出懸けるのである。

全體世の中の人の、道とか宗教とか云ふものに對する態度に三通りある。自分の職業に氣を取られて、唯營々役々と年月を送つてゐる人は、道と云ふものを顧みない。これは讀書人でも同じ事である。勿論書を讀んで深く考へたら、道に到達せずにはゐられまい。しかしさうまで考へないでも、日々の務だけは辨じて行かれよう。これは全く無頓著な人である。

次に著意して道を求める人がある。專念に道を求めて、萬事を抛つこともあれば、日々の務は怠らずに、斷えず道に志してゐることもある。儒學に入つても、道教に

入つても、佛法に入つても基督教に入つても同じ事である。かう云ふ人が深く這入り込むと日々の務が即ち道そのものになつてしまふ。約めて言へばこれは皆道を求める人である。

この無頓著な人と、道を求める人との中間に、道と云ふもの丶存在を客觀的に認めてゐて、それに對して全く無頓著だと云ふわけでもなく、さればと云つて自ら進んで道を求めるでもなく、自分をば道に疎遠な人だと諦念め、別に道に親密な人がゐるやうに思つて、それを尊敬する人がある。尊敬はどの種類の人にもあるが、單に同じ對象を尊敬する場合を顧慮して云つて見ると、道を求める人なら遲れてゐるものが進んでゐるものを尊敬することになり、こゝに言ふ中間人物なら、自分のわからぬもの、會得することの出來ぬものを尊敬することになる。そこに盲目の尊敬が生ずる。盲目の尊敬では、偶それをさし向ける對象が正鵠を得てゐても、なんにもならぬのである。

閭は衣服を改め輿に乗つて、台州の官舍を出た。從者が數十人ある。

時は冬の初で、霜が少し降つてゐる。椒江の支流で、始豐溪と云ふ川の左岸を迂回しつつ北へ進んで行く。初め陰つてゐた空がやうやう晴れて、蒼白い日が岸の紅葉を照してゐる。路で出合ふ老幼は、皆輿を避けて跪く。輿の中では閭がひどく好い心持になつてゐる。牧民の職にゐて賢者を禮すると云ふのが、手柄のやうに思はれて、閭に滿足を與へるのである。

台州から天台縣までは六十里半程である。日本の六里半程である。ゆる〳〵輿を舁かせて來たので、縣から役人の迎へに出たのに逢つた時、もう午を過ぎてゐた。知縣の官舍で休んで、馳走になりつゝ聞いて見ると、こゝから國淸寺までは、爪尖上りの道が又六十里ある。往き著くまでには夜に入りさうである。そこで閭は知縣の官舍に泊ることにした。

翌朝知縣に送られて出た。けふもきのふに變らぬ天氣である。一體天台一萬八千丈

とは、いつ誰が測量したにしても、所詮高過ぎるやうだが、兎に角虎のゐる山である。道はなか〳〵きのふのやうには捗らない。途中で午飯を食つて、日が西に傾き掛かつた頃、國淸寺の三門に著いた。智者大師の滅後に、隋の煬帝が立てたと云ふ寺である。

寺でも主簿の御參詣だと云ふので、おろそかにはしない。道翹と云ふ僧が出迎へて、閭を客間に案內した。さて茶菓の饗應が濟むと、閭が問うた。「當時に豐干と云ふ僧がをられましたか。」

道翹が答へた。「豐干と仰やいますか。それは先頃まで、本堂の背後の僧院にをられましたが、行脚に出られた切、歸られませぬ。」

「當寺ではどう云ふ事をしてをられましたか。」

「さやうでございます、僧共の食べる米を舂いてをられました。」

「はあ。そして何か外の僧達と變つたことはなかつたのですか。」

「いえ。それがございましたので、初め只骨惜みをしない、親切な同宿だと存じてゐました豊干さんを、わたくし共が大切にいたすやうになりました。すると或る日ふいと出て行つてしまはれました。」

「それはどう云ふ事があつたのですか。」

「全く不思議な事でございました。或る日山から虎に騎つて歸つて參られたのでございます。そして其儘廊下へ這入つて、虎の背で詩を吟じて歩かれました。一體詩を吟ずることの好な人で、裏の僧院でも、夜になると詩を吟ぜられました。」

「はあ。活きた阿羅漢ですな。其僧院の址はどうなつてゐますか。」

「只今も明家になつてをりますが、折々夜になると、虎が參つて吼えてをります。」

「そんなら御苦勞ながら、そこへ御案内を願ひませう。」かう云つて、閭は座を起つた。

道翹は蛛の網を拂ひつゝ先に立つて、閭を豊干のゐた明家に連れて行つた。日がもう暮れ掛かつたので、薄暗い屋内を見廻すに、がらんとして何一つ無い。道翹は身を

屈めて石疊の上の虎の足跡を指さした。偶山風が窓の外を吹いて通つて、堆い庭の落葉を捲き上げた。其音が寂寞を破つてざわ〳〵と鳴ると、閭は髮の毛の根を締め附けられるやうに感じて、全身の肌に粟を生じた。

閭は忙しげに明家を出た。そして跡から附いて來る道翹に言つた。「拾得と云ふ僧はまだ當寺にをられますか。」

道翹は不審らしく閭の顏を見た。好く御存じでございます。先刻あちらの厨で、寒山と申すものと火に當つてをりましたから、御用がおありなさるなら、呼び寄せませうか。」

「はゝあ。寒山も來てをられますか。それは願つても無い事です。どうぞ御苦勞序に厨に御案内を願ひませう。」

「承知いたしました」と云つて、道翹は本堂に附いて西へ歩いて行く。

閭が背後から問うた。「拾得さんはいつ頃から當寺にをられますか。」

「もう餘程久しい事でございます。あれは豐干さんが松林の中から拾つて歸られた捨子でございます。」

「はあ。そして當寺では何をしてをられますか。」

「拾はれて參つてから三年程立ちました時、食堂で上座の像に香を上げたり、燈明を上げたり、其外供へものをさせたりいたしましたさうでございます。そのうち或る日上座の像に食事を供へて置いて、自分が向き合つて一しよに食べてゐるのを見付けられましたさうでございます。賓頭盧尊者の像がどれだけ尊いものか存ぜずにいたしたことゝ見えます。唯今では厨で僧共の食器を洗はせてをります。」

「はあ」と言つて、閭は二足三足歩いてから問うた。「それから唯今寒山と仰しやつたが、それはどう云ふ方ですか。」

「寒山でございますか。これは當寺から西の方の寒巖と申す石窟に住んでをりますものでございます。拾得が食器を滌ひます時、殘つてゐる飯や菜を竹の筒に入れて取つ

て置きますと、寒山はそれを貰ひに參るのでございます。」

「なる程」と云つて、閭は附いて行く。心の中では、そんな事をしてゐる寒山、拾得が文殊、普賢なら、虎に騎つた豐干はなんだらうなどと、田舍者が芝居を見て、どの役がどの俳優かと思ひ惑ふ時のやうな氣分になつてゐるのである。

「甚だむさくるしい所で」と云ひつゝ、道翹は閭を厨の中に連れ込んだ。

こゝは湯氣が一ぱい籠もつてゐて、遽に這入つて見ると、しかと物を見定めることも出來ぬ位である。その灰色の中に大きい竈が三つあつて、どれにも殘つた薪が眞赤に燃えてゐる。暫く立ち止まつて見てゐるうちに、石の壁に沿うて造り附けてある卓の上で大勢の僧が飯や菜や汁を鍋釜から移してゐるのが見えて來た。

この時道翹が奧の方へ向いて、「おい、拾得」と呼び掛けた。

閭が其視線を辿つて、入口から一番遠い竈の前を見ると、そこに二人の僧の蹲つ

て火に當つてゐるのが見えた。
一人は髮の二三寸伸びた頭を剃き出して、足には草履を穿いてゐる。今一人は木の皮で編んだ帽を被つて、足には木履を穿いてゐる。どちらも瘦せて身すぼらしい小男で、豐干のやうな大男ではない。
道翹が呼び掛けた時、頭を剃き出した方は振り向いてにやりと笑つたが、返事はしなかつた。これが拾得だと見える。帽を被つた方は身動きもしない。これが寒山なのであらう。
閭はかう見當を附けて二人の傍へ進み寄つた。そして袖を掻き合せて恭しく禮をして、「朝儀大夫、使持節、台州の主簿、上柱國、賜緋魚袋、閭丘胤と申すものでございます」と名告つた。
二人は同時に閭を一目見た。それから二人で顏を見合せて腹の底から籠み上げて來るやうな笑聲を出したかと思ふと、一しよに立ち上がつて、厨を駈け出して逃げた。

逃げしなに寒山が「豐干がしやべつたな」と云つたのが聞えた。驚いて跡を見送つてゐる間が周圍には、飯や菜や汁を盛つてゐた僧等が、ぞろ〳〵と來てたかつた。道翹は眞蒼な顔をして立ち竦んでゐた。(終)

附寒山拾得緣起

徒然草に最初の佛はどうして出來たかと問はれて困つたと云ふやうな話があつた。子供に物を問はれて困ることは度々である。中にも宗教上の事には、答に窮することが多い。しかしそれを拒んで答へずにしまふのは、殆どそれは譃だと云ふと同じやうになる。近頃歸一協會などでは、それを子供のために惡いと云つて氣遣つてゐる。

寒山詩が所々で活字本にして出されるので、私の内の子供が其廣告を讀んで買つて貰ひたいと云つた。

「それは漢字ばかりで書いた本で、お前にはまだ讀めない」と云ふと、重ねて「どんな事が書いてあります」と問ふ。多分廣告に、修養のために讀むべき書だと云ふやうな事が書いてあつたので、子供が熱心に内容を知りたく思つたのであらう。

私は取り敢へずこんな事を言つた。床の間に先頃掛けてあつた畫をおぼえてゐるだらう。唐子のやうな人が二人で笑つてゐた。あれが寒山と拾得とをかいたものである。寒山詩は其の寒山の作つた詩なのだ。詩はなか〳〵むづかしいと云つた。

子供は少し見當が附いたらしい様子で、詩はむづかしくてわからないかも知れませんが、その寒山と云ふ人だの、それと一しよにゐる拾得と云ふ人だのは、どんな人でございます」と云つた。私は已むことを得ないで、寒山拾得の話をした。

私は丁度其時、何か一つ話を書いて貰ひたいと賴まれてゐたので、子供にした話を、殆其儘書いた。いつもと違て、一冊の參考書をも見ずに書いたのである。

此「寒山拾得」と云ふ話は、まだ書肆の手にわたしはせぬが、多分新小說に出ることになるだらう。

子供は此話には滿足しなかつた。大人の讀者は恐らくは一層滿足しないだらう。子供には、話した跡でいろ〳〵の事を問はれて、私は又已むことを得ずに、いろ〳〵な事を答へたが、それを悉く書くことは出來ない。最も窮したのは、寒山が文殊で拾得は普賢だと云つたために、文殊だの普賢だの事を問はれ、それをどうかからうか答へると又その文殊が寒山で、普賢が拾得だと云ふのがわからぬと云はれた時である。私はとう〳〵宮崎虎之助さんの事を話した。宮崎さんはメッシアスだと自分で云つてゐて、又其メッシアスを拜みに往

く人もあるからである。これは現在にある例で説明したら、幾らかわかり易からうと思つたからである。

しかし此説明は功を奏せなかつた。子供には昔の寒山が文殊であつたのがわからぬと同じく、今の宮崎さんがメッシアスであるのがわからなかつた。私は一つの關を踰えて、又一つの關に出逢つたやうに思つた。そしてとう〳〵かう云つた。「實はパパアも文殊なのだが、まだ誰も拜みに來ないのだよ。」

魚玄機

して事の意表に出でたのに驚かぬものはなかつた。

唐の代には道教が盛であつた。それは道士等が王室の李姓であるのを奇貨として、老子を先祖だと言ひ倣し、老君に仕ふること宗廟に仕ふるが如くならしめた爲めである。天寶以來西の京の長安には太清宮があり、東の京の洛陽には太微宮があつた。其外都會ごとに紫極宮があつて、どこでも日を定めて嚴かな祭が行はれるのであつた。長安には太清宮の下に許多の樓觀がある。道教に觀があるのは、佛教に寺があるのと同じ事で、寺には僧侶が居り、觀には道士が居る。其觀の一つを咸宜觀と云つて女道士魚玄機はそこに住んでゐたのである。

玄機は久しく美人を以て聞えてゐた。趙痩と云はむよりは、寧ろ楊肥と云ふべき女

である。それが女道士になつてゐるから、脂粉の顔色を涴すを嫌つてゐたかと云ふと、さうではない。平生粧を凝し容を治つてゐたのである。獄に下つた時は懿宗の咸通九年で、玄機は恰も二十六歳になつてゐた。

玄機が長安人士の間に知られてゐたのは、獨り美人として知られてゐたのみではない。此女は詩を善くした。詩が唐の代に最も隆盛であつたことは言を待たない。隴西の李白、襄陽の杜甫が出て、天下の能事を盡した後に太原の白居易が踵いで起つて、古今の人情を曲盡し、長恨歌や琵琶行は戸ごとに誦んぜられた。白居易の亡くなつた宣宗の大中元年に、玄機はまだ五歳の女兒であつたが、ひどく怜悧で、白居易は勿論、それと名を齊うしてゐた元微之の詩をも、多く諳記して、其數は古今體を通じて數十篇に及んでゐた。十三歳の時玄機は始て七言絶句を作つた。それから十五歳の時には、もう魚家の少女の詩と云ふものが好事者の間に寫し傳へられることがあつたのである。

さう云ふ美しい女詩人が人を殺して獄に下つたのだから、當時世間の視聽を聳動したのも無理はない。

魚玄機の生れた家は、長安の大道から横に曲がつて行く小さい街にあつた。所謂狭邪の地でどの家にも歌女を養つてゐる。魚家も其倡家の一つである。玄機が詩を學びたいと言ひ出した時、兩親が快く諾して、隣街の窮措大を家に招いて、平仄や押韻の法を敎へさせたのは、他日此子を搖金樹にしようと云ふ願があつたからである。

大中十一年の春であつた。魚家の妓數人が度々或る旗亭から呼ばれた。客は宰相令狐綯の家の公子で令狐滈と云ふ人である。貴公子仲間の斐誠がいつも一しよに來る。それに今一人の相伴があつて、此人は溫姓で、令狐や斐に鍾馗々々と呼ばれてゐる。公子二人は美服してゐるのに、溫は獨り汚れ垢ついた衣を著てゐて、兎角公子等に頤使せられるので、妓等は初め僮僕ではないかと思つた。然るに酒酣に耳熱して來る

と、温鍾馗は二公子を白眼に視て、叱咤怒號する。それから妓に琴を彈かせ、笛を吹かせて歌ひ出す。曾て聞いたことのない、美しい詞を朗かな聲で歌ふのに、其音調が好く整つてゐて、しろう人とは思はれぬ程である。鍾馗の諢名のある于思盱目の温が二人の白面郎に侮られるのを見て、嘲謔の目標にしてゐた妓等は、此時温の傍に一人寄り二人寄つて、とう〳〵温を圍んで傾聽した。此時から妓等は温と親しくなつた。温は妓の琴を借りて彈いたり、笛を借りて吹いたりする。吹彈の技も妓等の及ぶ所ではない。

妓等が魚家に歸つて、頻に温の噂をするので、玄機がそれを聞いて師匠にしてゐる措大に話すと、其男が驚いて云つた。「温鍾馗と云ふのは、恐らくは大原の温岐の事だらう。又の名は庭筠、字は飛卿である。舉場にあつて八たび手を叉けば八韻の詩が成るので、温八叉と云ふ諢名もある。鍾馗と云ふのは、容貌が醜怪だから言ふのだ。當今の詩人では李商隱を除いて、あの人の右に出るものはない。此二人に段成式を加へ

て三名家と云つてゐるが、段は稍劣つてゐる」と云つた。

それを聞いてからは、妓等が令狐の筵會から歸る毎に、玄機が溫の事を問ふ。妓等も亦溫に逢ふ毎に玄機の事を語るやうになつた。そしてとう／＼或る日溫が魚家に訪ねて來た。美しい少女が詩を作ると云ふ話に、好奇心を起したのである。

溫と玄機とが對面した。溫の目に映じた玄機は將に開かむとする牡丹の花のやうな少女である。溫は貴公子連と遊んではゐるが、もう年は四十に達して、鍾馗の名に負かぬ容貌をしてゐる。開成の初に妻を迎へて、家には玄機と殆ど同年になる憲と云ふ子がゐる。

玄機は襟を正して恭しく溫を迎へた。初め妓等に接するが如き態度を以て接しようとした溫は、覺えず容を改めた。さて語を交へて見て、溫は直に玄機が尋常の女でないことを知つた。何故と云ふに、この花の如き十五歳の少女には、些の嬌羞の色もなく、其口吻は男子に似てゐたからである。

温は云つた。「卿の詩を善くすることを聞いた。近業があるなら見せて下さい」と云つた。

玄機は答へた。「兒は不幸にして未だ良師を得ません。どうして近業の言ふに足るものがありませう。今伯樂の一顧を得て、奔踶して千里を致すの思があります。願はくは題を課してお試み下さい」と云つたのである。

温は微笑を禁じ得なかつた。此少女が良驥を以て自ら比するのは、いかにもふさはしくないやうに感じたからである。

玄機は起つて筆墨を温の前に置いた。温は率然「江邊柳」の三字を書して示した。

玄機が暫く考へて占出した詩はかうである。

賦得江邊柳

翠色連荒岸。　烟姿入遠樓。　影鋪秋水面。　花落釣人頭。

根老藏魚窟。　枝低繫客舟。　蕭々風雨夜。　驚夢復添愁。

温は一誦して善しと稱した。温はこれまで七たび擧場に入つた。そして毎に堂々たる男子が苦索して一句を成し得ないのを見た。彼輩は皆遠く此少女に及ばぬのである。此を始として温は度々魚家を訪ねた。二人の間には詩筒の往反織るが如くになつた。

温は大中元年に、三十歳で大原から出て、始て進士の試に應じた。自己の詩文は燭一寸を燃さぬうちに成つたので、隣席のものが呻吟するのを見て、これに手を假して遣つた。其後擧場に入る毎に七八人の爲めに詩文を作る。其中には及第するものがある。只温のみはいつまでも及第しない。

これに反して場外の名は京師に騒いで、大中四年に宰相になつた令狐綯も、温を引見して度々筵席に列せしめた。或る日席上で綯が一の故事を問うた。それは莊子に出てゐる事であつた。温が直ちに答へたのは好いが、其詞は頗る不謹愼であつた。「それ

は南華に出てをります。餘り僻書ではございません。相公も燮理の暇には、時々讀書をもなさるが宜しうございませう」と云つたのである。

又宣宗が菩薩蠻の詞を愛するので、綯が塡詞して上つた。實は溫に代作させて口止をして置いたのである。然るに溫は醉つて其事を人に漏した。其上嘗て「中書堂內坐將軍」と云つたことがある。綯が無學なのを譏つたのである。

溫の名は遂に宣宗にも聞えた。それは或る時宣宗が一句を得て對を擧人中に求めると、溫は宣宗の「金步搖」に對するに「玉條脫」を以てして、帝に激賞せられたのである。然るに宣宗は微行をする癖があつて、溫の名を識つてから間もなく、旅亭で溫に邂逅した。溫は帝の顏を識らぬので、暫く語を交へてゐるうちに傲慢無禮の言をなした。

既にして擧場では、沈詢が知擧になつてから、溫を別席に居らせて、鄰に空席を置くことになつた。詩名は愈高く、帝も宰相も其才を愛しながら、其人を鄙んだ。趙

顗の妻になつてゐる溫の姉などは、弟のために要路に懇請したが、何の甲斐もなかつた。

溫の友に李億と云ふ素封家があつた。年は溫より十ばかりも少くて頗る詞賦を解してゐた。

咸通元年の春であつた。久しく襄陽に往つてゐた溫が長安に還つたので、李が其寓居を訪ねた。襄陽では、溫は刺史徐商の下で小吏になつて、稍久しく勤めてゐたが、終に厭倦を生じて罷めたのである。

溫の机の上に玄機の詩稿があつた。李はそれを見て歎稱した。そしてどんな女かと云つた。溫は三年前から詩を敎へてゐる、花の如き少女だと告げた。それを聞くと、李は精しく魚家のある街を問うて、何か思ふことありげに、急いで座を起つた。

李は溫の所を辭して、徑ちに魚家に往つて、玄機を納れて側室にしようと云つた。

玄機の兩親は幣の厚いのに動された。

玄機は出て李と相見た。今年はもう十八歳になつてゐる。その容貌の美しさは、溫の初て逢つた時の比ではない。李も亦白皙の美丈夫である。李は切に請ひ、玄機は必ずしも拒まぬので、約束は卽時に成就して、數日の後に、李は玄機を城外の林亭に迎へ入れた。

此時李は遽に發した願が遽に愜つたやうに思つた。しかしそこに意外の障礙が生じた。それは李が身を以て、近かうとすれば、玄機は回避して、强ひて逼れば號泣するのである。林亭は李が夕に望を懷いて往き、朝に興を失つて還るの處となつた。

李は玄機が不具ではないかと疑つて見た。しかし若しさうなら、初に聘を卻けた筈である。李は玄機に嫌はれてゐるとも思ふことが出來ない。玄機は泣く時に、一旦避けた身を李に靠せ掛けてさも苦痛に堪へぬらしく泣くのである。

李は屢催して曾て遂げぬ欲望の爲めに、徒らに精神を銷磨して、行住座臥の間、

恍惚として失する所あるが如くになつた。

李には妻がある。妻は夫の動作が常に異なるのを見て、其去住に意を注いだ。そして僮僕に唂はしめて、玄機の林亭にゐることを知つた。夫妻は反目した。或る日岳父が壻の家に來て李を面責し、李は遂に玄機を逐ふことを誓つた。

李は林亭に往つて、玄機に魚家に歸ることを勸めた。しかし魚は聽かなかつた。縱令二親は寛假するにしても、女伴の侮を受けるに堪へないと云ふのである。そこで李は兼て交つてゐた道士趙錬師を請待して、玄機の身の上を託した。玄機が咸宜觀に入つて女道士になつたのは、かうした因緣である。

玄機は才智に長けた女であつた。其詩には人に優れた剪裁の工があつた。溫を師として詩を學ぶことになつてからは、一面には典籍の渉獵に努力し、一面には字句の錘錬に苦心して、殆寢食を忘れる程であつた。それと同時に詩名を求める念が漸く增

長した。

李に聘せられる前の事である。或る日玄機は崇眞觀に往つて、南樓に狀元以下の進士等が名を題したのを見て、慨然として詩を賦した。

遊崇眞觀南樓。覩新及第題名處。

雲峯滿目放春晴。歷々銀鉤指下生。自恨羅衣掩詩句。擧頭空羨榜中名。

玄機が女子の形骸を以て、男子の心情を有してゐたことは、此詩を見ても推知することが出來る。しかし其形骸が女子であるから、吉士を懷ふの情がないことはない。只それは蔓草が木の幹に纏ひ附かうとするやうな心であつて、房帷の欲ではない。玄機は彼があつたから、李の聘に應じたのである。此がなかつたから、林亭の夜は索莫であつたのである。

既にして玄機は咸宜觀に入つた。李が別に臨んで、衣食に窮せぬだけの財を餽つたので、玄機は安んじて觀内で暮らすことが出來た。趙が道書を授けると、玄機は喜ん

でこれを讀んだ。此女の爲めには經を講じ史を讀むのは、家常の茶飯であるから、道家の言が却つてその新を趁ひ奇を求める心を悅ばしめたのである。當時道家には中氣眞術と云ふものを行ふ習があつた。每月朔望の二度、豫め三日の齋をして、所謂四目四鼻孔云々の法を修するのである。玄機は道るべからざる規律の下にこれを修すること一年餘にして忽然悟入する所があつた。玄機は眞に女子になつて、李の林亭にゐた日に知らなかつた事を知つた。これが咸通二年の春の事である。

玄機は共に修行する女道士中の稍文字ある一人と親しくなつて、これと寢食を同じうし、これに心胸を披瀝した。此女は名を采蘋と云つた。或る日玄機が采蘋に書いて遣つた詩がある。

贈鄰女

羞日遮羅袖。　愁春懶起粧。　易求無價寶。　難得有心郎。

枕上潸垂涙。　花間暗斷腸。　自能窺宋玉。　何必恨王昌。

采蘋は體が小くて輕率であつた。それに年が十六で、もう十九になつてゐる玄機よりは少いので、始終沈重な魚機に制馭せられてゐた。そして二人で爭ふと、いつも采蘋が負けて泣いた。さう云ふ事は日毎にあつた。しかし二人は直に又和睦する。女道士仲間では、かう云ふ風に親しくするのを對食と名づけて、傍から揶揄する。それには羨と妬とも交つてゐるのである。

秋になつて采蘋は忽失踪した。それは趙の所で塑像を造つてゐた旅の工人が、暇を告げて去つたのと同時であつた。前に對食を嘲つた女等が、趙に玄機の寂しがつてゐることを話すと、趙は笑つて「蘋也飄蕩、蕙也幽獨」と云つた。玄機は字を幼微と云ひ、又蕙蘭とも云つたからである。

趙は修法の時に規律を以て束縛するばかりで、樓觀の出入などを嚴にすることはな

かつた。玄機の所へは、詩名が次第に高くなつた爲めに、書を索めに來る人が多かつた。さう云ふ人は玄機に金を遺ることもある。物を遺ることもある。中には玄機の美しいことを聞いて、名を索書に藉りて訪ふものもある。或る士人は酒を携へて來て玄機に飮ませようとすると、玄機は僮僕を呼んで、其人を門外に逐ひ出させたさうである。

然るに采蘋が失踪した後、玄機の態度は一變して、稍文字を識る士人が來て詩を乞ひ書を求めると、それを留めて茶を供し、笑語晷を移すことがある。一たび歓待せられたものは、友を誘つて再び來る。玄機が客を好むと云ふ風聞は、幾もなくして長安人士の間に傳はつた。もう酒を載せて尋ねても、逐はれる虞はなくなつたのである。

これに反して徒に美人の名に誘はれて、目に丁字なしと云ふ輩が來ると、玄機は毫も假借せずに、これに侮辱を加へて逐ひ出してしまふ。熟客と共に來た無學の貴介子弟などは、幸にして謾罵を免れることが出來ても、坐客が或は何を聯ね或は曲を

度する間にあつて、自ら視て缺然たる處から、獨り竊に席を逃れて歸るのである。

客と共に謔浪した玄機は、客の散じた後に、怏々として樂まない。夜が更けても眠らずに、目に涙を湛へてゐる。さう云ふ夜旅中の溫に寄せる詩を作つたことがある。

寄飛卿

堦砌亂蛩鳴。庭柯烟露清。月中隣樂響。樓上遠山明。
珍簟涼風到。瑤琴寄恨生。嵇君懶書札。底物慰秋情。

玄機は詩筒を發した後、日夜溫の書の來るのを待つた。さて日を經て溫の書が來ると、玄機は失望したやうに見えた。これは溫の書の罪ではない。玄機は求むる所のものがあつて、自らその何物なるかを知らぬのである。

或る夜玄機は例の如く、燈の下に眉を蹙めて沈思してゐたが、漸く不安になつて席を起ち、あちこち室内を歩いて、机の上の物を取つては、又直に放下しなどしてゐ

た。良久しうして後、玄機は紙を展べて詩を書いた。それは樂人陳某に寄せる詩であつた。陳某は十日ばかり前に、二三人の貴公子と共に只一度玄機の所に來たのである。體格が雄偉で、面貌の柔和な少年で、多く語らずに、始終微笑を帶びて玄機の擧止を凝視してゐた。年は玄機より少いのである。

感懐寄人

恨寄朱絃上。含情意不任。早知雲雨會。未起蕙蘭心。灼々桃兼李。無妨國士尋。
蒼々松與桂。仍羨世人欽。月色庭階淨。歌聲竹院深。門前紅葉地。不掃待知音。

陳は翌日詩を得て、直に咸宜觀に來た。玄機は人を屛けて引見し、僮僕に客を謝することを命じた。玄機の書齋からは只微かに低語の聲が聞えるのみであつた。初夜を過ぎて陳は辭し去つた。これからは陳は姓名を通ぜずに玄機の書齋に入ることになり、玄機は陳を迎へる度に客を謝することになつた。

陳の玄機を訪ふことが頻なので、客は多く郤けられるやうになつた。書を索めるものは、只金を贈つて書を得るだけで、滿足しなくてはならぬことになつたのである。

一月ばかり後に、玄機は僮僕に暇を遣つて、老婢一人を使ふことにした。この醜惡な、いつも不機嫌な媼は殆人に物を言ふこともないので、觀內の狀況は世間に知られることが少く、玄機と陳とは餘り人に煩聒せられずにゐることが出來た。

陳は時々旅行することがある。玄機はさう云ふ時にも客を迎へずに、籠居して多く詩を作り、それを溫に送つて政を乞うた。溫は此詩を受けて讀む每に、語中に閨人の柔情が漸く多く、道家の逸思が殆無いのを見て、訝しげに首を傾けた。玄機が李の妾になつて、幾もなく李と別れ、咸宜觀に入つて女道士になつた顚末は、悉く李の口から溫の耳に入つてゐたのである。

七年程の月日が無事に立つた。其の時夢にも想はぬ災害が玄機の身の上に起つて來

た。

成通八年の暮に、陳が旅行をした。玄機は跡に殘つて寂しく時を送つた。其頃温に寄せた詩の中に、「滿庭木葉愁風起、透幌紗窓惜月沈」と云ふ、例に無い悽慘な句がある。

九年の初春に、まだ陳が歸らぬうちに、老婢が死んだ。親戚の恃むべきものもない媼は、兼て棺材まで準備してゐたので、玄機は送葬の事を計らつて遣つた。其の跡へ綠翹と云ふ十八歳の婢が來た。顏は美しくはないが、聰慧で媚態があつた。

陳が長安に歸つて咸宜觀に來たのは、艶陽三月の天であつた。玄機がこれを迎へる情は、渴した人が泉に臨むやうであつた。暫らくは陳が殆虛日のないやうに來た。其間に玄機は、度々陳が綠翹を揶揄するのを見た。しかし玄機は初め意に介せなかつた。なぜと云ふに、玄機の目中には女子としての綠翹はないと云つて好い位であつたからである。

玄機は今年二十六歳になつてゐる。眉目端正な顔が、迫り視るべからざる程の氣高い美しさを具へて、新に浴を出た時には、琥珀色の光を放つてゐる。豐かな肌は瑕のない玉のやうである。緑翹は額の低い、頤の短い猧子に似た顔で、手足は粗大である。領や肘はいつも垢膩に汚れてゐる。玄機に緑翹を忌む心のなかつたのは無理もない。

そのうち三人の關係が少しく紛糾して來た。これまでは玄機の擧措が意に滿たぬ時、陳は寡言になつたり、又は全く口を噤んでゐたりしたのに、今は陳がさう云ふ時、多く緑翹と語つた。其の上さう云ふ時の陳の詞は極て溫和である。玄機はそれを聞く度に胸を刺されるやうに感じた。

或る日玄機は女同士仲間に招かれて、某の樓觀に往つた。書齋を出る時、緑翹に其觀の名を敎へて置いたのである。さて夕方になつて歸ると、緑翹が門に出迎へて云つた。「お留守に陳さんがお出なさいました。お出になつた先を申しましたら、さうか

と云つてお歸なさいました」と云つた。

玄機は色を變じた。これまで留守の間に陳の來たことは度々あるが、いつも陳は書齋に入つて待つてゐた。それに今日は程近い所にゐるのを知つてゐて、待たずに歸つたと云ふ。玄機は陳と綠翹との間に何等かの秘密があるらしく感じたのである。

玄機は默つて書齋に入つて、暫く坐して沈思してゐた。猜疑は次第に深くなり、怨恨は次第に盛んになつた。門に迎へた綠翹の顏に、常に無い侮蔑の色が見えたやうにも思はれて來る。溫言を以て綠翹を賺す陳の聲が歷々として耳に響くやうにも思はれて來る。

そこへ綠翹が燈に火を點じて持つて來た。何氣なく見える女の顏を、玄機は甚だしく陰險なやうに看取した。玄機は突然起つて扉に鎖を下した。そして震ふ聲で詰問しはじめた。女は只「存じません、存じません」と云つた。玄機にはそれが甚だしく狡猾なやうに感ぜられた。玄機は床の上に跪いてゐる女を押し倒した。女は慴れて目

を呼つてゐる。「なぜ白狀しないか」と叫んで玄機は女の吭を扼した。女は只手足をもがいてゐる。玄機が手を放して見ると、女は死んでゐた。

玄機の緑翹を殺したことは、稍久しく發覺せずにゐた。殺した翌日陳の來た時には、玄機は陳が緑翹の事を問ふだらうと豫期してゐた。しかし陳は問はなかつた。玄機がとう〳〵「あの緑翹がゆうべからゐなくなりましたが」と云つて陳の顏色を覗ふと、陳は「さうかい」と云つただけで、別に意に介せぬらしく見えた。玄機は前夜のうちに觀の背後に土を取つた穴のある處へ、緑翹の屍を抱いて往つて、穴の中へ推し墜して、上から土を掛けて置いたのである。

玄機は「生ける秘密」の爲めに、數年前から客を謝してゐた。然るに今は「死せる秘密」の爲めに懼を懷いて、若し客を謝したら、緑翹の踪跡を尋ねるものが、觀内に目を著けはすまいかと思つた。そこで切に會見を求めるものがあると、强ひて拒まぬ

ことにした。

初夏の頃に、或る日二三人の客があつた、其中の一人が涼を求めて觀の背後に出ると、土を取つた跡らしい穴の底に新しい土が填まつてゐて、其上に綠色に光る蠅が群がり集まつてゐた。其人は只なんとなく訝しく思つて、深い思慮をも費さずに、これを自己の從者に語つた。從者は又これを兄に語つた。兄は府の衙卒を勤めてゐるものである。此卒は數年前に、陳が拂曉に咸宜觀から出るのを認めたことがある。そこで奇貨措くべしとなして、玄機を脅して金を獲ようとしたが、玄機は笑つて顧みなかつた。卒はそれから玄機を怨んでゐた。今弟の語を聞いて、小婢の失踪したのと、土穴に腥羶の氣があるのとの間に、何等かの關係があるやうに思つた。そして同班の卒數人と共に、鍤を持つて咸宜觀に突入して、穴の底を掘つた。綠翹の屍は一尺に足らぬ土の下に埋まつてゐたのである。

京兆の尹溫璋は衙卒の訴に本づいて魚玄機を逮捕させた。玄機は毫も辯疏するこ

となくして罪に服した。樂人陳某は鞫問を受けたが、情を知らざるものとして釋された。

李億を始として、曾て玄機を識つてゐた朝野の人士は、皆其才を惜んで救はうとした。只溫岐一人は方城の吏になつて、遠く京師を離れてゐたので、玄機がために力を致すことが出來なかつた。

京兆の尹は、事が餘りにあらはになつたので、法を枉げることが出來なくなつた。立秋の頃に至つて、遂に懿宗に上奏して、玄機を斬に處した。

玄機の刑せられたのを哀むものは多かつたが、最も深く心を傷めたものは、方城にゐる溫岐であつた。

玄機が刑せられる二年前に、溫は流離して揚州に往つてゐた。揚州は大中十三年に宰相を罷めた令狐綯が刺史になつてゐる地である。溫は綯が自己を知つてゐながら用

ゐなかつたのを怨んで名刺をも出さずにゐるうちに、或る夜妓院に醉つて虞候に撃たれ、面に創を負ひ前齒を折られたので、怒つてこれを訴へた。絢が温と虞候とを對決させると、虞候は盛んに温の汙行を陳述して、自己は無罪と判決せられた。事は京師に聞えた。温は自ら長安に入つて、要路に上書して分疏した。此時徐商と楊收とが宰相に列してゐて、徐は温を庇護したが楊が聽かずに、温を方城に遣つて吏務に服せしめたのである。其制辭は「孔門以德行爲先、文章爲末、爾既德行無取、文章何以稱焉、徒負不羈之才、罕有適時之用」と云ふのであつた。温は後に隋縣に遷されて死んだ。子の憲も弟の庭皓も、咸通中に官に擢でられたが、庭皓は龐勛の亂に、徐州で殺された。玄機が斬られてから三月の後の事である。

参照

其一　魚玄機

三水小牘　南部新書

太平廣記　北夢瑣言

續談助　　唐才子傳
唐詩紀事　　全唐詩(姓名下小傳)
全唐詩話　　唐女郎魚玄機詩

其二　溫飛卿

舊唐書　　漁隱叢話
新唐書　　北夢瑣言
全唐詩話　　桐薪
唐詩紀事　　玉泉子
六一詩話　　南部新書
滄浪詩話　　握蘭集
彦周詩話　　金荃集
三山老人語錄　　漢南眞稿
雪浪齋日記　　溫飛卿詩集

二人の友

私は豊前の小倉に足掛三年ゐた。その初の年の十月であつた。六月の霖雨の最中に來て借りた鍛冶町の家で、私は寂しく夏を越したが、まだ其夏のなごりがどこやらに殘つてゐて、暖い日が續いた。毎日通ふ役所から四時過ぎに歸つて、十疊ばかりの間にすわつてゐると、家主の飼ふ蜜蜂が折々軒のあたりを飛んで行く。二臺の人力車がらくに行き違ふだけの道を隔てて、向ひの家で絲を繰る繰車の音が、ぶうん〳〵と聞える。絲を繰つてゐるのは、片目の老處女で、私の所で女中が宿に下がつた日には、それが手傳に來てくれるのであつた。

或る日役所から歸つて、机の上に讀みさして置いてあつた Wundt の心理學を開いて、半ペエジばかり讀んだが、氣乘がせぬので止めた。そしていつもの繰車の音を聞いてぼんやりしてゐた。

そこへ女中が知らぬ人の名刺を持つて來た。どんな人かと問へば、洋服を著た若い人だと云ふ。兎に角通せと云ふと、すぐに其人が這入つて來た。

二十を僅に越した位の男で、快活な、人に遠慮をせぬ性らしく見えた。此人が私にさう云ふ印象を與へたのは、多く外國人に交つて、識らず知らずの間に、遠慮深い東洋風を棄てたのだと云ふことが、後に私にわかつた。

初對面の挨拶が濟んで私は來意を尋ねた。此人の事を私はF君と書く。F君の言ふ所は頗る尋常に異なるものであつた。君は私とは同じ石見人であるが、私は津和野に生れたから龜井家領內の人、君は所謂天領の人である。早くからドイツ語を專修しようと思ひ立つて、東京へ出た。所々の學校に籍を置き、種々の敎師に贄を執つて見たが、今の立場から言へば、どの學校も、どの敎師も、自分に滿足を與へることが出來ない。ドイツ人にも汎く交際を求めて見たが、丁度日本人に日本の國語を系統的に知つた人が少いと同じ事で、ドイツ人もドイツ語に精通してはゐない。それか

ら日本人の書いたドイツ文や、日本人のドイツ語から譯した國文を渉獵して見たが、どれもどれも誤謬だらけである。其中でF君は私が最も自由にドイツ文を書き、最も正確にドイツ文を譯すると云ふことを發見した。しかし東京にゐた時の私の生活はいかにも緊劇らしいので、接近しようとせずにゐた。その私が小倉へ來た。そこで君はわざ〳〵東京から私の跡を追つて來た。これから小倉にゐて、私にドイツ語を學びたいと云ふのである。

これを聞いて私はF君の自信の大きいのに驚き、又私の買ひ被られてゐることの甚しいのに驚いて、暫く君の顏を見て默つてゐた。後に思へば氣の毒であるが、此時は私の心中に、若し狂人ではあるまいかと云ふ疑さへ萠してゐた。

それから私は取敢ずこんな返事をした。君は私を買ひ被つてゐる。私はそんなにえらくはない。しかし私の事は姑く措くとして、君は果して東京で師事すべき人を求めることの出來ぬ程、ドイツ語に通じてゐるか。失敬ながら私はそれを疑ふ。

かう云ひつつ、私は机の上にあつた Wundt を取つて、F君の前に出して云つた。これは少し專門に偏つた本で、單にドイツ語を試驗するには適してゐぬが、若しそれでも好いなら、そこで一ペエジ程讀んで、其意味を私に話して聞かせて貰ひたい。若し他の本が好いなら、小說もあり雜誌もあるから、其方にしようと云つた。

F君は私の手から本を受取つて、題號を見た。そして「心理學ですね」と云つた。

「さうだ。君それが讀めるか。」

「讀めないことはありますまい。此本の事は聞いてゐたゞけで、まだ見たことはなかつたのです。しかし私が Paedagogik を硏究した時、どうしても心理學から這入らなくては駄目だと思つて、少し心理學の本を覗いて見たことがあります。どこを讀みませう。」かう云つて本を繙してゐるうちに、卷末に近い Die Seele と云ふ一章が出た。「そこを少し讀んで聞かせ給へ」と、私は云つた。

F君は少し間の惡さうに、低い聲で五六行讀んだ。聲は低いが發音は好い。すら

〳〵と讀むのを私は聞いてゐて、意味をはつきり聽き取ることが出來た。

「もう好いから、君其意味を言つて聞かせ給へ」と、私は云つた。

Ｆ君は殆ど術語のみから組み立てゝある原文の意味を、苦もなく說き明かした。

私は再び驚いた。Ｆ君は狂人どころでは無い。君の自信の大きいのは當然の事である。私は云つた。

「それだけ讀めれば、君と僕との間に、何の軒輊すべき所も無いね。」

「なに。そんな事はありません。追々質問します」と、Ｆ君は云つた。

これでＦ君が漫りに大言莊語したのでないと云ふ事だけはわかつた。しかしそれ以外の事は、私のためには總て疑問である。私は此疑問を徐々に解決しようと思つた。只其中に急に知らなくてはならぬ事が一つある。それはＦ君の生活狀態である。身の上である。

私はかう云つた。「それは君のドイツ語を研究する相談相手になれと云ふことな

ら、僕はならないことはない。所で君はどうして小倉で暮して行く積りだ。」かう云つたが、F君は默つてゐる。私はすぐに疊み掛けて露骨に云つた。「君金があるのか。」

F君は默つてはゐられなくなつた。「金は東京から來る汽車賃に皆使つてしまつたのです。國から取れば、多少取れないこともありませんが、目前の用には立ちません。當分あなたの所に置いて下さるわけには行きますまいか。」

此詞は私の評價に少からず影響した。F君のドイツ語の造詣は、初め狂人かとまで思つた疑を打ち消して、大いに君を重くしたのに、此詞は又頗る君を輕くした。固より人間は貧乏だからと云つて、其材能の評價を減ずることはない。しかしF君が現に一錢の貯もなくて、私をたよつて來たとすると、前に私を讃めたのが、買被りでなくて、世辭ではあるまいか、阿諛ではあるまいかと疑はれる。修行しようと云ふ望に、寄食しようと云ふ望が附帶してゐるとすると、F君の私を目ざして來た動機が大ぶ不純になつてしまふ。人間の行爲に全く純粹な動機は殆ど無いとしても、F

君の行爲を催起した動機は、其不純の程度が稍甚しくはあるまいかと疑はれる。

これまで私に從學したいと云つて名告り出た人に、F君のやうな造詣のあつたことは曾て無い。此側から見れば、F君は奇蹟である。しかしこれまで私の家に寄食したいと云つて來た人に、一文の貯もなかつたことは幾らでも有る。此側から見ればF君は平凡な徼幸者である。さう云ふ徼幸者を逃す道は、私のためには熟路である。私は此熟路を行くに、奇蹟たる他の一面を顧慮して、多少の手加減をすれば好いのである。

私は決して徼幸者に現金をわたさない。これが徼幸者に對する一つの原則である。そこで私はF君にこんな事を言つた。君はドイツ語が好く出來る。私の君を知つてゐるのは只それ丈である。それだけでは、君と同居しようとまでは、私には思はれない。そこで私は君を、私の心安い宿屋に紹介する。宿屋では私に對する信用で、君を泊らせて食はせて置く。其間に私は君のために位置を求める。それも、

君だけの材能があつて見れば、多少の心當がないでもない。若し旨く行つたら、君は自ら贏ち得た報酬で宿屋の勘定をするが好い。それが旨く行かず、又故郷からも金が來なかつたら、宿屋の勘定だけを私が引き受ける。私にはそれ以上の約束は出來ない。それで好いかと、私は云つた。

F君は私の詞を聞いて、少し勝手が違ふやうに、豫期に反したやうに感じたらしかつたが、兎に角同意した。多分君は私が許諾するか、拒絶するかと思つてゐただらう。それに私の答は許諾でもなければ、拒絶でもなかつたから、君のためには意外であつたかと思はれる。兎に角君は、格別難有がる樣子もなく、私に同意した。

私は使を遣つて下役の人を呼んで、それに用事を言ひ含めた。そしてF君を連れて、立見と云ふ宿屋へ往かせた。立見と云ふのは小倉停車場に近い宿屋で、私が此土地に著いた時泊つた家である。主人は四十を越した寡婦で、猫を可哀がつてゐる。怜悧で、何の話でも好くわかる。私はF君を此女の手に托したのである。

私がF君に多少の心當があると云つたのは、丁度其頃小倉に青年の團體があつて、ドイツ語の教師を捜してゐたからである。そこで早速其團體の世話人に話して、君を聘することにさせた。立見の勘定は私が拂はなくても好いことになつた。

F君は殆毎日のやうに私の所へ遊びに來た。話はドイツ語の事を離れぬが、別に私に難問をするでもない。新に得た地位に安んじて、熱心に初學者にドイツ語を教へる方法を研究して、それを私に相談する。さう云ふ話を聞くうちに、私は次第に君と私とのドイツ語の知識に大分相違のあることを知つた。それは互に得失があるのである。君は語格文法に精しい。文章を分析して細かい事を言ふ。私はそんな時に始て聞く術語に出くはして驚くことがある。しかし君の書いたドイツ文には漢學者の謂ふ和習がある。ドイツ人ならばさうは云はぬと、私が指摘する。君が服せぬと、私は旅中にも持つてゐる Reclam 版の Goethe などを出して證據立てる。こ

んな應對がなか〳〵面白いので、私も君の來るのを待つやうになつた。

天氣の好い土曜、日曜などには、私はF君を連れて散歩をした。狹い小倉の町は、端から端まで歩いても歩き足らぬので、海岸を大里まで往つたり、汽車に乘つて香椎の方へ往つたりした。格別讀む暇もないのに、君はいつも隱しにドイツの本を入れて歩く。Goeschen 版の認識論や民類學などである。なぜかと問ふと、暇があつたら讀まうと思ふのが樂しみだと、君は答へる。ひどく知識欲の強い人である。

二三週間立つてから、或る日私はF君がどんな生活をしてゐるかと思つて、役所からの歸掛に立見をおとづれた。丁度お上さんが門口から一匹の小犬を逐ひ出してゐるところであつた。「どうも內の狆が牝だもんですから、いろんな犬が來て困ります」と云つて置いて、「畜生々々」と顧み勝に出て行く犬を叱つてゐる。狆は帳場から、よそ〳〵しい樣子をして見てゐる。

「F君はどうしてゐますか」と、私は問うた。

「あなたがお世話をなさるだけあつて、變つた方でございますね」と、お上さんは笑顏をして云つた。

「わたくしが世話をするだけあつて變つてゐるのですつて。それは困るなあ。一體どう變つてゐます。」かう云ひつゝ、私は帳場の前に腰を掛けた。

「いゝえ。大そう好い方でございますが、もうこんなに朝晩寒くなりましたのに、まだ單物一枚で入らつしやいます。寒い時は、上からケットを被つて本を讀んで入らつしやるのでございます。」お上さんは私に座布團を出して、かう云つた。

「はてな。工面が悪いのかしら。」獨言のやうに私は云つた。

「さうぢやございません。お泊になつてから少し立ちますと、今なら金があるからと仰やつて、今月末までの勘定を濟ませておしまひになつた位でございます。」もう十一月に入つてゐるから、F君は先月青年團から貰つた金で前拂をしたのである。

兎に角逢つて見ようと思つて、私は二階へ上がつた。立見の家では、奥の離座敷に

上等の客を留めることにしてゐる。次は母屋の中庭に向いた二階である。表通に向いた二階の小部屋は、細かい格子の窓があつて、そこには客を泊らせない。F君は一番安い所で好いと云つて、そこに落ち著いた。

「F君、ゐるかね」と云つて聲を掛けると、君は内から障子を開けた。なる程フランネルのシャツの上に湯帷子を著てゐる。細かい格子に日を遮られた、薄暗い窓の下に、手習机の古いのが据ゑてあつて、そこが君の席になつてゐる。私は炭團の活けてある小火鉢を挾んで、君と對坐した。

此時すぐに目を射たのは、机の向側に夷麥酒の空箱が竪に据ゑて本箱にしてあることであつた。しかも其箱の半以上を、茶褐色の背革の大きい本三冊が占めてゐて、跡は小さい本と雜記帳とで塡まつてゐる。三冊の大きい本は極新しい。薄暗い箱から、背革に印してある金字が光を放つてゐる。私は首を屈めて金字を讀まうとした。

「Meyer の小ですよ」と、F君が云つた。

「さうか。ひどく立派な本になつたね。それに僕の持つてゐるのは二冊物だが。」

「それは古いのです。これは南江堂に來たのを見て置いたから、郵便爲換を遣つて取り寄せました。」

「しかしこんなに膨脹しては、名は小でも、邪魔になるね。なぜわざ〳〵取り寄せたのだ。」

「なに。教師をしてゐると、人名や地名の說明を求められますから、此位な本がないと、心細いのです。」

F君と私とは會話辭書の話をした。Meyer と Brockhaus との得失を論ずる。かう云ふドイツの本が Larousse や Britannica と違ふ所以を論ずる。俗書が段々科學的の書に接近して來る風潮を論ずる。とうとう私はランプの附くまでゐて歸つた。

私は借家に歸ると、古袷を一枚女中に持たせて、F君の所へ遣つた。五十日分の宿料を拂つて、會話辭書を買つては、君の貰つた月給は皆無くなつて、煙草もやたらに

は呑まれぬわけだと思つたからである。

私はF君に徼幸者の一面があると思つてゐたので、最初から君と交るに、多少の距離を保留して置くやうにした。しかし相識になつてから時が立つに從つて、此距離が段々縮まつて來た。

それには衣食に事を闕いても書物を買ふと云ふ君の學問好を認めた爲めもあるが、決してそればかりではない。ドイツ語に於ける君の造詣の深いことは、初對面の日にもう知れてゐた。さうして見れば、君が學問好だと云ふことは、問はずして明かなわけである。

F君と私との距離を縮めた、主な原因は私が君の「童貞」を發見した處に存ずる。君が殆ど異性に關する知識を有せぬことを發見した處に存ずる。これは或は私の見錯りであつたかも知れない。しかし私は今でも君に欺かれたとは信ぜない。

私は F 君に祕密が無かつたとは思はない。又君が譃を衝かなかつたとは思はない。併し君は故らに構へて譃を衝く人ではなかつたらしい。譃のために詞を設ける程の面倒をせぬ人であつたらしい。私と對坐して構へて譃を衝いて見るが好い。私はすぐに强烈な反感を起す。これは私の本能である。私は此本能があるので、餘り多く人に欺かれない。多數の人を陷れた詐僞師を、私が一見して看破したとは度々ある。これに反して義務心の闕けた人、amoral な人、世間で當にならぬと云ふ人でも、私と對坐して赤裸々に意志を發表すれば、私は愉快を感ずる。私は年久しくさう云ふ人と相忤はずに往來したことがある。

さて私は前にも云つた通りに、最初から徼幸者を以て F 君を待つた。しかし君の對話は少しも私に反感を起させたことが無い。君の言語は衝動的である。君の胸臆は明白に私の前に展開せられて時としては無遠慮を極めることがある。Verblüffend に眞實を說くことがある。私はいつもそれを甘んじ受けて、却つて面白く感じた。

殆ど毎日逢つて、時としては終日一しよにゐることさへあるので、F君と私との話はドイツ語の事や哲學の事には限らぬやうになつた。或る日私は君にかう云ふ事を言つた。私は此土地で役をしてゐて多くの人に知られてゐる。其人達がもうF君をも知つて來た。そして二人を兄弟だと云ふさうである。本通の雜貨店德見に往つたら、「弟御さんも店へお出になりました」と、主人が云つた。誰の事かと思つて問へば、君の事である。同國ではあるが、親類ではないと、私は答へた。主人は不審に思ふらしい樣子で、「へえ、あんなに好く肖てお出になつて」と云つた。私は君に似てゐるだらうか、君はどう思ふと云つて、F君を見た。

F君が其時、それは他人の空似と云ふことが隨分有るものと見えると云つて、かう云ふ話をした。君が尾の道に泊つた晩の事である。中庭を囲んだ二階の一方にある座敷に、君は入れられた。すると二階の向側に泊つた客が、藝者を大勢呼んで大騷をしてゐた。君は無聊に堪へぬので、廊下に出て向うを見る。向うでも藝者が一人出て、

欄干に手を掛けてこつちを見る。其藝者が迚の藝者を呼び出す。二人で何かささやいてこつちを見る。こつちで見るのは好いが、向うから見られるのは厭だと思つて、君は部屋に這入つた。向側の騷ぎは夜遲くなるまで續いた。君は床に這入つて、三味線の聲をやかましく思ひつつ寐入つた。暫く寐てゐるうちに、部屋に人が來たやうに思つて目を醒ました。見れば藝者が來て枕元にすわつてゐる。君は驚いて起き上がつた。そして「どうしたのだ」と問ふと、「少し伺ひたい事がございます」と云ふ。君は立つて夜具を疊んだ。それから藝者に用事を尋ねた。藝者の口上はかうであつた。自分は向側の座敷に、大勢來て泊つてゐる藝者の中の一人である。此土地の生れで、兄が一人あつた。それが家出をして行方が知れずにゐる。然るに先刻向側からあなたを見て、すぐに其兄だと思つた。分れてから大ぶ年が立つたが、毎日逢ひたい〳〵と思ふので、こつちでは忘れずにゐる。あなたを見た時、すぐに馳けて來ようかと思つたが、人目があるのでこらへてゐた。若し人違であつたら、許して貰ひたい。戀しい兄

だと思ふ人を見たのに、逢つて物を言はずに別れては、後々まで殘惜しい。一體あなたはどちらのお方かと云ふのであつた。君はかう答へた。「それは氣の毒な事だ。僕は石州のもので、尾の道へは始て來た。ここへ來たのが知れるといけないから、早く歸るが好い」と云つたと云ふのである。

F君の此話を、私は面白く思つて聞いた。私の悟性から見れば、初め君が他人の空似は有るものだと云つたのは反語でなくてはならない。藝者が臥所へ來た時、君は濱路に襲はれた犬塚信乃のやうに、夜具を片附けて、開き直つて用向を尋ねた。さて藝者の詞を飽くまで眞面目に聞いて、旨く敬して遠ざけたのである。君が語り畢る時、私は君の面を凝視して、そこに Ironie の表情を求めた。しかしそれは徒事であつた。

F君は藝者の詞を眞實だと思つて、其儘私に話したのであつた。私は驚いた。そして云つた。「日本の女は横着なやうで、おとなしい。それが西洋人であつたら、きつと肉迫して來たのだ。すると君だつて、Wilhelm が Philene の胸を押し退ける勇

氣がなかつたやうに、女の俘になるのだつた。」

私がかう云ふと、今度はF君が驚く番になつた。後に聞けば、或る西洋人に戒められて、小說と云ふものを讀まぬ君も、Wilhelm Meister や Geisterseher 位は知つてゐたので、私の詞を聞いて、白内障の手術を受けたやうに悟つたのださうである。

此事があつてから私は、F君の異性に對する言動に、細かに注意した。そして君が此方面に於て全く無經驗であることを知つた。君は衣食の闕乏を憂へない。君は性慾を制してゐる。君は尋常の僥幸者とは違ふ。君は兎に角えらいと、私は思つた。そこで初め君との間に保留して置いた距離が次第に短縮するのを、私は妨げようとはしなかつた。私の鑑識は或は錯つてゐたかも知れない。しかし私は今でも君に欺かれたとは信ぜない。

十二月になつた。私が小倉に來てから六月目、F君が私の跡を追つて來てから

三月目である。私はフランス語の稽古を始めて、毎日夕食後に馬借町の宣教師の所へ通ふことになつた。

これが頗る私と君との交際の上に影響した。なぜかと云ふに、君が尋ねて來ても、私はフランス語の事を話すからである。君は、「フランス語も面白いでせうが、僕は二つの語を淺く知るより、一つの語を深く知りたいのです」と云ふ。「亦一說だね」と、私は云ふ。此背面には、さうばかりは行かぬと云ふ意味がある。君はそれを察する。そして多少氣まづく思ふ。其上餘り頻りに往來した擧句に、必然起る厭倦の情も交つて來る。そこで毎日來た君が一日を隔てて來るやうになる。二日を隔てて來るやうになる。譬へて言へば、二人は最初遠く離れた並行線のやうに生活してゐたのに、一時其距離が逼り近づいて來て、今又近く離れた並行線のやうに生活することになつたのである。

F君はドイツ語の敎師をして暮す。私は役人をして、旁フランス語を稽古して

暮す。そして時々逢つて遠慮のない話をする。二人の間には世間並の友人關係が成り立つたのである。

翌年になつた。四月の初にＦ君が來て、父の病氣のために歸省しなくてはならぬから、旅費を貸して貰ひたいと云つた。幾らいるかと云へば、二十五圓あれば好いと云ふ。私はすぐに出してわたした。もう徼幸者扱にはしなかつたのである。此金の事は其後私も口に出さず、君も口に出さずにしまつた。私は返して貰ふことを豫期しなかつたのである。君は又そんな事に拘泥せぬ性分であつたのである。これは横著なのでも、しらばつくれたのでもないと、私は思つてゐた。年久しく交際した君が、物質的に私を煩はしたのは只これだけである。

程なくＦ君は歸つて來て、鳥町に下宿した。そしてこれまでのやうにドイツ語の教師をしてゐた。夏の日に私は一度君を尋ねて、ラムネを馳走せられたことがある。

年の暮に鍛冶町の家主が急に家賃を上げたので、私は京町へ引き越した。線車の音のする家から、大鼓の音のする家に移つたのである。京町は小倉の遊女町の裏通になつてゐて、絶えず三味線と大鼓とが聞えてゐた。此家へもF君は度々話しに來た。

又年が改まつた。私が小倉に來てからの三年目である。八月の半頃に、F君は山口高等學校に聘せられて赴任した。

其又次の年の三月に、私は役が變つて東京へ歸つた。丁度四年目に小倉の土地を離れたのである。

私は無妻で小倉へ往つて、妻を連れて東京へ歸つた。しかし私に附いて來た人は妻ばかりではなくて、今一人すぐに跡から來た人がある。それはまだ年の若い僧侶で、私の内では安國寺さんと呼んでゐた。

安國寺さんは、私が小倉で京町の家に引き越した頃から、毎日私の所へ來るこ

とになつた。私が役所から歸つて見ると、きつと安國寺さんが來て待つてゐて、夕食の時までゐる。此間に私は安國寺さんにドイツ文の哲學入門の譯讀をして上げる。安國寺さんは又私に唯識論の講義をしてくれるのである。安國寺さんを送り出してから、私は夕食をして馬借町の宣教師の所へフランス語を習ひに往つた。

そんな風であつたから、私が小倉を立つ時、停車場に送つてくれた同僚やら知人やらは非常に多かつたが、其中で一番別を惜んだものは安國寺さんであつた。「君がゐなくなつては、安國寺さんにお氣の毒だね」と、知人は揶揄半分に私に言つた。果して安國寺さんは私との交際を絶つに忍びないので、自分の住職をしてゐた寺を人に讓つて、飄然と小倉を去つた。そして東京で私の住まふ團子坂上の家の向ひに來て下宿した。素と私の家の向ひは崖で、根津へ續く低地に接してゐるので、其崖の上には世に謂ふ猫の額程の平地しか無かつた。そこに、根津が遊廓であつた時代に、八幡樓の隱居のゐる小さい寮があつた。後にそれを買ひ潰して、崖の下に長い柱

を立てて、私の家と軒が相對するやうな二階家の廣いのを建てたものがある。眺望の好かつた私の家は、其二階家が出來たために、陰氣な住ひになつた。安國寺さんの來たのは、この二階造の下宿屋である。

しかし東京に歸つた私の生活は、小倉にゐた時とは違つて忙しい。切角來た安國寺さんは前のやうに私と知識の交換をすることが出來ない。それを殘念に思つてゐると、丁度そこへF君が來て下宿した。東京で暮さうと思つて、山口の地位を棄てゝ來たと云ふことであつた。

そこで安國寺さんは哲學入門の譯讀を、私にして貰ふ代りに、F君にして貰はうとした。然るに私とF君とは外國語の扱方が違ふ。私は口語でも文語でも、全體として扱ふ。F君はそれを一々語格上から分析せずには置かない。私はKoebeさんの哲學入門を開いて、初のペエジから字を逐つて譯して聞せた、しかも勉めて佛經の語を用ゐて譯するやうにした。唯識を自在に講釋するだけの力のある安國寺さん

だから、それを丁度尋常の人がFiebelや讀本を解するやうに解した。F君は此流義を踏襲することを肯ぜずに、安國寺さんに語格から敎へ込まうとした。安國寺さんは全く違つた方面の勞力をしなくてはならぬので、ひどく苦んだ。

暫く立つて、F君は第一高等學校に聘せられたが、矢張同じ下宿にゐて、そこから程近い學校へ通ふので、君と安國寺さんとの關係は故の儘であつた。

私が東京に歸つてから、櫻が咲き櫻が散つて、氣候は煖いと云ふ間もなく暑くなつた。二階に登つて向ひの下宿屋を見れば、そこでも二階の戸を開け放つてゐる。間數が多いのでF君や安國寺さんのゐる部屋は見えない。見えるのは若い女學生のゐる部屋である。

欄干に赤い襟裏の附いた著物や葡萄茶の袴が曝してあることがある。赤い袖の肌襦袢がしどけなく投げ掛けてあることもある。此衣類の主が夕方には、はでな湯帷子を

著て、緣端で涼んでゐる。外から歸つて著物を脫ぎ更へるのを不意に見て、こつちで顏を背けることもある。私はいつとなく此女の顏を見覺えたが、名を聞く折もなく、どこの學校に通ふと云ふことを知る緣もなかつた。女は美しくもなく、醜くもなく、何一つ際立つて人の目を惹くことのない人であつた。

向ひの家の下宿人は度々入り替ると見えて、見知つた人がゐなくなり、新しい人が見えるのに氣の附くことがあつた。しかしF君と安國寺さんとは外へ遷らずにゐた。私の家の二階から見える女學生も遷らずにゐた。

一年餘立つて、私が東京へ歸つてからの二度目の夏になつた。或る日安國寺さんが來て、暑中に歸省して來ると云つた。安國寺さんは小倉の寺を人に讓つたが、九州鐵道の豐州線の或る小さい驛に俗緣の家がある。それを見舞ひに往くと云ふことであつた。

安國寺さんの立つた跡で、私の内のものが近所の噂を聞いて來た。それは坊さんはF君の使に四國へ往つたので、九州へは其序に歸るのだと云ふことであつた。使に往つた先は、向ひに下宿してゐる女學生の親元である。F君は女學生と秘密に好い中になつてゐたが、とう〳〵人に隱されぬ狀況になつたので、正式に結婚しようとした。それを四國の親元で承引しない。そこで親達を說き勸めに、F君が安國寺さんを遣つたと云ふのである。

私はそれを聞いて、「安國寺を緣談の使者に立てたとすると、F君はお大名だな」と云つた。無遠慮なEgoistたるF君と、學德があつて世情に疎く、赤子の心を持つてゐる安國寺さんとの間でなくては、さう云ふことは成り立たぬと思つたのである。

安國寺さんの誠は田舍の强情な親達を感動させて、女學生はF君の妻になることが出來た。二人は小石川に家を持つた。

又一年立つた。私はロシアとの戰爭が起つたので、戰地へ出發した。F君は新橋の停車場まで送つて來て、私にドイツ文で書いたロシア語の文法書を贈つた。此本と南江堂で買つたロシア、ドイツの對譯辭書とがあつたので、私は滿洲にゐる間、少からぬ便利を感じた。

私が滿洲で受け取つた手紙のうちに、安國寺さんの手紙があつた。その中に重い病氣のためにドイツ語の研究を思ひ止まつて、房州邊の海岸へ轉地療養に往くと云ふことが書いてあつた。私はすぐに返事を遣つて慰めた。これは私の手紙としては最長い手紙で、世間で不治の病と云ふものが必ず不治だと思つてはならぬ、安心を得ようと志すものは、病のために屈してはならぬと云ふことを、譬喩談のやうに書いたものであつた。私は安國寺さんが語學のために甚だしく苦んで、其病を惹き起したのではないかと疑つた。どんな複雜な論理をも容易く辿つて行く人が、却つて器械的に諳んじなくてはならぬ語格の規則に惱まされたのは、想像しても氣の毒だと、

私はつく〴〵思つた。

滿洲で年を越して私が凱旋した時には、安國寺さんはもう九州に歸つてゐた。小倉に近い山の中の寺で、住職をすることになつたのである。

F君は相變らず小石川に住んで、第一高等學校に勤めてゐた。君と私との忙しい生活は、互に訪問することを許さぬので、私は時々巣鴨三田線の電車の中で、君と語を交へるに過ぎなかつた。

それから四五年の後に私は突然F君の訃音に接した。咽頭の癌腫のために急に亡くなつたと云ふことである。

天　寵

去年の某展覧會に大きい油畫を出して落選した人がある。畫は頗る強烈な顔料で細い點を打つたやうにかいたものであつた。瞥見すれば、彩色の濃やかな氈のやうにも見え、又碎いた硝子に光線が中つて屈折せられてゐるやうにも見えた。諦視すれば、其中に二つの人物が模糊として認められる。裳の廣がつてゐる處から推すれば、女であらう。En face になつてゐる背後の人と、profil を見せてゐる前方の人と、顏が半ば重なり合つてゐる。足の邊に赤と綠との、稍大きい斑がある。椿の花でもあらうか。

審査委員の人達が椅子を半圏狀に並べてゐると、畫は一枚一枚其前に出される。半數以上は直ちに斥けられる。直ちに取られるのは、三十枚に一枚か、五十枚に一枚か位のものである。其半途にあるものは一旦再考の部として片脇へ寄せて置かれる。

畫を運び出すのは男である。其傍に女が三人、靑、赤、白の紙を持つて待つてゐる。

赤は最も忙しい。それを貼られる不合格の畫が最も多いからである。次は白の再考である。最も閑なのは合格の青である。

四五百點もあらうと云ふ出品が、一旦 défilé をしてしまふと、委員は再考の部を見直す。白の畫の大部分は、委員が青にしたいが少し物足らぬと思つたもの、又は赤だと云ひたいのに、どこか惜しい處があつて控へてゐたものであるから、それが二度目に運び出される時には、もう大抵運命は定まつてゐる。今度も赤を持つた Atropos の手から、一度遁れた剪刀を受けるのが多い。折々又小疵のために躓いた大醇の作が、青を持つた女の開く天堂の扉の内に入る。しかしこゝでも再三考の作として、白の儘に取り殘されるものがある。

問題の點描の畫は此再三考の部に入れられた作である。鑑査の室にせられた廣い間の隅に、此大きい畫はいつまでも立て掛けられてゐた。審査委員の人達はかはる／＼其前に往つて、暫く立つて見てゐては、默つて退く。此話を書く私も其一人であつた。

鑑査の殆ど終る頃であつた。「あれはどうしよう」と誰やらが云つた。「まあよさう」と誰やらが答へた。實はどの委員も、「どうしよう」、「まあよさう」と自問自答してゐたのである。

百何十點かの入選した畫の題と作者の名とが、發表せられた日の晩である。私の所へ、アカデミイの制服を着た一人の青年が尋ねて來た。瘦長で色が稍蒼い。長くした髮を肩まで垂れてゐる。これが點描の畫の作者であつた。名はM君と云ふ。

M君はこんな事を言つた。自分は落選した云々の畫の作者である。あの畫は、布、顏料、額緣に、持つてゐたゞけの金を掛け、費されるだけの時間を費し、嘗められるだけの苦辛を嘗めて爲上げた。殆ど自分の運命は繫けてあの畫にあると云つても好い。それが不幸にして落選した。そこで責めてもの心遣に、あの畫のどこが格に合はぬか、聞せて貰ひたいと云つた。

私は初め知らぬ人の名刺を見て、玄關へ用事を問ひに出たので、これだけの話は

玄關で聞いた。一體 refugee は他の落伍者と同じく、逢つて心持の好い人は少いものである。それにM君はいかにも無邪氣で、其口吻には詞を構へて言ふやうな形迹が少しもなかつた。私は聞いてゐるうちに氣の毒になつたので、「兎に角上がり給へ」と云つて、書齋へ通して茶などを侑めた。

さて私は先づこんな事を言つた。某展覽會の鑑査の事は、私はなんとも云ふことが出來ない。しかし君の畫は私が記憶してゐるから、展覽會を離れて、君の畫の事を話すのは差支ない。しかしそれより先に、君がどう思つてあの畫をかいたか、私に話して聞せて貰ひたいと云つた。

M君は苦しさうな顏をした。そしてやう〳〵かう云つた。「困りましたな。實際詞でどう言ひ現して好いか、わかりません。」

かう云つたM君の心理狀態は、私には好くわかつた。私は畫はかゝない。しかし小說や脚本の「試み」をして見たことがある。それをどう思つて書いたかと問はれて

は、私だつて困る。

私は問の意味を分析して、私の知りたいと思つた事を、一々具體的に尋ねた。私は其問答をこゝに繰り返すことは出來ない。要するに、私は先づM君が「何を欲したか」と云ふことを知つた上で、それから「何を能くしたか」と云ふことに及ばうとしたのである。

何を欲したかと云ふ問は、藝術家に向つて發するとき、極めて廣い、又極めて細かい問になる。大體の事も此中に含まれてゐる。一部分一部分の事も此中に含まれてゐる。

私は大きい所から小さい所へと問を進めた。稍久しい對話の間、M君の言ふ所には、何一つ私に誠實を疑はせるやうな事はなかつた。M君は何かの畫をかかうと思ひ立つた時、「いつも頭が一ぱいになつて、早くそれを外へさらけ出してしまひたくなる。」そこで殆ど自由意志を失つたやうになつて、自分の出來るだけの事をしてしまふ。此心理狀態が內の原因になり、時間と資本とを窮屈に限られてゐるのが外の原因になつてあの畫一つが出來た。畫の sujet は「丁度其時かきたかつた物」をかいたのである。M

君は煩はしい私の問に答へて、私にあの畫の理想的內容とでも云ふべきものを會得させようと努めた。しかしそれを、あの畫を見ぬ人の爲に說くのは、無意義であらう。M君が何を欲したかと云ふことは、私に好くわかつた。しかもそれが私の兼てかうだらうと推してゐた所と、大いなる逕庭は無かつた。

そこで私はM君に言つた。私は君の藝術家としての意志を尊重する。私はすこしも君の畫を嫌ふ念を有してゐない。君の畫には公衆の好みに阿つた迹もなく、又大家の意を迎へた迹もない。しかし私は君の畫に對して物足らぬ感じを抱いてゐる。これは私の感覺が鈍いのかも知れぬが、畫に闕點がないにも限るまい。これは君が何を能くするかと云ふ問題である。私は君が此度の落選に屈せずに、新しい作を出されるのを待つてゐようと云つた。

それから私はM君に、アカデミイの先生方の中で誰の所へ出入するか、又生徒の中に藝術上の友として交る人があるかと尋ねた。しかしM君は餘り教授をも訪問せず、

同學の人達にも交を求めぬらしかつた。私は師友の間で刺戟を受ける利益を説いて、君に交際を勸めた。そして君を慰め、君の前途を祝して歸した。

殆ど半年程の月日が立つた。或る晩M君は、新しくかき上げた畫を二枚持つて、突然私の家をおとづれた。

私は又M君を書齋へ通した。君の容貌は去年見た時と變らない。そして前よりは晴々してゐる。勿論半年足らずの間に、容貌の變る筈もないが、後に聞いた君が其後の經歷を思へば、よく變らずにゐると驚かずにはゐられない。

「大ぶ久しく逢ひませんね。其後どうしました。」

「なに、ぢきそばにゐますが、どうも氣がさして上がられませんでした。氣がさす。氣が咎める。此詞の意味が私にはわからなかつたが、經歷談を聞いた後に思へば、困窮してゐるM君は、私に何か求める所があるやうに思はれたくないので、來なか

つたのであらう。けふはかき上げた畫をアカデミイの某君に見せに持つて行つたが、生憎某君は留守であつた。そこで其畫を誰にも見せずに持つて歸るのが殘念なので、私の所へ持つて來たのである。

私は畫も見たかつたが、それよりは先づM君が去年以來どんな生活をしたか、今どうしてゐるかと云ふことが知りたかつた。そこで私が問ふ。君が答へる。其の答へる間に、君は時々輕く笑ふ。此笑は、君の經歷談の內容から推すと、君の性質次第では ironique な笑になりさうなものであるに、飽くまで無邪氣な笑である。二人の對話の間、二枚を向き合せにして其間に liège を挿んだ油畫は、そばの壁に寄せ掛けてあつた。

M君は「去年お話をしたかも知れませんが」と云つて、其經歷談の口を切つた。しかし去年は何も話したのではなかつた。話の概略はかうである。

M君が去年ひど算段をして畫をかいて、某展覽會に出した時、君の父親は故鄕で大

病になつてゐた。入選したと云ふ吉報を、父に息のあるうちに聞かせたいのが、君の切な願であつた。これは單に父を喜ばせたいと云ふだけではなかつた。畫かきになるのを、世の廢れものになるやうに思つて、強て思ひ止まらせようとした父に、君は自分の成功を知らせて、自分が空虛な希望を懷いてゐたのでなかつたと云ふ分疏をしようとしたのであつた。

父は亡くなつた。故郷で家を繼いだ兄は、纔に一家の生計を營んでゐるだけで、M君に學資を出して遣ることは出來ない。M君は今までのやうに籍をアカデミイに置いてゐるには、自力で生活費と學資とを得なくてはならぬことになつた。

M君は竹見と云ふ文房具屋へ往つて、小僧になりたいと申し込んだ。學資を拂つて貰つて、午前はアカデミイに往き、午後は小僧として働かうと云ふのである。竹見は主に洋畫の顏料や、畫布や、畫筆を商ふ人で、私の住んでゐる千駄木町の北、千駄木林町に工場を持つてゐる。商人に珍らしい竹見は、この我儘な、小僧らしくないM君

の注文を聴き納れて、君の學資を出し、君を三疊の部屋に置いて、午前はアカデミイに通はせた。

M君は暫く小僧生活を經驗した。そして其間に豫想しなかつた故障を見出した。それは午後に小僧になつて勞働する自己と、午前に畫かきになつて修行する自己とを、かつきりと分割することが出來ぬと云ふ事實である。アカデミイで dessin をするのに、どうも今までのやうな氣分になられない。昨日の小僧が出て來て、今日の dessinateur の邪魔をする。

そこでM君は種々に考へて見た末に、主人竹見にかう云ふ相談をした。自分は一旦誓つた事を必ず履行しようと思つたが、どうもそれが出來なくなつた。前日の小僧生活が翌日の畫の邪魔になる。然るに畫は廢めることが出來ぬから、小僧を廢めるより外無い。さて小僧を廢めて、どうして學資と生活費とを得ようかと云ふに、自分の考へた所では、只一つの方法しか無い。それは此儘こちらに置いて貰つて、こちらの商

品をアカデミイの先生や生徒仲間に賣り捌くのである。毎日アカデミイに往つて稽古をして、旁ら顏料やなんぞの注文を聞く。そして注文せられた品々を、次の日にアカデミイへ持つて往く。それが今まで小僧をしたと同じ程、こちらの役に立つかどうか知らぬが、兎に角それだけの爲事をする報酬として、今まで通りこちらに食はせて置いて、學資を出して貰ひたいと云ふのである。

M君は竹見が腹を立てはせぬかと氣遣ひつゝ此話をした。然るに意外にも竹見の顏には、大人が子供の話を聞く時の微笑のやうな微笑が現れた。そして竹見は云つた。

「さうですか。私も一旦あなたの身の上を引き受けたものですから、お望通りにして上げませう。これまででも、あなたの方では小僧として一廉の骨折をしてゐた積でせうが、實は内の坊主程の役にも立つてはゐません。それですから商品の賣捌は、旨く行つても行かなくても、私の方の損得には格別これまでと違つたこともないのです。若し又旨く賣捌が出來たら、收入の五分位はあなたに上げるから、あなたの方にも得

が行くわけです」と云つた。内の坊主と云ふのは、去年九歳であつた竹見の息である。

竹見は此時又かう云つた。「あなたの正直な事は、私が一目見て見抜いた積で、内へ入れたのです。もう暫く内にゐなさるからわかるが、それは私の見込違ではなかつた。しかし私は別に見込違をした。それはあなたを内へ入れた時、これは畫の方が旨く行かないので、文房具商にならうと思つて這入り込んだのだ。人は正直だが、其腹だけは隱してゐて、こつちの様子がわかつた上で、畫の方はよしてしまひ、私には腹を打ち明けようと云ふのだらうと、かう思つたのです。所が、今になつて見れば、あなたは飽くまで畫かきにならうとしてゐなさるやうだ。私は遠慮なしに言ふから、おこつては行けませんよ。一體あなたは畫で成功すると云ふ見込が立つてゐるのですか。先生方はなんと云つてゐますか」と云つた。

M君は有の儘に、先生方の意見は、改めて聞いて見たこともないが、自分だけは成功する積だと答へた。

竹見は此答に滿足しないで、かう云つた。「自分でばかりさう極めてゐたつて行けません。第一あなたが苦しい思をして、無駄骨を折つてはならない。それに私だつて世話をして上げるからは、世話甲斐がなくては詰まらない。どなたにでも好いから、不斷あなたの爲事を見てゐる先生に、末の見込がありさうだか聞いて御覽なさい」と云つた。

M君は、「さう云ふわけなら近いうちにW先生に聞いて見ませう」と約束した。そして小僧と云ふ旁業から、行商人と云ふ旁業に轉じた。

M君はアカデミイで先生や生徒仲間の注文を聞いて、翌日其品を持つて行くことになつた。暫く立つと、M君は行商人が決して小僧より樂でないことを知つた。片手に自分の學校道具を持つて、片手に注文の品を持つのだが、其品が時々嵩張ることがある。顏料や畫筆なら幾ら持つても知れたものだが、畫布は枠に張つて來て貰ひたいと云ふ人があるので、其の張つたのを二枚持つて行く日には、寒い日にも汗を出して、途中

で何遍も休まなくてはならない。其上竹見方で品物を取り揃へたり、枠張をしたりすると、切角廢めた小僧生活が幾分か再現することになる。新しい勞業から生ずる、此の室內途上の勞働は、殆ど初の小僧生活と同じ程の惡影響を、アカデミイにゐる時の氣分に及ぼすのである。

それと同時に、M君は內部から一種の壓迫を受けて來た。それは强烈な製作欲が發して、次第に高まつて來たのである。アカデミイで爲てゐる dessin は、見廻に來た先生に、「さう、君、奇拔にばかり遣らうと思つては行かん」と云はれるが、君自己は殆ど器械的に爲てゐる積である。これでは少しも製作欲を滿足せしめることは出來ない。そこで內に歸つてゐる間に畫がかきたい。例の「頭が一ぱいになつてゐる」のを外へ出したい。然るに行商人としての日々の爲事に時間を取られる。又竹見の貸してくれた三疊の間に、夜具や机を持ち込んでゐるので、畫をかく場所も無い。それから竹見に學資を出して、食はせて貰つてゐるだけで、現金と云ふものは行商の賣上金から五分

の配當を受けるより外には無く、それも一箇月に精々二圓位のものなので、畫布や顏料を買ふことが出來ない。

こんな風に、M君は外からは行商生活に苦められ、內からは製作欲に惱まされてゐるので、竹見には約束して置きながら、W先生を訪問することが久しく出來なかつた。W先生は自分の caricature を山賊のやうにかく、こはい顏の人であるが、生徒に優しくしてくれるので、君は自己を鑑識して貰ふことを此人に賴まうとしたのである。そのうち竹見が「どうです、先生の所へ往つて見ましたか」と催促することが二三度に及んだ。君も此上捨てゝも置かれなくなつて、或る日ふら〳〵と駒込の竹見方を出て、白山上から電車に乘つた　そして芝園橋で乘り替へて、麻布霞町のW先生の atelier に往つた。

M君が此家の閾を跨ぐのは二度目であつた。M君は去年某展覽會に畫を出して、落選の不幸を見た時、私の所へ來るすぐ前に、W先生を訪問して、私に言つたと同じ

やうな事をW先生に言つて、私の返事に似た返事をW先生の口からも聞いた。W先生はアカデミイの敎授で、他の諸敎授と同じく、某展覽會の審査委員に加はつてゐたのである。

前に閾を跨いだ時は、M君は、力限の勇戰をして立派に負けた敗軍の將のやうに、よしや多少の未練はあつたにしても、兎に角さつぱりした、勇ましい氣分でゐた。それが今度はどうも人の使に往くやうで、しかも其使の用向が自己の身の上であるために、間が惡いと云はうか、氣が咎めると云はうか、一種の厭ふべき弱みを感ぜずにはゐられなかつた。其上心の底には例の內外の壓迫が盤結してゐて、これで條理のある話が出來ようかとさへ危ぶまれるのであつた。

戶を開けて這入つて見れば、W先生は chevalet の前に立つて畫をかいてゐた。M君を一目見て、「一寸待つてくれ給へよ」と云つて、其儘かいてゐる。君は暫く傍で見てゐる。こんなにして畫をかくことが出來たら、どんなに愉快だらうと思ふと、君の胸

は跳る。

W先生は筆を停めた。そして筆と palette とを無造作に置いて、身を椅子の上に投げた。「さあ、君も掛け給へ。待たせて濟みませんでした。何か用事ですか。此頃はどうしてゐます。」

「實は先生に伺ひたい事がありまして。なに、伺つた所で、どうにもならないのですが。實は。」M君の詞はしどろもどろであつた。此時W先生の顏には微笑が浮かんで、其口からは、物馴れた醫者が病人の容體を問ふ時のやうな、いたはりつゝ探り究める種々の問が發せられた。君はそれに答へてゐるうちに、心に思つてゐるだけの事を殘らず打ち明けてしまつた。自分が前途を問ひに來たのは、自分が知りたいからではなくて、竹見を滿足させるためである。自分は少しも未來の成功を疑はぬから、どんな先生にでも證人に立つて貰ひたくはない。其竹見の世話になつて、自分の爲てゐる行商生活は、忍び難い苦痛を自分に與へてゐる。それに内部からは製作欲が自分を責め

て、自分の心は片時も安まることが無い。これだけの事を、君は二十分も立たぬうちに、W先生に白状したのである。

W先生は聞いてしまつてから云つた。「そんなら先づ君の用事から片附けて行くとしようね。竹見には、好いからさう云つて遣り給へ。Wの云ふには、私の前途は決して平坦な道ではないが、躓かずに進んだら、面白い境界に達するだらうと云ふことだと云ふのだね。それは好いが、君の現状には困つたね。それを脱するには金がいる。其金を骨折らずに儲けなくてはならないと云ふわけだ。誰かの patronage を求めるのは近道だが、それは跡に累を遺すから、君のために不利益だ。さあ、私にも格別の名案は無いね。これは今君の話を聞いてゐるうちに、ふと思ひ出したのだが、ヨオロッパの畫かきの所へは、好く商人が顏料や畫筆を澤山持つて往つて預けて置く。それを畫かきは入用な時幾らでも使ふ。商人は時々往つて、どれだけ使つたか見て、勘定をする。あれを、竹見に相談して遣つて見てはどうだらう。私にも差當り其位の智慧し

か出ないね。それから私が君に補助をして上げても好いが、大した事は出來ない。毎月五圓出して上げよう。しかし只貰ふのは不愉快だらうから、君に頼むことがある。君は薔薇新に話して、私の所へ薔薇新から期日を極めて、薔薇を送ることになつてゐる。偶の事だから、勞力も時間の損失も格別無い筈だ。さうして貰へば、私は其の報酬として、君に五圓上げるからね。」

M君は此話を聞いて、素直に承諾した。そしてW先生に簡單な禮を言つて atelier を出た。戸の外に出ると、M君は深い息をして、心の内で「畫がかける」と叫んだ。電車の中では、早く畫室になるやうな明二階か何かを捜して見たくてならなかつた。

竹見方に歸つて、M君は主人に先づW先生の豫言を言つて聞せた。「はあ、なか〳〵あなた買つてゐますね」と云つた竹見の顏には、君の目で見ると、どうも反對の、全く消極的な宣告を受けて來るものと豫期してゐたらしい表情が見えた。それから畫かきの所に材料を預けて置かうと云ふ相談をした。主人は「さうですな」と云つて、煙

草をのみつゝ考へてゐたが、煙草の吸殼をはたいて、「どうもそいつは行けませんな」と言ひ放つた。商品をどれだけ買ひ込んで置く。その内どれだけ決けて行く。其の決けて行くだけを買ひ足す。かうして均衡を失はぬやうにと、骨を折つてゐるのに、所々方々に商品を置き放しにして、謂はゞ寢かして置くわけには行かない。西洋ではそんな事が出來るか知らぬが、日本ではそれの出來る商人はあるまいと云ふのであつた。

M君は主人の話を聞いて、別段落膽もしなかつた。それは心の内に「畫がかける」「畫だけはかける」と云ふ叫が、絕間なく響いてゐて、自分の内生活が今までゐた灰色の霧の中から、薔薇色の霞の中へ移されたやうな感じがしてゐるからである。よしや今まで通りの行商をして行かなくてはならぬとしても、君は今なら其煩勞に堪へることが出來るやうに思ふ。「畫がかける」と云ふ叫は、君にあらゆる苦艱に對する免疫性を與へる。君を不仁身にする。

次の日にアカデミイから歸るとすぐに、M君は貸間を捜しに出た。廣い一間を廉價

に借られさうな古家をと志して捜すのである。これはなか〳〵容易でなかつた。やつと氣に入つた所があると思ふと、賄附きでなくては貸さぬと、女主人が云ふ。女主人は其一間に、是非共自己の需要を充たすだけの收入を產み出させようとするのである。十軒ばかりも見た擧句に、小石川の或る裏町で、とう〳〵明りの工合の好い二階を一箇月三圓で借ることが出來た。

そこへ道具を持ち運んで、大抵の物は竹見方の廢物を代用して濟ます樣に工夫して、un atelier improvisé を完成するのが、M君のためには、殆ど畫をかくと同じやうな受用であつた。只畫がかけさへすれば好いと云ふ原則の下に、君は總ての錢の掛かる設備を省かうとしたが、十二月の事で、どうも火鉢だけは無くてはならなかつた。それは modèle になつて來る人に對しても、無くて濟まされぬからである。

M君はまだ設備の出來上がらぬうちに薔薇新に往つた。薔薇新では、W先生の電話で君の事を知つてゐて、丁度薔薇を送る期日になつてゐると云ふので、溫室で咲かせ

た薔薇を一籠わたした。それを麻布に持つて往つて、W先生から五圓の金を受け取つた。其中から一箇月分の間代を差引いた二圓は、君の畫室のためには、天を補ふ五色の石程の用に立つた。

畫室の設備が出來上がつた所で、M君はmodèleを傭ふ金に窮した。君は靜物をかくことをも好まない。風景をかくことをも好まない。どうしても人物がかきたい。それにはmodèleがなくてはならぬのである。

M君の持つてゐる物の中で、最も價の貴いのは、去年某展覽會に出して落選した、大きい油畫の額縁である。油畫其物は、展覽會出品目錄の價格の並から言へば、どんなに安く見ても、五六百圓以上のものであるが、人が認めてくれぬとなると汚れた布である。君は竹見に賴んで、額縁を二十圓に買つて貰つて、それをmodèleを傭ふ資金にした。君のためには、これが最後の手段で、此二十圓を使つてしまふと、君は再び去年の畫が落選した後のやうな、かきたい畫のかゝれぬ境遇に戻るのである。

M君は毎日日歿前の二時間を畫室に暮すことになつた。竹見の物置で見附けた、縁の缺けた瀬戸物火鉢に、炭火を澤山おこした間のうちで、若い娘がはにかみつゝ帶を解き、著物を脱いだ。

此話をしてしまつて、M君は二枚の油畫を私に見せた。一枚は珍らしく美しい娘の裸體の busto で、méditation とでも題しさうな表情をしてゐる。背景は明るい地に赤い花が散らしてある。今一枚は赤い花を手まさぐつて俯向いた少女である。どちらも去年のやうな模糊たる人物ではない。

「なぜこんな風なのを去年出さなかつたのです」と、私は尋ねた。

「でもあの時一番かきたかつたものをかいたのだから、爲方がありません」と、M君は答へた。

それから私はM君にこんな事を言つた。君の近業を見せて貰つたのは難有い。しか

し君の經歷談を聞せて貰つたのも、それに劣らぬ難有い事である。君は自分の境遇をひどく不幸だと思つてゐるか知らぬが、一轉して考へて見れば、君のやうな fils de la fortune は珍らしい。君は、君の世話をしてくれる竹見のやうな商人が、今の世の中に又有らうと思つてゐるか。又W先生のやうな師匠が又有らうと思つてゐるか。君はどう思ふと、私は云つた。

M君は自分の境遇が意外な éclairage を受けたのに驚いたらしく、「なる程、さうでせうかね」と云つて目を睜つた。

餘興

同郷人の懇親會があると云ふので、久し振りに柳橋の龜清に往つた。暑い日の夕方である。門から玄關までの間に敷き詰めた御影石の上には、一面の打水がしてあつて、門の内外には人力車がもうきつしり置き列べてある。車夫は白い肌衣一枚のもあれば、上半身全く裸裎にしてゐるのもある。手拭で體を拭いて絞つてゐるのを見れば、汗はざつと音を立てて地上に灑ぐ。自動車は門外の向側に停めてあつて拔手は襟をくつろげて扇をばた〳〵使つてゐる。

玄關で二三人の客と落ち合つた。白のジャケツやら湯帷子の上に絽の羽織やら、いづれも略服で、それが皆識らぬ顏である。下足札を受け取つて上がつて、麥藁帽子を預けて、紙札を貰つた。女中に「お二階へ」と云はれて、梯を登り掛かると、上から降りて來る女が「お暑うございますことね」と聲を掛けた。見れば、柳橋で私の唯一人識

つてゐる年增藝者であつた。

此女には鼠頭魚と云ふ諢名がある。昔は隨分美しかつた人らしいが、今は瘦せて、顏が少し尖つたやうに見える。諢名はそれに因つて附けられたものである。もう餘程前から、此土地で屈指の姉えさん株になつてゐる。

私には藝者に識合があらう筈がない。それにどうして鼠頭魚を知つてゐるかと云ふと、それには因緣がある。私の大學にゐた頃から心安くした男で、今は某會社の頭取になつてゐるのが、此女の檀那で、此女の妹まで此男の世話になつて、高等女學校にはいつてゐる。そこで年來其男と親くしてゐる私を、鼠頭魚は親類のやうに思つてゐるのである。

私は二階に上がつて、隅の方にあつた、主のない座布團を占領した。戸は悉く明け放つてある。國技館の電燈がまばゆいやうに半空に赫いてゐる。

座敷を見渡すに、同鄕人とは云ひながら、見識つた顏は少い。貴族的な風采の舊藩

主の家令と、大男の畑少將とが目に附いた。其傍に藩主の立てた塾の舍監をしてゐる、三枝と云ふ若い文學士がゐた。私は三枝と顔を見合せたので會釋をした。

すると三枝が立つて私の傍に來て、欄干に倚つて墨田川を見卸しつつ、私に話し掛けた。

「隨分暑いねえ。此川の二階を、こんなに明け放してゐて、此位なのだからね。」

「さうさ。好く日和が續くことだと思ふよ。僕なんぞは内にゐるよりか、ここにかうしてゐる方が、どんなに樂だか知れないが、それでも僕は人中が嫌だから、久しくかうしてゐたくはないね。どうだらう。今夜は遲くなるだらうか。」

「なに。そんなに遲くもなるまいよ。餘興も一席だから。」

「餘興は何を遣るのだ。」

「見給へ。あそこに貼り出してある。畑閣下が幹事だからね。」

かう云つて置いて、三枝は元の席に返つてしまつた。

私は始て氣が附いて、承塵に貼り出してある餘興の目錄を見た。不折まがひの奇抜な字で、餘興と題した次に、赤穗義士討入と書いて、其下に辟邪軒秋水と注してある。秋水の名は私も聞いてゐた。電車の中の廣告にも、武士道の皷吹者、浪界の泰斗と云ふ肩書附で、絶えず此名が出てゐるから、いやでも讀まざることを得ぬのである。或る時何やらの雜誌で秋水の肖像を見た。芝居で見る由井正雪のやうに、長い髮を肩まで垂れて、黑紋附の著物を著てゐた。同じ雜誌の記事に依れば、此武士道皷吹者には女客の贔屓が多いさうである。

しかし男に贔屓がないことはない。勿論不幸にして學生なんぞにはそんな人のあることを聞かない。學生は墮落してゐて、ワグネルがどうのかうのと云つて、女色に迷ふお手本のトリスタンなんぞを聞いて喜ぶのである。男の贔屓は下町にある。代を譲つた倅が店を三越まがひにするのに不平でゐる老舗の隱居もあれば、横町の師匠の所へ友達が清元の稽古に往くのを憤慨してゐる若い衆もある。それ等の人々は脂粉の氣

が立ち籠めてゐる棧敷の間にはさまつて、秋水の出演を待つのださうである。其中へ毎晩のやうに、容貌魁偉な大男が、湯帷子に兵兒帶で、ぬつとはいつて來るのを見る。これが陸軍少將畑閣下である。

畑は快男子である。戰略戰術の書を除く外、一切の書を讀まない。淨瑠璃を聞いても、何をうなつてゐるやらわからない。それが不思議な緣で、ふいと浪花節と云ふものを聽いた。忠臣孝子義士節婦の笑ふ可く泣く可く驚く可く歎ず可き物語が、朗々たる音吐を以て演出せられて、處女のやうに純潔無垢な將軍の空想を刺戟して、將軍に唾壺を擊碎する底の感激を起さしめたのである。畑は此時から浪花節の愛好者となり浪花節語りの保護者となつた。

そこで此懇親會の輪番幹事の一人たる畑が、秋水を請待して、同鄕の靑年を警醒しようとしたのだと云ふことは、問ふことを須ゐない。

暫くして畑の後輩で、矢張幹事に當つてゐる男が、我々を餘興の席へ案内した。宴

會のプログラムの最初に置かれたものを餘興と稱しても、今は誰も怪まぬやうになつてゐるのである。

　餘興の席は廊下傳ひに往く別室であつた。正面には秋水が著座してゐる。雜誌の肖像で見た通りの形裝である。顏は極て白く、脣は極て赤い。どうも薄化粧をしてゐるらしい。それと竝んで絞の湯帷子を著た、五十歳位に見える婆あさんが三味線を抱へて控へてゐる。

　浪花節が始まつた。一同謹んで拜聽する。私も隅の方に小さくなつて拜聽する。信仰のない私には、どうも聞き慣れぬ漢語や、新しい詩人の用ゐるやうな新しい手爾遠波が耳障になつてならない。それに私を苦めることが、秋水のかたり物に劣らぬのは、婆あさんの三味線である。此伴奏は、幸にして無頓著な聽官を有してゐる私の耳をさへ、緩急を誤つたリズムと猛烈な雜音とで責めさいなむのである。

　私は幾度か席を逃れようとした。しかし先輩に對する敬意を忘れてはならぬと思

ふので、私は死を決して堅坐してゐた。今でも私は其時の殊勝な態度を顧みて、滿足に思つてゐる。

義士等が吉良の首を取るまでには、長い長い時間が掛かつた。此時間は私がまだ大學にゐた時最も恐怖すべき高等數學の講義を聽いた時間よりも長かつた。それを耐忍したのだから、私は自ら滿足しても好いかと思ふ。

やうやう物語と同じやうに節を附けた告別の詞が、秋水の口から出た。前列の中央に胡坐をかいてゐた畑を始として、一同拍手した。私は此時鎖を斷たれた囚人の歡喜を以て、共に拍手した。

畑等が先に立つて、前に控所であつた室の隣の廣間をさして、廊下を返つて往く。そこが宴會の席になつてゐるのである。

私は遅れて附いて行く時、廊下で又鼠頭魚に出逢つた。

「大變ね」と女は云つた。

「何が」と眞面目な顏をして私は問ひかへした。

「でも」と云つた切り、噴き出しさうになつたのを我慢するらしい顏をして、女は摩れ違つた。

私は宴會の末座に就いた。若い藝者が德利の尻を摘まんで、私の膳の向うに來た。そして猪口を出した私の顏を見て云つた。

「面白かつたでせう。」

大人が小兒に物を言ふやうな口吻である。美しい目は輕侮、憐憫、嘲罵、翻弄と云ふやうな、あらゆる感情を湛へて、異樣に赫いてゐる。

私は覺えず猪口を持つた手を引つ込めた。私の自尊心が餘り甚だしく傷けられたので、私の手は殆んど反射的に此女の持つた德利を避けたのである。

「あら。どうなすつたの。」

女の目に映じてゐるのは、前に異なつた感情である。それを分析したら、怪訝が五分

に厭嫌が五分であらう。秋水のかたり物に拍手した私は女の理解する人間であつたのに、猪口の手を引いた私は、忽ち女の理解すると能はざる人間となつたのである。

私ははつと思つて、一旦引いた手を又出した。そして注がれた杯の酒を見つつ、私は自ら省みた。

「まあ、己はなんと云ふ未錬な、いく地のない人間だらう。今己と相對してゐるのは何者だ。あの白粉の假面の背後に潛む小さい靈が、己を浪花節の愛好者だと思つたのがどうしたと云ふのだ。さう思ふなら、さう思はせて置くが好いではないか。試みに反對の場合を思つて見ろ。此靈が己を三味線の調子のわかる人間だと思つてくれたら、それが己の喜ぶべき事だらうか。己の光榮だらうか。己は其光榮を擔つてどうする。それがなんになる。己の感情は己の感情である。己の思想も己の思想である。天下に一人のそれを理解してくれる人がなくたつて、己はそれに安んじなくてはならない。それに安んじて恬然としてゐなくてはならない。それが出來ぬとしたら、己はど

うなるだらう。獨りで煩悶するか。そして發狂するか。額を石壁に打ち附けるやうに、人に向かつて說くか。救世軍の傳道者のやうに辻に立つて叫ぶか。馬鹿な。己は幼稚だ。己にはなんの修養もない。己はあの床の間の前にすわつて、愉快に酒を飲んでゐる、眞率な、無邪氣な、そして公々然と其の愛する所のものを愛し、知行一致の境界に住してゐる人には、逈に劣つてゐる。己は此の己に酌をしてくれる藝者にも劣つてゐる。」

かう思ひつつ、頭を擧げて前を見れば、もう若い藝者はゐなかつた。それに氣が附くと同時に、私は少し離れた所から鼠頭魚が私を見てゐるのに氣が附いた。鼠頭魚は私の前に來て、ぢつと私を見た。

「どうなすつたの。さつきからひどく塞ぎ込んでいらつしやるぢやありませんか。餘興に中てられなすつたのぢやなくつて。」

「なに。大ちがひだ。つい馬鹿な事を考へてゐたもんだから。」

かう云つて私は杯を一息に干した。（終）

曾我兄弟

四幕

登場人物

征夷大將軍頼朝　四十七歳
犬房丸　九歳
曾我五郎時致　二十歳
狩野介宗茂
御所五郎丸
吉備津宮宮司大藤内成景
丹三郎
手越の少將

工藤左衛門尉祐經　三十八歳
曾我十郎祐成　二十二歳
仁田四郎忠常
新開荒二郎忠氏
大見小平太實政
鬼王
石田次郎
黄瀬川の龜鶴

伊出の農家の主人　　同妻
大名數人　　近臣二人
舍人二人　　雜色一人
夜廻の卒二人

場所

富士山西麓伊出の狩場

時代

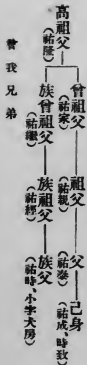
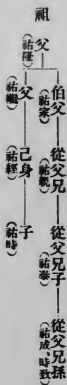
建久四年五月二十八日二十九日

曾我兄弟宗族圖

- 高祖父（祐隆）
  - 曾祖父（祐家）——祖父（祐親）——父（祐泰）——己身（祐成、時致）
  - 族曾祖父（祐繼）——族祖父（祐經）——族父（祐時、小字犬房）

工藤祐經宗族圖

祖父(祐隆)─┬─伯父(祐家)──從父兄(祐親)──從父兄子(祐泰)──從父兄孫(祐成、時致)
　　　　　　└─父(祐繼)──己身(祐經)──子(祐時)

第一幕

工藤の假屋

工藤左衞門尉祐經、吉備津宮宮司大藤内、手越の少將、黄瀬川の龜鶴、犬房丸登場しあり。酒宴。

大藤内　左衞門殿。なぜ興をば催されぬ。此度御身の先容で、本領安堵いたした祝に、下國いたす途中から引き返し、それにをる遊君二人を、連れてわざ〳〵參つたのは、淺からぬ某が志ぢや。(少將に)こりや、少將。主人に今一獻まゐらせい。

少将　宮司様があのやうに仰やります。さあ、今一つお上がりなさりませ。

（少将杯を侑む、工藤受く、犬房酌をなす）

工藤　いや、某は不興ではない。（飲む）不興な筈がないではないか。

大藤内　いかにも仰せられる通ぢや。御覺すぐれてめでたく言へば必ず聽かれる御身ぢや。不興であらう筈はないが、それにどうも浮々なさらぬ。

工藤（強ひて笑ふ）それはさう見えるばかりぢや。五月雨のいぶせさが、少しは手傳ふのかも知れぬ。

少将　その五月雨が降ればこそ、けふのお狩が止になつて、晝のうちからお酒盛のお相手が出來まする。

龜鶴　さき程お縁側に出て見ましたら、雨はもう上がつてをります。降つたのでお狩は止み、止んだ跡で晴れるとは、好い都合ではござりませぬか。

大藤内　龜鶴が云ふ通りぢや。其空の晴れたやうに、主人の氣分も晴れれば好いが。

（石田次郎登場）

石田　只今曾我の十郎殿が、大幕の間から、こなたを見入つて通られました。

工藤　なに。十郎が通つたと申すか。遠くは行くまい。呼うでまゐれ。

石田　はあ。（退場）

大藤内　曾我の十郎と申すは、奥野の狩の歸るさに、流矢に中つて落命した河津が子ではござらぬか。聞けば彼等の一族は、其頃から御身を疑ひ、中にも曾我の孤等は御身を敵と狙ふさうぢや。必ず油斷せられるな。

工藤　それは疾くに心得をる。さばかりの小冠者、何程の事がござらう。

（曾我十郎祐成登場）

十郎　某は曾我の十郎祐成でござる。落魄不遇の身を恥ぢて、御遠慮いたいてをつたのに、なぜお呼入なさりました。

工藤　十郎殿か。市に虎ある譬の如く、世の誣言に隔てられ、打ち絶えてはゐ申し

たが、始終餘所には思はぬ和殿ぢや、さあ、介意なく近う〳〵。

十郎　然らばお免下されい。（進む）

大藤内　某は備中の國吉備津宮の宮司大藤内成景と申すもの。以後お見識置下されい。

（十郎會釋す）

工藤　（犬房丸を顧みて）これが嫡子犬房丸でござる。

十郎　さては犬房殿とは御身であつたか。御身の年は。

犬房　九つでござります。

十郎　御年よりは迴にねびてお見えなさる。末頼もしう存ずる。

工藤　少將、杯を持て。

少將　はあ。

（少將杯を侑む、太鼓の音、十郎氣色ばむ）

工藤　屋形で奏づる散樂の太鼓ぢや。（飲む）十郎殿、さし申すぞ。

（十郎杯を受け、飲む）

それを犬房に賜はりたい。

（十郎犬房にさす、犬房飲み、十郎に返す、十郎工藤に返す、工藤受く）

いや、十郎殿。某と和殿とは本と一門のわかれぢやに、かく疎遠に打ち過ぐるは、不本意至極の事でござる。誠やらん、和殿達同胞は某を父の敵と云はれるとか。現に祖父工藤の太夫祐隆は伊東、河津、宇佐美三箇の莊を領したもので、先祖の墓ある伊東の莊は、父二郎祐繼が讓り受けた。其祐繼がみまかる時、和殿には祖父某には從父兄に當る、河津の二郎祐親殿に後見を頼うだ。然るに祐親殿は某に一箇莊をも渡されなんだ。されば遺恨がないとは申されぬが、瓜葛のよしみ深きが上に、後見をさへいたいてくれた、祐親殿の一族になんで某が弓を引かう。然れば、

伊豆の奥野の狩競に

家路をいそぐ木下闇、
父祐親に先だちて
馬を打たせし祐泰が、
椎の木立の間より
飛び來る征箭に中りしは、
思はぬ仇に討たれしか、
さらずば尾越の矢なりしか、

當時六波羅にをつた某が、全く與り知らぬ事。世間で彼此申すのは誣言と申すものぢや。以後はどうぞ御不審なく申し承りたうござる。

大藤内　これは左衛門殿の申される通ぢや。以後は入懇になさるが好い。異姓他人の某すら、こなたへ頼めば立ちどころに所領を安堵いたいてござる。

十　郎　御親切なる主人の仰、又宮司殿のお詞添委細承り申した。弟五郎時致に

も心得違のないやうに、きつと申し聞けるでござらう。

工藤　いや。酒興の上の長物語、詞の失もござつたらう、さあ、今一献まゐられい。

（杯を十郎に侑む、十郎遅々す）

なぜまゐらぬ。はあ。これは肴の御所望と存ずる。少將。歌へ。

少將　誇らしかりし綾藺笠
落ちにけり、落ちにけり、
河つ瀬に、瀬の中に。
それを求むと、尋ぬとせし程に、
明けにけり、明けにけり
はかなき夏のみじか夜は。

大藤内　や。出來いた、出來いた。

十郎（飮む）此儘御殿居仕りたうはござるが、いさゝか所用も候へば、これにてお

暇いたすでござらう。

工藤　それは餘り殘多いが、所用とあれば是非に及ばぬ。それ、犬房、お見送申せ。

犬房　はあ。

（十郎、犬房丸退場）

大藤内　些と密々に申し入れたい儀がござるが。

工藤　こりや女子共暫く遠慮いたいてくれい。

少將　そんならあちらへまゐりませう。さあ、ござんせ。

（少將、龜鶴退場）

工藤　さあ、何事かは存ぜぬが、御隔意なく申されい。

大藤内　別儀ではござらぬが、曾我の十郎と申すは、さて〳〵面魂の逞しい男ぢや。まこと御身の敵でござるか。

工藤　勿論の事ぢや。彼等が祖父に祐親と申す大不心得者がござつて、某がまだ

金石と申した頃、所領悉く押領いたいた。それゆゑ某に頼まれて大見、八幡と申す二人のものが、奥野の狩の歸路に、赤澤の雜木林で、彼等が祖父と生の父とを射殺さうといたいたが、祖父は左手を射られてながらへ、父祐泰は馬の鞍の後輪から前輪まで、射貫いた一矢に痛手を負ひ、落命いたいたこと決定ぢや。

大藤内　さもござらう。酒宴の席にさぶらひながら、杯を一目、刀を一目、又御身の顏を一目見て、物を案ずる樣子でござつた。御用心に若くはござらぬ。今宵は臥所をお換なされい。

（雨の音、時鳥の聲、鵺鶴奥の戸を細目に開き、覗ふ）

工藤　しつ。

（鵺鶴戸を閉づ）

さ程の事もござるまいが、切角の御存寄ぢや。所を換へて賓客たる和殿の心を安んじ申さう。

第二幕

伊出の農家。

曾我の從者鬼王、農家の主人、同妻登場しあり。妻は赤子を抱けり。

妻　ほんに物分かりの惡い人達ぢや。内のが人が好うても、もう待ちませぬ。兄弟の衆やお前方に、たつた今立ち退いて貰ひませう。

主人　さうぢや〳〵。たつた今立ち退いて貰はう。

鬼王　でもござらうが、けふあたりは曾我の莊からお使が來る筈ぢや。どうぞ今暫く。

妻　いえ〳〵。餘り内のが人が好うて、お前樣と違うて、人の言ふ事を聞き過ぎます。わたしが不承知ぢや。もうちつとも待たれませぬ。

主人　さうぢやとも。もうちつとも待たれぬわい。

鬼王　そんならせめて酉の刻まで猶豫いたいてくれられい。御兄弟が歸られたら、なんとかいたしやうもござらうから。

妻　ほんに〳〵阿房らしい。こゝへ最初來なさつた時は、兄弟の衆は勿論、お前樣方も人柄が好いので、つひわたしが騙された。餘所の迫子達のお宿をすれば、前金が取られたのに、十六日に來なさつてから、まだなんにも貰はぬぞえ。わたし達が只で家を明け渡して、餘所の狹い所に這入つてゐるのはなんのためぢや。それはさうと聞けばあの兄御の方は不斷虎御前と云ふ大磯のあそびの所へ通はしやる。するとそれを燒いてか知らぬが、弟御は其の跡を追ひ廻してゐなさるさうな。さうかと思へばお前樣は話の分からぬ石佛ぢや。

（赤子泣く）

えゝ、うるさい。母あちやんは石佛の話をしてゐる。坊の知つた事ぢやない。まゝよ、酉の刻までは待つて進ぜませう。その時はどつちにか返事を極めて貰ひますぞえ。

主人　うん。まゝよ、酉の刻までは待つて進ぜる。その時どつちにか返事を極めて貰はうかい。

（主人退場）

妻　もし。内のはどうでもなりまする。色好い返事をなさるなら、山吹色でなうても好いぞえ。

主人　これ〳〵、何をぐづ〳〵してをるのぢや。

（赤子泣く）

えゝ、うるさい。好う泣く子ぢや。

（妻退場）

鬼王　現に富貴なれば他人も合ひ、貧賤なれば親戚も離るとやら。御兄弟の方々が、祖父の君の世のままに三箇の荘の主ならば、

大名衆と諸共に
同じ假屋を立て並べ、
お家の紋を染めさせた、幕引き廻してお出なさらう。さうであつたら我々二人も、今頃は假屋の中で、笑ひ興じてをらうもの。貧しさはげに四百四の、病に優る病ちやなあ。

（曾我の從者丹三郎登場）

丹三ぢやないか。なぜ打ち萎れて歸つてまゐつた。

丹三　口惜しい事を聞いて來た。十郎樣は工藤に降參しなされたさうな。

鬼王　なんと云ふ。

丹三　いや。わけを聞かせいでは分かるまい。けふは五郎樣が和田殿の假屋へまゐられた。それは冠者原に食はせる糧の料が盡きたと云うて、金をお借なされうためぢや。わしは這入て待つてをると、四郎左衞門が來て云うた。五郎殿は知るまいが、十

郎殿が今工藤の假屋で、酒飲うて興じてをられる。こつちの殿が聞かれたら、さぞ無念に思はれうと云うた。わしは聞くと其儘、お主に相談がしたさに、腹が痛むと云うて、急いで歸つたのぢや。

鬼王　さて〳〵。まことしからぬ事ぢや。や。十郎樣が。

（十郎登場）

郎　五郎はもう歸つてをるか。

丹三　いえ。和田殿にお越なされてまだお歸なさりませぬ。

十郎　早う歸つてくれゝば好いが。

（奥へ退場）

丹三　どうぢや。

鬼王　わしには別に變つた御樣子は見えぬがな。

丹三　さうぢや。不斷に變らぬはれ〳〵とした御樣子ぢや。

鬼王　ぢやが御兄弟で何か御相談なさる事でもあるやら、五郎樣のお歸を待ち兼ねてゐさつしやる。

丹三　ふん。それはいつもの事ぢやないか。

鬼王　さあ。さう云へばさうぢや。所詮五郎樣でも歸られいでは物の文目は分かるまいてや。

（暮、農家の主人、同妻登場）

丹三　なんぢや。主人夫婦か。

妻　さあ。御返事を聞きに來ましたぞえ。や。丹三樣もゐなさるのか。自體わたしは還嫁はせんのに、ほんに揃ひも揃うて物分かりの惡い人達ぢや。さあ、お約束の刻限ぢや。すぐに御返事が聞きたうござんす。

主人　さあ、お約束の刻限ぢや。すぐに御返事が聞きたうござる。

鬼王　いかにも刻限にはなつてござるが、今少し待つてくれられい。御兄弟がお二

人共お歸になつた上で。（丹三に）實は先刻來られたので、酉の刻までと云うたのぢや。

丹三　いや。御迷惑を掛ける我々主從ではござらぬ。まあ、さう急かずに。

妻　いゝえ〳〵。御返事のなさりやうは分かつてゐなさるお二人ぢや。それに御返事をなさらぬやうなら、御兄弟の衆が揃はつしやつても、やつぱり御返事はなさるまい。もう片時も待たれませぬ。

主人　さうぢやとも、もう片時も待たれん。

妻　さあ、どうして下さんす。

主人　さあ、どうしてくれなさる。

妻　さあ。

主人　さあ。

（五郎登場）

五郎　燈火も點さずに、かしがましい。何事ぢや。

丹三　や。物に紛れて明しの用意が。

（退場）

妻　まあ、大きなお聲ぢや。切角寐た坊やが起きる。

（丹三燭を採り、登場）

五郎　や。見れば主人御夫婦ではござらぬか。幸の折にまゐられた。遲滯いたいた宿の料、只今お納下されい。

（金を渡す）

主人　や、これは大そうな。

妻　どれ〳〵、わたしに見せなさんせ。

（主人妻に金を渡す、妻懐にす）

妻　これはわたしが預かつて置くぞえ。ほんになんの色よりも、やつぱり山吹色の事ぢや。そんなら、お暇いたします。

主人　へい〱。お暇いたします。

（二人退場）

丹三　お兄上様がお歸なされて、

鬼王　お待兼でござります。

五郎　さうか。兄上は歸らしやつたか。

（十郎奥より登場）

十郎　五郎、待つてをつたぞ。（從者等に）そち達は暫時遠慮いたせ。

從者等　はあ。（退場）

十郎（小聲にて）　五郎。いよ〱今宵ちやぞ。扨工藤が假屋ちやがな。案内は兼ねて知つてをるが、精しい樣子を探りたさに、けふ午過の事であつた、大幕の間を覗いて、ふと家人等に見咎められ、ゆくりなく酒宴の相伴をいたいた。客には吉備津宮の宮司がをる。又それが連れて來た手越、黄瀨川の遊女がをる。宮司はさして妨にも

なるまい。遊女達も皆虎御前と親しい中で、手援にはならぬまでも、障にならう筈がない。かう何もかも分かつて見れば、結句見咎められたのが、僥倖かとも思うたが、又つく〲と思ひ返せば、愁に面を曝して、若し用心でもせられては、諺に謂ふ毛を吹いて、疵を求めたやうなもの、只それぱかりが氣懸かりぢや。

五郎（同上）なに。用心をいたいたと申して、何程の事がござらう。あゝ、時節到來、喜ばしや。此上は冠者原に、昨夜したゝめた文を持たせ、曾我へ返さうではござらぬか。

十郎（同上）さうぢや。遲れては門出の邪魔ぢや。（呼ぶ）鬼王、丹三。

兄弟　これへまゐれ。

（二人登場）

二人　はあ。

十郎　そち達を呼うだは別儀でない。雨中夜陰の遠路ゆゑ、苦勞には思はうが、今

から曾我へ使に參れ。

鬼王　そんなら今宵

丹三　お二人樣が

二人　お打入になりまするか。

五郎　しつ。

十郎　（小聲にて）いや。そち達には隱し果つべき事でもない。さりながら、
あさましき此同胞に
年頃仕へし幸なさよ。
報せんとはしつれども、
我等の力及ばねば、
其儘けふの別になつた。免してくれい。

鬼王　物體ないお詞ながら、それより今宵の御供に

丹三　どうぞお連れ

二人　下さりませ。

五郎　いや。それはならぬ。曾我にござる母の許へ、遣るべき使者は外にない。

鬼王　そんならどれ程願ひましても。

五郎　ならぬ。(起つ)

十郎　(起つ) 篤と胸を落ち著けて、得心いたいて立つてくれい。

(兄弟奥へ退場)

鬼王　こりや、丹三。伊賀の山田の冠者が事をお主は聞いたことはないか。

丹三　いゝや。知らぬ。それがなんといたいたのぢや。

鬼王　さいつ年伊賀の國人で、山田の小三郎惟行と云ふ、六波羅殿の郎黨があつた。それが保元の軍に八郎御曹司と對陣して、討死と心を定め、一人の冠者に故里への言傳を誂へた。すると其冠者がな、口惜しい仰を承つたと云うて、主より先に敵陣へ

駆け込うで討死した。

丹三　ふん。分かつた。我々二人も死ぬるまでぢや。

鬼王　さうぢや。死ぬるより外、途はない。さりながら御兄弟と我等とは、
　まだ總角の昔より
　四人はなれぬ中なれば、
　尊き卑きの別さへ
　忘れて年を經しものを、
今宵のお供が慨はぬとは、なんたる無念の事ぢややら。思へば胸が煮え返る。

丹三　おう。さもあらう。河津家の敵は我等が敵ぢや。討ちたい心に高下はない。
なぜ下司には生れたやら。

（二人手を取り、泣く）

鬼王　あゝ。めゝしい歎ぢや。

（雨の音）

折好く降り來る雨の音に、紛れてこゝて刺し違へ、三途の河で御兄弟が、本意を遂げて來られるのを、お待受申すまでぢや。お支度最中のお二人が、よも聞き咎めはなさるまい。

（二人胸を開き、互に刄を握す）

鬼王　いざ。

丹三　いざ。

五郎の聲（奥より）やあ、兩人、暫く待て。

（十郎、五郎登場、打入の支度、記念の品を持つ）

十郎　神妙な、そち達が志は、生々世々忘れぬぞよ。さりながらそち達は、稚い時に親に別れ、母を殘して死にに行く、子供の心を知らぬと見える。なんの我々兄弟が、そち達を卑しんで、具して行かぬと申さうぞ。どうぞ我等になり代つて、母上に

逢うてくれい。

（遺書と記念の品とを出す）

此文と小袖とは母上に奉る。貧しき中に飼ひ馴らせし、二匹の馬には鞍を置いて、祐信主にまゐらせる。又弓矢と行縢とは、そち達取つて記念にせい。

鬼王　さては死ぬにも死なれませぬか。

五郎　時移つては詮ない事ぢや。

十郎　疾う／＼まゐれ。

二人　はあ。

（鬼王起ち、厩より馬を牽き出し、丹三郎と共に、記念の品を結び付け、蓑笠を著く）

鬼王　そんならこれで我々はお暇をいたします。

丹三　此上は只御本意を首尾好うお遂なさるやう、切にお祈

二人　申しまする。

十郎　そち達二人も

兄弟　堅固で暮せ。

五郎　(鬼王、丹三郎退場　○十郎、五郎疊牀几に坐す)
兄上、今鹿島立するからは、これが互の顔の見をさめ。(手を取る)

十郎　父の命の血をわけし

五郎　わが兄上のかんばせも、

十郎　家弟汝が面影も、
在すが如き思の種、

兄弟　お懐かしうござりまする。
(鐘の音)

十郎　もう亥の刻ぢや、いざ、打ち立たう。いざ。

五郎　いざ。
(雨の音　○幕)

第三幕

幕の外

十郎、五郎登場。續松を把る。

十郎　見て置いた、これが假屋ぢや。油斷いたすな。

五郎　心得てござる。

十郎　こりや、五郎。父上がお討たれなされてから、十七年の久しい間、我々二人が念頭を、離れぬ遺恨を霽すは今ぢや。

西王母が園の桃は
三千年に只一度
花を開くと傳へ聞く。

五郎　又金輪王の出づる時、

現ると云ふ優曇華も、
稀に逢ふ日の譬なり。

十郎　待ちに待つた當の敵、左衞門尉は言ふに及ばず、出で逢ふものに容赦はいらぬ。ぢやが、女原も許多ある。逸つて無益の殺生すな。

五郎　仰やるまでもござらぬ。

十郎　いざ。

五郎　いざ。

（二人幕を褰げて入る。）

板戸をさしたる假屋の緣の前

十郎、五郎登場。

五郎　兄上、敵はどこへ參つたでござらう。

十　郎（左手を顧みる。）晝酒飲うでをつたのは、今の假屋ぢや。それにあの通人影もない。彼奴我等が寄せると悟つて、急に臥戸を換へたと見える。はてどこを尋ねたものであらう。

五　郎　此上は是非がない。假屋々々を片端より捜すまでぢや。

十　郎　待て。大切の場ぢや。

（假屋の板戸を開き、龜鶴燭を乗りて登場）

龜　鶴　波に漂ふ沖津舟

　　しるべの山はこなたぞや。

十　郎　さては龜鶴がしるべいたすか。五郎、續け。いざ。

五　郎　いざ。

（龜鶴入る、十郎、五郎續き入る　○夜廻の卒二人、一人は右手より、一人は左手より登場）

第一の卒　や。これはお役目御苦勞ぢやの。

第二の卒　お互ぢや。(板戸の方を見る)　こゝはどなたやらの假屋ぢやつたの。

第一の卒　こゝか。不斷はお屋形の宿直の人達が、代り合うて下がつて息ましやる所ぢやが、今夜は工藤殿が客人と一しよに這入られた。

第二の卒　客人と云ふのは、あの象のやうに太つた宮司殿か。

第一の卒　さうぢや。象のやうな宮司殿と息まつしやるのは羨ましうないが、その象に乘つた菩薩樣のやうな美しいのが二人一しよぢや。

第二の卒　ふうん。美しいのとは、そりやなんぢや。

第一の卒　さて〳〵お主は迂濶ぢやな。一人は手越の少將と云うて、名高い大磯の虎御前にも劣らぬ、上品な代物ぢや。それを宮司殿が連れて來て、工藤殿に當てがうて置いて、お手前は又黄瀬川の龜鶴と云ふ、小氣の利いたのを寵愛してゐなさるのぢや。今頃は、な、面白い最中ぢやろ。

第二の卒　ふうん。

第一の卒　それに我々はこの降つたり止んだりする雨の夜に、かうして濡れて歩くのぢや。同じ濡れるにしても氣が利かぬ。（空を仰ぐ）　や。又降つて來た。どりや一廻してしまはうか。

第二の卒　そんなら又後に逢ふぞよ。

（卒二人入り違ひて退場　○大藤内板戸を蹴放ちて登場。十郎、五郎續きて登場）

大藤内　お主達は曾我の同胞ぢやな。工藤殿を殺した下手人はわしが見極めた。後日に異論を言ふまいぞ。

十郎　何を。

（十郎大藤内を一刀切る、大藤内俯臥になる、五郎股を切り放す）

五郎　馬は吼え
　　牛は嘶く
　　世なればや

足二つも、

四つに這ふらん

十郎　（笑ふ）こやつ平家の世盛には、妹尾に附いて榮を干め、その罰に召し放された領地を、又工藤の手で取り返しをつた。世渡上手奴。四這に這うて世を渡れ。

（十郎、五郎共に笑ふ）

もうこれまでぢや。潔く名告つて討死せう。

五郎　さうぢや。兄上、いしくも言はれた。

十郎　やあ。假屋の人々、

兼て音にも聞きつらん、

目のあたりには今し見よ。

伊豆の國人河津の次郎祐親には孫、三郎祐泰がわすれがたみ、養家の氏を冒して曾我の十郎祐成、

五郎　同じく五郎時致、只今假屋の内に於いて、父の敵工藤左衛門尉祐經を討ち取つたり。

十郎　我と思はん人々は
　　疾う／＼こゝに出で合ひて

二人　御討留候へ。

（二人暫く屏息して物音を聞く）

五郎　誰も出ぬではござらぬか。

十郎　無下のものぢや。さらば馳せ廻つて名告らう。五郎まゐれ。

（右手へ往かんとす、假屋の内に烟起る、少將、鐵鶴登場、衣を覆ひて火を消さんとす）

五郎　兄上。あれは。

少將　續松の火でござんす。

鐵鶴　板敷にほんの少し、燃え附いたばかりゆゑ、

二人　わたし達がつい消します。こゝは大事ござんせぬ。

十郎　そんならお身達に頼んだぞ。

（十郎、五郎右手へ往く、女二人火を揉み消す）

將軍家の屋形。蔀の外、板縁。雨。

五郎登場。

五郎　兄上。兄上。

仁田の聲（舞臺の背後にて）やあ。假屋の人々承れ。狼藉ものゝ一人曾我の十郎祐成は、伊豆の國人仁田の四郎忠常が討ち取つたり。

鬨の聲（同上）えいおう。

五郎　はつ。兄上はお討たれなされたか。此上は祖父樣を自滅させ、敵工藤を贔負せられた、將軍家を一太刀恨まう。さうぢや。

（五郎縁に登ろ、五郎丸帽衣を被り、摩れ違ひ、帽衣を脱ぎ、背後より五郎を抱く、五郎板縁を踏み抜く、二人無言にて揉み合ふ○幕）

第四幕

将軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。中央前景に狩野介宗茂、新開荒二郎忠氏ゐる。

第一の大名　最早辰の刻になつてござる。犯人を預かつた大見の小平太はどういたいたやら。（第二の大名に）固より曾我の殿原は奸盗山賊の類でもござらぬに、笑止にも縄附になり申した。

第二の大名　情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つた工藤は父の仇ゆゑ、申し宥める道もござらう。御屋形の御座所近く推參いたいたと申すからは、罪科は所詮逃れますまい。

（雑色登場）

雑色　只今これへ曾我の五郎を召し連れてまゐりまする。

（雑色退場、五郎登場、大見小平太實政繩を取る、狩野座を進む）

狩野　曾我の五郎、承れ。只今これへ召されたは、某と新開とが承つて、夜討の宿意を尋ねるためぢや。さあ、逐一に申し立てい。

五郎　（怒る）默れ、狩野の介。祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和のため、自滅に及んでから以來、久しく落魄いたいてをるが、某とても遠祖左大臣藤原の武智麿が流を酌む、由緒ある身分ぢや。申す程の事はぢきに申さう。若しそれが協はぬなら、何事も申すまい。

狩野　怪しかる事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開　それを彼此申すのは、犯人の身となつても、まだ君に楯衝く所存か。

賴朝の聲　（簾の内より）いや、待て、狩野、新開。曾我の五郎が申す條尤なれば、賴

朝みづから聴いて遣はす。

（簾を半ば捲く、頼朝登場、舍人二人、近臣二人隨ふ、狩野退く、新開中央に殘る）

五　郎　（新開に）そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそれにゐては、和殿に物言ふに似て快うない。

將　軍　新開退いて遣はせ。

新　開　はあ。

（新開退く）

將　軍　見れば昨夜の雨に、そこの土は濕つてをる。誰かある。曾我の五郎に敷革を取らせい。

卒　はあ。

（卒右手より敷革を持ち出て、敷く）

五　郎　（感激す）

此敷革を見るにつけ、
十年の昔ぞしのばるる。

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めでたく、名利のために訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行うた、小賢き敵工藤が、時勢の移り變るに乘じて、宇佐美殿によつて御目見えを賜はり、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽き足らいで、我々兄弟を殺さうと、讒舌を揮うた爲め、

兄一萬は十二歲、
此箱王は十の時、
由比が濱邊に伴はれ、
引き据ゑられし敷革は
夢見ごこちに春を待つ
莟を摧く悲涙の座。

今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨を霽し、此世に思ひ置くことなければ、

　　最期を急ぐわがために、
　　此一枚の敷革は
　　父に見えん彼岸に
　　渡す弘誓の舟筏。

難有く拜領いたす。（戴く）

將軍　殊勝な覺悟ぢや。然らばみづから尋ねるが、此度工藤を討ち取つたのは年頃の企か、但しは俄の思立か。

五郎　それは申すまでもない事。我等が父を討たれたは十七年の昔。兄は五歳、某は三歳、しかと意趣をも存ぜなんだが、兄が九つ某が七つになつて、物心を辨へてから以來は、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍　然らば伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五たび、乃至十度も鎌倉

へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎　いかにも其往返には心を附け、足柄、箱根、大磯、小磯、由比、小坪のあたりにたたずみ、兄弟附け狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少き時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

將軍　ふん。さもあらう。扨工藤は父の仇ゆゑ仔細ないが、多くの麾下の侍をば何故妄に傷つけた。

五郎　固より我等兄弟は、かゝる狼藉を企てたからは、刃向ふもののあらん限、千萬騎をも切り靡けうと存じたが、我等が名告る聲を聞いて、足の立所も知らず逃げ行くゆゑ、後日のために一太刀づゝ印を附けたまでゞござる。

將軍　して大藤内はなぜ討つた。

五郎　あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切り棄てはいたいたが、所領安堵を喜んで下國する途中、報謝のために引き返し

たは、せめてもの心掛、今はなか〱不便に存ずる。

將軍　神妙な詞ぢや。ぢやが、それ程義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座所に踏み込んだ。

五郎　これは憚りある申條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道主人ではござらぬか。それが、成行とは申しながら、三浦殿にあづけられて自滅いたいた。又敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これ等の遺恨なきにあらねば一太刀おうらみ申した上て、自害いたす覺悟でござつた。

將軍　おう好う隱さずに申したぞ。此度の企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引のものがあらう。事の序にそれも申せ。

五郎　さやうなものは二人もござらぬ。

將軍　さは云へ、母には打ち明けたであらうな。

五郎　こは仰とも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死にゝ往けと申す親

のござらうや。

將軍　おう。一族否運に陷つたそちが申條としては、一々尤至極に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲（上手背後にて）はあ。四郎忠常只今それへ。

（仁田首桶を持ち、登場）

仁田　仰せによつて曾我の十郎が首級、これに持參いたいてござる。

將軍　五郎。兄に逢はせて遣はすぞ。それ、いましめ解け。

（大見、五郎の繩を解く）

仁田　實驗の上申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ、對面いたされい。

（首桶を開く）

五郎　懷かしや、兄上。
點し列ねし松の火の

消えなば共にと思ひしに、
不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにても、兄上、どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くとも、時致だに居合はせたら。

仁田　いや。和殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬢とに薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙く、我薙刀に拂はれて、刃はほつきと鍔元から。

五郎　なに。兄上の太刀が折れたとか。なぜ我太刀を兄上に佩かせなんだか。

仁田　おう。その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼び止めて、首を我手に授けたのぢや。

五郎　さてはよしみある御身が手に、兄上好んで掛かられたか。

（五郎歎く、犬房丸鞭を持ち走り出づ）

犬房　父上の敵、思ひ知れ。

（五郎を鞭うつ）

五郎　や。この小童は何者ぢや。

（五郎睨む、犬房たぢろく）

仁田　犬房丸。御前ぢやぞ。

五郎　なに。犬房丸が御身か。

彼も人の子、稚くて
親を討たれし悲しみは
いかでか我に殊ならむ。
果報の縄に引かれずば、
刄を取りて立ち向ひ、
御身に討たれむ我身なり。

刑場の土になるわしぢや、せめてもの心遣に、さあ、其笞で打つてくれい。

大房　父上を討つたお前は強い人ぢやと思うたに、優しい事を言うて下さる。それではどうも打たれませぬ。

五郎　おう。さうか。さあ、につくい小わつぱ、打たれるなら、打つて見い。

大房　なんの打たいで。おのれが〳〵。

（連打す）

將軍　もう好い〳〵。犬房、それで堪忍いたせ。

犬房　はつ。（鞭を棄て、平伏す）

將軍　五郎。此上問ふべき事もないが、賴朝闔外の職を辱うして、勇士猛卒を惜むこと何物にも譬へられぬ。どうぢや、志を飜して奉公いたしてくれまいか。

五郎　それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら、某は犬房に此素首を取らせ申さう。犬房が討たいでも、

近き惠に代へられぬ
遠き恨のまつはれば、

いつ謀叛人にならうも知れぬ。一しよに死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。刎ねられるを待つ外ござらぬ。（大見に）さあ、繩を打たれい。

大見　いや。某は五郎丸が、掛けた儘の御身の繩を、君命によつて預かり、又君命によつてほどいたばかりぢや。御身に繩打つすべを知らぬ。

將軍　待て。勇士を失ふは遺恨ながら、其志は奪ふべからず。五郎が繩は賴朝が手づから打つて遣はさう。

五郎　（居直る）こは思ひも掛けぬ仰せぢや。今生の思出に、さあ御繩を拜領いたさう。

將軍　（起つ）わが打つ繩は不動の羂索、難伏のそらには相應はしからう。いで〳〵。

（階を降らんとす○幕）

女がた

温泉宿の離座敷。冬日和。
俳優高岡、小川、蓮田の三人革包に物を詰めゐる。
小川　さあ〳〵。もう好い加減で好い。あつちの座敷まで運ぶのに、何も洋行する時の荷物のやうにしなくても好いぢやないか。
高岡。又洋行が出たぞ。君の洋行した時の荷物が果して旨く整頓してあつたかは疑問だ。
蓮田。（丁寧に物を詰めゐる。）好い加減にして置くと、何がどこにあるか分からなくなつて跡で困るから。
小川。一體こんなにして自分で引き越さなくたつて、いざと云ふ時になりやあ、ここの内でどうかしてくれるのだ。襟に附きやあがつて。こゝの親爺なんぞの眼中には

金力以外に何物も無いのだ。

高岡。爲方がないさ。君なら何か西洋の proverb でも出す所だが、まあ、長い物には卷かれろだ。

蓮田。(同上。)それはあのお松どんにでも賴めば、一攫に攫んで捩ぢ込んでくれるがね、そいつは眞つ平だから。

小川。大いにお松どんに攫まれることを怖れてゐるから可笑しいや。

高岡。蓮田の怖れるのも無理は無いな。薄馬鹿で力持と來てゐるからな。

小川。あゝ云ふのが大いなる戀愛といふのだらう。

(蓮田は小川に「うるさい」と云ふ表情をなす。○宿の主人登場。)

主人。はあ。すつかりお片附になりましたな。誰かお呼下さればお手傳に出ましたに。

高岡。なあに。形勢非なるときは、手際好く退却する。時にも所にも執着しないと云ふのが、我々の慣用手段ですからね。

主人。　いや。どうも申わけがございません。一月前からお約束になつてゐることがあるかと思ふと、又今度のやうに電報で、あす行くなんと云つてよこされますからね。兎に角毎年お座敷はここに極まつてゐますので。

小川。　すると我々は二三日 millionaire の部屋にゐたわけだね。

蓮田。　(革包を整頓し挙る。)　富豪と云ふのも、僕の知らない性格の一つだ。

高岡。　逢つて見れば好い。

蓮田。　(主人に。)　どうでせう。ここに泊つてをられる間、人に逢はれますか。

主人。　さあ。なか〳〵むづかしうございます。こちらへ遊びに來てゐられる間は、誰にも逢はないと云ふ立前なのでございますから。(表情。)女なら格別。

高岡。　そんなに女好ですか。　}(同時に。)

小川。　それは知つてゐらあ。　}

主人。　實はこちらへお泊になつても、その晩に女中に手を出されるには困ります。

高岡。なぜ。皆喜んで仰に從ふのでせう。いづれ跡の始末は立派に附くだらうから。

主人。所がさうばかりも行きません。お金のある方は存外お使にならないもので。

小川。當然さ。使はないから持つてゐるのだ。そこで幾ら位出すのです。

主人。それが妙に相場が極まつてゐましてね、「誰々には特別に世話になつたから、嫁入支度の內へ簞笥を一棹遣す」と云ふことになるのでございます。

小川。なるほど。するとお簞笥附なことは慥で、御落胤附だかどうだかは疑問だと云ふよめさんが出來るわけだ。そこでお手當に皆滿足するとも極まつてゐないのですか。

主人。どうも堅氣な奉公人ばかり使つてゐますので、隨分面倒が起ります。簞笥なんぞはいらないから、あやまり證文を書いて貰はうなんと云ふのがあります。

高岡。ふん。感心な奴がありますなあ。

小川。なんかんと云つて、簞笥以上の要求をしようと云ふのぢやないのですか。

主人。いえ、さうだと割合に始末が好うございますが、先方の言ふなりにはなつてゐたくない。金で默つてしまつたとも云はれたくない。どうして好いか自分にも分からないと云ふやうな手合がございますので。

小川。はてな。そいつは始末がむづかしいですね。

主人。それにさう云ふ時、悪い奴が中に這入つて、話を面倒にした事がございまして、東京のお内でも困つてをられます。實は奥樣の内々のお使に支配人の方が來られまして、どうにかして檀那のあの癖を止めさせてくれと云ふお頼があつたのでございます。そこで昨年はじやんこで目つかちのお鹽と云ふ女中一人しかお側へ出さないことにしました。ところが。

小川。そのじやんこの目つかちもお童笥附になつたのですか。

主人。なりましたよ。

小川。はてね。

蓮田。無邪氣ですね。僕はすつかり氣に入つてしまつた。

高岡。君一つ富豪研究の手段として、お得意の女方で接近して見てはどうだ。

小川。でも簞笥は貰へないね。

主人。（思案して。）お待なさいましよ。これは思附だ。一つさう云ふ事に願ふわけには

まゐりますまいか。

小川。さう云ふ事とは。

主人。その蓮田樣の女方と云ふ事に。

高岡。あれは僕が洒落に云つたのだ。がそんな事をして、それがなんになるのですか。

主人。いえ。實は昨年の跡始末に支配人の方が來られた時、なんとか工夫をして、せ

めて一年でも跡始末なんぞをせずに濟むやうにしては貰はれまいかと云ふ事でござ

いました。檀那を立派にはね附けた女があつたら、奥樣から三百圓出る。檀那がお

懲なさるやうに、少しはひどい目にお逢せ申しても好いと云ふ事で。

小川。なる程。それは至極の御名案だと云ひたいが、蓮田君では箪笥も貰へないし、その奥さんからの三百圓も貰へまいね。

蓮田。貰へもしないが、貰へたつて貰はない。

高岡。知れた事さ。(主人に。)所で蓮田君を出すは好いとして、正體が顯れたらどうするのですか。

主人。それはかうでございます。今日のお待受はあのお松にさせることになつてゐました。お松には兼て言つて聞せてありますから、捩ぢ伏せられさうになつたら、檀那を掴まへて投げ出しでもしませう。併し檀那はきつとすぐに手をお出しなさる。お松が腕立をする。それが目の前に見えてゐますから、ならう事なら少しでも先へ延ばしたい所から、蓮田さんに出てお貰申さうかと思ふのでございます。

小川。ははあ catastrophe を先へ延ばさうと云ふのだ。一寸延びれば尋とやらと云ふわけですね。

主人。へえ〳〵。先づさやうで。

小川。さあ〳〵。蓬田君。ここは一番義俠心を出して出て遣るべしだね。

蓬田。何も研究のためだ。遣つて見よう。だが支度が出來れば好いが。

小川。面白い〳〵。（主人に。）時に時間はありますか。

主人。（時計を見る。）あなた方が餘りお早くお片附けになりましたものですから、まだたつぷりございます。

高岡。時間はあつても、拵へが出來まい。

主人。おつむりがどうにかなりますなら、お召物はどうでもいたします。

蓬田。頭は今度の地方興業に使つた鬘があります。こはされると困ると思つて、僕があの大きい行李に入れて持つてゐるのです。

小川。熱心家は違つたものだね。兎に角それは誂向だ。さあ、御主人、衣裳をお頼申しますぜ。

主人。　承知いたしました。
（主人ベルを押す。○女中松登場。）

女中松。こつちでお呼なさりましたかな。

主人。　お上さんにちよいと來て下さいと云つてくれ。
（松蓮田に對する表情あり。）

主人。　何をぐづ〳〵してゐるのだ。早く往つてさう云ふのだ。

松。　お上さんが來なされば好いのでござりますな。

主人。　さうだ〳〵。じれつたいなあ。
（松退場。）

小川。（あたりを見廻す。）　樂屋にするには少し片附けなくては。

主人。　いえ。これ丈になつてゐますから、お荷物さへ運ばせれば好うございませう。
（女房よし登場。）

女房よし。（高岡等に。）まことに飛んだ御無理を願ひまして申しわけがございません。

高岡。どういたしまして。

小川。いや。お上さん。面白い事が持ち上がつてゐますよ。

主人。（女房に。）まあ、お荷物を早くあちらへ運ばせてくれ。それから少し話がある。

（主人女房を傍へ連れ行き話す。）

小川。（蓮田に。）君行李を持つて行かれないうちに、鑵を出して置き給へよ。

蓮田。おう。さうだつけ。

（蓮田奥へ退場。）

小川。段々面白くなつて來たぞ。鉅萬の富を積んで、王侯貴人に頭を下げさせる男でも我々のためには性格研究の材料たるに過ぎない。材料になる日には、Rothschild だらうが、Rockfeller だらうが、頭の古い奴等に河原乞食と云はれる我々も同じ事で、釣り寄せられるのは、喰氣でなければ色氣だ。いく地はないなあ。

高岡。どうだらう。跡で祟が來はすまいか。

小川。なに。受けてゐない恩惠は亡くする虞もないのだ。

主人。（女房に。）早くするのだぜ。

よし。（躊躇す。）なんだかこはいやうだわ。

主人。好いと云ふ事よ。なんでも考へることは夫に任せて置いて、女房は立ち働けば好いのだ。

よし。だつて檀那さんがおこりなすつて、來年から外へ入らつしやると困るわ。

主人。好いよ。その位の事の分からない己だと思ふのかい。何年夫婦になつてゐるのだ。

よし。まあ。それは十年も連れ添つてゐるから、わたし安心が出來ないのだわ。

主人。えゝ。うるさいなあ。そんなら智慧のないお前に分かるやうに言つて聞せよう。好く聞くのだぞ。檀那がお出なさらないやうになれば、奥さんが毎年來て下さ

るのだ。檀那はお一人だが、奥さんはお嬢さん達を皆連れてお出になるのだ。

主人。それ見ろ。安心の出來る亭主だと云ふことが、十年振に分かつたらう。

（女房聞き果てずして退場。）

よし。（嬉しがる。）さうなの。難有いわねえ。そんならすぐに持つて來るわ。

さあ。急いで片附けなくては。ここが樂屋になるのだから。

（革包三つ、その外そこらにある風爐敷包などを持つ。○見物に。）

舞臺を一ぱいで濟ませるとなると、なか〳〵むづかしいものでございますよ。

（高岡、小川に。）

まだ何かございますか。

高岡。跡は奥にある我々の共同の大行李丈です。

（下男登場。○同時に奥より蓮田鬘を持ちて登場。）

下男。（主人に。）お荷物を運びに參りました。

女がた

小川。まだその上に持つ積りですか。

蓮田。これを本物に見せるのは無理かなあ。（同時に。）

主人。（革包を主人の手より受け取らんとする下男に。）奥に行李があるから、お前はそれを運んでくれ。

小川。（蓮田に。）なあに。女に目のない人に分かるものか。（同時に。）

（下男奥に入りて行李を擔ひて出で、その儘退場。）

主人。それにお著きになる頃には日が暮れます。

（下男に續きて退場。）

小川。なあに。度胸だ。晝間だつて分かりやあしないよ。

（女房衣裳の風爐敷包を持ち、松鏡臺と化粧道具とを持ちて登場。）

やあ。衣裳が來たな。

よし。（包を開く。）お間に合ひますか、どうですか。

小川。どれ〳〵。（衣裳を見る。）何から何まで好く揃へて來ましたね。（上衣を引つ張り見る。）

や。ゆきがどうかな。これは女並でせう。

よし。えゝ。六寸五分でございます。

小川。では大ぶ小さいぞ。

高岡。そんなら手を引つ込めてゐれば好い。

蓮田。困つたな。變な恰好になるから。

小川。なに。寒がりだと思ふ位のものさ。○帶に帶揚に帶留と、此足袋は少し間に合ひ兼ねますね。

蓮田。足袋は穿き替へなくても好いよ。

よし。（松が鏡臺と化粧道具とを持ちたる儘立ちゐるを見て。）お前それはそこに置いてね、金盥にお湯を取つてお出。

松。金盥にお湯でござりますな。

よし。さうだよ。それからバケツに水を汲んで一しよに持つて來るのだよ。

松。金盥にお湯とバケツに水でございますな。

よし。さうだよ。早くおしよ。

松。金盥に水と。バケツにお湯と。あ。さうぢやない。金盥にお湯と。バケツに水と。

（松蓮田に對する前の如き表情ありて退場。女房鏡臺を据ゑ座布團を敷きなどす。）

蓮田。どうもお上さんに見てゐられちやあ間が惡いなあ。

小川。おい。まだ娘になつて物を言はなくても好いぜ。間が好いの惡いのつて、それはなんの事だい。

蓮田。さうでないよ。舞臺で平氣でする事も、往來では出來ないやうなものでね。

よし。わたくし蓮田さんが女におなりなすつた處が、早く拜見したうございますわ。どういたしたつて、本當の女なんぞは慨ひつこはありません。

蓮田。ところが劇評家と云ふこはい人に、ついこなひだも、腰から下が女になつてゐ

ないと云はれた位の爲合せですからね。

高岡。 拵が出來たら、少しお上さんに爲込んで貰ひ給へ。

よし。 どういたしまして。飛んだ事を。

（松盥に湯を取り、バケツに水を入れ持ち來る。）

あの、何かまだおいり用の物はございますまいか。

蓮田。 さあ。大抵好いやうですね。

小川。 好し。兎に角急いで首から拵へるのだ。

高岡。 お上さん。お蔭で樂屋が出來たやうですから、帳場の方がお忙しいやうなら。

よし。 そんなら後程お美しくおなり遊ばした所を拜見に出ますわ。

小川。 お松どんは借りて置いても好いでせう。

よし。 えゝ〳〵。どうぞお使下さいまし。さやうなら皆さん。

（女房退場。）

蓮田。さあ、業晒しに取り掛かるか。（肌を脱ぎ、化粧に掛かる。）や。馬鹿に熱い湯だなあ。おい。お松さん。その水を少しこれへ入れておくれ。

松。これへ水を入れるのでございますな。

蓮田。さうだ〳〵。

（松蓮田の顏を眺めつゝ、バケツの水を盥にさす。これより蓮田が化粧し、鬘を被るまで、松は失神せるが如く蓮田の顏を眺めゐる。高岡、小川は紙巻煙草を呑みつゝ、傍看す。）

小川。蓮田君。手ばしつこく遣らなくちやあ駄目だぜ。

蓮田。僕も見物を傍に引き附けて見せる化粧法は研究してゐないから困つちまふ。油畫かきが日本畫をかかせられるやうなものだからね。

小川。まあ、西洋畫でも好いから、極彩色に塗り上げ給へ。

（間）

小川。おい。蓮田君。親玉の前に出るのは好いが、君は一體どんな話をする積だい。

蓮田。（化粧しつゝ。）さうさねえ。

小川。胸に成竹はないのかい。

蓮田。（同上。）さあ。

小川。困るなあ。黒ん坊は附いてゐないのだが、大丈夫かい。

蓮田。（同上。）それは承知だよ。

小川。なんだか僕はあぶなくつてならないぜ。端から絶句してしまやしないだらうか。

高岡。まあ、待ち給へ。端から絶句して、おど〳〵したら、却つて好かあるまいか。懲つか饒舌るとあぶなからう。一體身分はどう云ふ女だとしたものだらうか。

小川。それは極まつてゐるさ。僕はさつき衣裳を調べて見たが、無論並の女中ではないのだ。特等のお客にばつかし出す女中さ。特別任務の訓令を受けてゐると云ふ性だね。一歩進んで言へば、親類の娘が來てゐるのを、お給仕に出すと云つても好いかも知れない。要するに僕は蓮田君が十分地歩を占めて掛かるが好いと思ふのだ。

ねえ蓮田君。

蓮田。(同上。)さうさねえ。

小川。おい。何を言つても、さうさねえと、さあて持ち切つてゐては困るなあ。君がその場になつて困るだらうと思つて、我々は心配して遣るのだぜ。

蓮田。(同上。)それは感謝するよ。

小川。じれつたい返事をする男だなあ。

高岡。まあ、そんなに氣を揉まないで、蓮田君の遣るやうに遣らせて置き給へ。

小川。でも蓮田君が第二のお松どんになつて、おとなし過ぎると困ると思つて。

高岡。なに。さうなつた所で差支ないよ。

小川。妙だねえ。君はあぶながつてゐた癖に、なぜ急に落ち著き拂つてゐるやうになつたのだい。

高岡。いや。それは爲事はあぶないのだ。だが斷行するとなつた以上は、自然の發展

に任せて置くが好いぢやないか。

小川。　さう云つてしまへば、それまでだ。どうも僕はさう暢氣になつてゐられない性分なのだ。

（間）

小川。　（時計を見る。）大ぶ拵に念が入るやうだが、好いか知らん。おい。蓮田君。もつと急がなくつても好いかい。

蓮田。　（同上。）もうすぐだ。

小川。　（高岡に。）時に、僕は實際の場が見てゐたいのだがどうにかなるまいかねえ。

高岡。　そして絶句したら附けて遣らうとでも云ふのかね。

小川。　なに。さうぢやない。只見物になつて見てゐたいのだ。

高岡。　それはむづかしいなあ。只の好奇心なら、まあ、我慢してゐ給へ。

（蓮田化粧して鬘を被り、立ち上がる。）

蓮田。さあ、衣裳だ。お松さん。手傳つてくれ給へ。
（高岡、小川立つて見に來る。）

小川。やあ。首丈は可なりに出來たぞ。

蓮田。シャツは控鈕をはづして、襟を内へ折り込んで置く位で、御免を蒙らう。

小川。それで衣裳が旨く附くかい。

高岡。なに。ぼちやぼちやして可哀らしくつて好いかも知れない。

蓮田。や、此湯文字には暈がある。まあ、好いや。

小川。火事の時御用に立つ奴だな。

蓮田。さあ、その長襦袢を取つとくれ。

松。長襦袢でございますな。

蓮田。さうださうだ。さあ困つた。紐が無い。おい。お松さん。お前さんの紐を一本ほどいて貸しておくれ。

松。紐をほどいて上げるのでござりますな。（端折の腰紐を解きてわたす、引摺になる。）

蓮田。（紐を結ぶ。）好し。さあ。著物だ。

松。著物でござりますな。

蓮田。さうだ〳〵。や。紐がもう一本いる。お松どんに帯を解かせるわけにも行くまい。おい。小川君。そこらに僕の兵兒帯がもう一つあつた筈だから、取つてくれ給へ。

小川。うん。あのメリンスの絞りだな。どこにのたくつてゐるか知らん。あ。あつた、あつた。（取りてわたす。）

蓮田。待てよ。腰紐を締めたところで、まだ帯の下に締めるのがいる。小川君、濟まないがそれを眞ん中から二つに裂いてくれ給へ。

小川。好し。心得た。お松どんそつちの端を持つておくれ。

松。こつちの端を持つのでござりますな。

小川。好し。しつかり持つてゐるのだよ。

（兵児帯を引き裂く。裾を引きたる松と、小川と左右に立ち別れて、大袈裟に裂く。）

高岡。いやな音がするなあ。

（旅客登場。外より戸を開く。高岡、小川、蓮田、松當惑す。旅客も驚く。場面 tableaux になる。）

○女房急ぎ登場。

女房。（旅客に。）あのあちらの方の離れでございます。

旅客。（女房に。）あ。さうでしたか。（高岡等に。）これは失敬しました。

小川。いえ。どういたしまして、少し幕の開きやうが早過ぎた丈で。

（旅客何事とも辨へざる様にて、女房に案内せられて退場。）

蓮田。僕は親玉が出し抜に來たかと思つてびつくりした。

小川。いや。僕もさうかと思つた。

高岡。誰だつてさう思ふよ。本物の來ないうちに、早く片附け給へ。

小川。　さうだ〳〵。それ、お松どん、又ばり〳〵だ。

（松目を瞬りゐる。）

裂くのだよ。

松。　裂くのでございますな。

小川。　さうよ。裂いてしまふのだ。さあ。

（兵見帯を裂き畢る。）

蓮田。　一本くれ給へ。

小川。　はてな。僕のを遣つたものだか、お松どんのを遣つたものだか。まあ、貴夫人に一歩譲るとしよう。さあ、お松どん。それを蓮田君に奉るのだ。

松。　これを上げますのでございますな。

（表情ありて切れをわたす。）

小川。　よう〳〵。

女　が　た

蓮田。（切れた受け取り、腰紙にす。松を見て、小川に。）君あんまり揶揄ふのはよし給へ。こん度はそつちのをくれ給へ。（小川の持ちたる切れた受け取り、帯下に締む。）妙に袂がぼて〳〵してゐるな。（撮み出す。）紙屑か。（投げ出す。）まだある。（投げ出す。）まだあるぞ。（投げ出す。）さあ、帯だ。お松さん。手傳つてくれなくちや行けないぜ。それ。しつかり引つ張るのだよ。

松。これを引つ張るのでござりますな。

蓮田。さうだ〳〵。あゝ。痛い。もう好い。息が詰まりさうだつたぞ。

（女房急ぎ登場。）

女房。あの、ステエションへお出迎にまゐつてゐるものから、電話が掛かりまして、只今お著になつたさうでございます。

小川。や。こん度は本物だな。ステエションから車で何分掛かるだらう。

女房。五六分でございます。もう今にお見えになりませう。早く片附けませんでは。

小川。いや。そいつあ大變だ。お上さん。なぜ誰か連れて來て手傳はせないのです。

女房。でもあんまり皆にこちらの様子を見せますのも。

小川。なる程。御尤千萬だ。

高岡。好いぢやないか。皆でそこら中の物を一つ宛持つて行かう。

(高岡、小川、そこらの物を掻き寄せ、手に／＼持つ。女房蓮田の脱ぎ棄てし衣類を始末す。蓮田鏡を覗く。)

小川。(蓮田に。)君も何か持つてくれんか。めかしてゐちやあ困るなあ。

蓮田。僕はここに居殘るのだ。まだ著物を著てから鏡を見ないのだからな。

小川。なる程。御尤千萬だ。お松どんも何か持たないか。

松。何か持つのでございますな。

小川。それまだ金盥があらあ。バケツもあらあ。

松。金盥とバケツを持つのでございますな。

（松金盥にバケツを持ち添へんとしてまごつく。）

小川。じれつたいなあ。その湯をバケツにあけてしまへば、樂に持てるぢやないか。

松。お湯をバケツにあけるのでございますな。

（小川何か言はんとして、resignation の態度をなし、默す。松湯をバケツにあけて持つ。）

小川。ああ。Manager はなか〳〵世話が燒ける。（あたりを見廻す。）まだ紙屑がある。（蓮田に。）あれは君が袂から出したのだから、君に殘して置いて遣る。

女房。（蓮田に。）おや。その袂にございましたの。まことに濟みません。（紙屑を拾ひて袂に入る。車輪の音。車夫の掛聲。）

おや。今塀の外をお出になるのが、そかも知れません。

小川。大變々々。

高岡。なに。ぐるつと廻つて來るのだから、慌てなくても好い。

小川。慌てはしないが、さう惡く落ち著いても困るなあ。庭で出逢つて、引拂の體た

らくを見られてもまづいからね。

（女房衣類の包を持ちて、退場せんとす。）

女房。そんならわたくしは。

蓮田。（女の聲。）あの、そんならわたくしはこちらでお待受いたしまして宜しうございませうか。

（一同表情あり。）

小川。うふ。凄い聲をするない。

蓮田。（男の聲。）なに。ちよつと吭を驗して見たのだ。

小川。笑談ぢやないぜ。さあ、行かう〳〵。

（女房先に立ち。一同急ぎ退場。松表情ありて殿す。蓮田殘る。）

蓮田。（男の聲。）ああ、我ながら馬鹿げた事を引き受けてしまつたな。（室内を歩き廻り、外を覗く。）庭で鉢合せ丈はしなくて濟んだな。お松どんがまだ盥とバケツを持つてま

女がた

ごまごしてゐるぞ。あ。こつちを見やがる。やつと這入つて行つた。(間。)なか〳〵來さうもないな。亭主がばつを合せようと思つて、茶か何か飲ませて、引つ張つて置くかも知れない。それともすぐに一風呂浴びると云ふやうなわけかな。面倒くさいなあ。來るのなら早く來れば好いのだ。(胡坐をかく。)ちよつと一服遣りたいな。シガレツト入れを袂に入れといて、持つて行かれてしまつた。あゝ。富豪研究は好いが、隨分大なる犧牲を拂はせられる事だぞ。

(間。舞臺漸く薄暗くなる。)

日が暮れて來た。お誂向だ。所で電氣はどうしような。附けといたものだらうか。えゝ。構はずに置いて遣れ。

(富豪古川澤造、宿の女房、松登場。松は塗十能に火を入れて持ち出で、塗十能を置きて退場。)

女房。(先に立ちて。)あの、お座敷はいつもの所をあけましてございますが、急な事でろくにお掃除も出來ませんで。

古川。　いえ。どうぞ構はないで下さい。

（蓮田を見る。表情。蓮田は片隅に寄り、小さくなりゐる。○女房に。）

いつ來て見ても、庭から山を見た所は好いですよ。

（女房臺十能を引き寄せ、火鉢に火をつぐ。）

女房。　でも今日はお天氣が宜しうございまして。

古川。　はあ。本當の小春日和でな。日が暮れてもなか／＼明るい。

女房。（火鉢を薦めつゝ。）ほんにまだ電氣が。

（蓮田起ちて電燈を捩る。）

古川。（小聲にて。）お上さん。あれはまだ見掛けたことのない姉えさんだが、誰ですか。

女房。　へえ。親類のもので、泊掛にまゐつてをりますので、當分すけて貰ふことにいたしました。

古川。　はあ。さやうで。大そう好い子ですな。

女房。難有うございます。まだ慣れませんのでございますから。

古川。いや。わしのやうに老人になると、世話をして貰ふには、却つておとなしい、孫娘のやうなのが、可哀くて好いですよ。（蓮田に。）わしはな、ここへ來ると、いつも内にゐるやうに、氣樂にしてゐるのだから、どうぞ遠慮をせんやうにしておくれ。

蓮田。はい。まことに行屆きませんで。

古川。年は幾つだね。

蓮田。十七でございます。

古川。はあ。十七にしては大柄だ。

（蓮田着物のゆきを氣にしてゐる。○松茶と菓子とを持ちて登場。○古川女房に。）

どうぞ構はないで下さい。さつき店で言うたやうに、晩は汽車の食堂で食べて來たから、もう何もいりません。あ。序にお上さんに話して置くが、わしは近頃小用に砂糖が交つて出るさうでな、肉ばかり食べてをります。あしたからも三度共洋食に

して下さい。それから好な酒ぢやがな、あれもそのお醫者さんがやかましう云はれるので、やめにしました。そのお醫者さんの云はれるには、人間は年を取ると、動脈に石灰が來て食つ附いて、堅くなるさうな。それがぽつきり折れると、中風だと云ふことだ。所がな、わしにその。

（次の詞聞えず。女房笑ふ。蓮田は解せぬ振。松はぼんやりしてゐる。）

いや。わしは又病氣の話をしましたな。（自ら笑ふ。）こなひだも娘がかう云ひました。お父う樣と御一しよに餘所へ往くのはもう厭だ。誰に逢つても、病氣の話や手水の話ばかしおしなさる。あれが止められぬなら、もうどこへも御一しよには往かれませんと云ふのぢや。（自ら笑ふ。）

女房。ほんに御酒をお上がりになりませんでは、御退屈でございませうね。

古川。なに。飲み掛けて途中で止めるのはつらいが、端から飲まずにならゐられますよ。

女房。でも今一つの方をお止申さない丈、お醫者様も御如才ございませんわねえ。
古川。いや。それを止められてはおしまひぢや。旨い物も食へず、酒も飲めず、その方も駄目となつては、生きてゐないも同様となるからな。ぢやが年は取るまいもの、汽車に一日乘つてゐて疲れましたよ。
女房。あら。それはお若い方だつてお疲なさいますわ。○松や、あちらへお床を展べてお置。
松。あちらへお床を展べますのでございますな。
（松奥へ退場。）
古川。好う太つたお女中ぢや。（起つ。）
女房。お手水でございますか。（起つ。）
古川。いや。知つてゐるからお構下さるな。小用の近くなつたのも、お醫者さんは病氣のせいだと云ひなさるが、矢張年のせいもあるかも知れぬて。

（古川に女房附きて退場。）

蓮田。（伸をする。男の聲。）あゝ。此樣子では富豪研究をする餘裕も何もなささうだな。だが飲食の話と色氣の話とを聞いたから、その外には何もないのかも知れない。待てよ。まだ年が寄つたと云ふ話を聞いたぞ。一代富限は金の溜まるまでには年も寄るだらう。えゝ。こんな事なら此場はもうお松どんに任せて置いて、己は御免を蒙りたいものだな。

（主人樣子を覗ひつゝ、登場。）

主人。どんな按排でございますね。

蓮田。いや。まだしあはせと化の皮だけは剝げないでゐますよ。

主人。親玉はどうしました。

蓮田。今便所に往つた所です。

主人。しつ。

（古川、女房登場。〇主人古川に。）

お疲様でございませう。相變らず行き屆きませんで。

古川。いや。毎度お世話になりますなあ。どうも溫泉宿の數は多いが、こゝの內程好く氣の附く內はありませんよ。

主人。恐れ入ります。もう今晩はお湯は召しませんでございませうか。

古川。いや。さつき車から下りると、顏を洗ひに往つて、飛び込んで來ましたから又あすの事にします。兎角年が寄ると、何事も氣が短くなつて、汽車に乘つてゐるうちから、著いたらすぐにあの綺麗な湯を浴びようと思つてゐました。何をするにもさうしたわけで。

（松登場。）

主人。お床を展べて來たのだな。奥のお火鉢にも火を入れて、お湯を掛けて置け。お湯呑も持つて來るのだぞ。

松。奥のお火鉢に火を入れるのでございますな。

主人。それからお湯を掛けて置くのだ。

松。そんなら奥のお火鉢に火を入れて、お湯を掛けて置くのでござりますな。

主人。それからお湯呑も持つて來るのだ。

松。（指を折る。）そんなら奥のお火鉢に火を入れて、お湯を掛けて置いて、それからお湯呑も持つて來るのでございますな。

主人。さうだ〳〵。

松。お火鉢の火と、お湯と、お湯呑と。（指を折りつゝ退場。）

古川。やれ〳〵。いつもながらえらいお世話になりますな。そこでお世話序に又面倒な事を頼みますがな。わしも丈夫なやうには見えてゐても、何分年が年だからいつどんな事があるかも知れませんで。どうぞ女中を一人こつちに寢させて置いて下さ

れい。

（主人、蓮田表情あり。）

主人。へえ。仰やるまでもなく、それはその積にいたしてございます。（蓮田に。）どうぞ好く氣を附けてお上申して下さい。

蓮田。あの、まことに行き屆きませんが、わたくしでお宜しい事なら。

古川。いや。あんたがゐてくれなされば安心ぢや。

主人。さやうならお休なさいまし。只今お湯を持たせてさし上げます。（退場。）

古川。（獨語のやうに。）やれ〳〵。年を取るといく地がなくなる。一日汽車に乘つてゐただけで脚がだるうてならぬ。

（羽織を脱ぐ。○蓮田に。）

あつちで横になるから、少し脚を敲いて下さい。

（蓮田羽織を疊む。）

お前さん名はなんと云ふね。

蓮田。　蓮と申します。

古川。　はあ。お蓮さんか。そんなら、お蓮さん、御苦勞ながら少し敲いて貰ひませうか。

（古川奥へ退場。○蓮田表情ありて跡に隨ひ退場。舞臺一瞬間空虚になる。○小川拔足して登場。）

小川。　（登場しつゝ。）どんな話をしてゐるか知らん。少し傍聽して遣りたいものだな。（窺ふ。）や。もう奥へ連れて行つてしまつた。親爺なか〳〵すばやいな。（間）すると catastrophe が目前に迫つてゐるぞ。

（主人拔足して登場。○小川主人に。）

もう奥へ連れて行つてゐますぜ。

主人。　へえゝ。（間。）どうなりますかなあ。

小川。　それは僕にも分からないですよ。兎に角まだ何事もない所を見ると、化の皮が

剝げずにゐるのですね。

主人。 剝げずに濟みませうか。

小川。 それは親玉が神妙にしてゐりやあ、あすまで位剝げずに濟むでせうよ。

主人。 いえ。神妙にしてはゐない方でございますて。

小川。 では剝げますね。

（古川奥よりあら〳〵しき様子にて登場。）

古川。 怪しからん。わしを誰だと思ふ。

（あたりを見廻してベルを捜す。）

亭主が承知して出したのなら、勘辨ならん。

（ベルを見附けて押す。）

媚のない女があるものか。

（松臺十能、藥罐、盆に載せたる湯呑みを持ちて登場。）

こら。

松。はい。なんでございますかな。

古川。まあ、そんな物はそこに置け。

松。これをここに置くのでございますな。

（手に持ちたる物を置く。）

古川。お前は女か。

松。はい。女でございます。

古川。きつと女か。

松。きつと女でございます。

古川。媚があるか。

松。なんでございますな。

古川。媚があるかと云ふのぢや。（手眞似。）

松。（笑ふ。）あんた、それはありますがな。

（蓮田恬然たる態度にて奥の口に立ち現れ、笑を忍びて覗ふ。）

古川。どうか知らんて。まあ、そこにすわつて見い。こんな怪しい内にゐる奴は、女が男やら、男が女やら、てんで分からんからな。どれ、ちよと見せい。

（古川松の胸を探る。）

松。何なされます。好かん。

（古川の手を摑み、投げ倒す。十能覆る。○蓮田は奥より、亭主と小川とは外より登場。亭主は十能よりこぼれたる火を拾ふ。）

古川。（起き上がる。）ああ、痛い。わしを手籠にしをつた、こら。御亭主。

主人。（火を拾ひつゝ。）へい、あ。熱。換へたばかりの疊が。

古川。御亭主。火なんぞは拾はんでも好い。

主人。でも火事になります。

松。（主人に。）あれで好うございましたかな。

主人。（睨む。）默つてゐるのだ。

松。默つてゐるのでございますな。

古川。何があれで好い。何を默つてゐるのだ。

主人。（火を拾ひ畢りて。）いえ。あれは別の話で。

古川。何から何まで怪しい内ちや。御亭主。

主人。へい。

古川。（蓮田を顧みて。）あの女は媚がないが、あれはどうしたわけですか。

（主人解せぬ振。）

小川。わたしは此女の親戚のものですが、どう云ふ間違をいたしましたか、どうも。

古川。媚がない。（兩手にて我胸を押ふ。）媚が。

小川。（首を傾く。）はてな。そんな筈はありませんがな。わたしは小さい時から一しよ

に育つて知つてゐますが。嬭首なら確かにあります。人並に二つあります。

古川。ふん。あるかも知れん。あつても小さい。まるで男ぢや。

小川。なる程。近頃改めても見ませんから、それは小さいかも知れません。男でも梅が谷のやうに嬭の大きいものもあれば、又女でも。

古川。それに胸毛が一面に生えてゐるが。

小川。へえ。それは心附きませんが、いつ生えましたやら。なに、パリイの女なぞには立派な八の字髭の生えたのもありますから。

古川、いや、もうあなたの御說明は承らんでも好い。○御亭主、嬭のない、胸毛のある熊のやうな女やら、又牛馬のやうな力のある女やら、さて〳〵珍らしい奉公人を揃へてをられますな。わしはそんな家は嫌ぢや。どうも溫泉宿の數は多いが、ここの內程わけの分からぬ內はありませんよ。甚だ御面倒ぢやが、すぐに勘定をして、車を一臺雇つて貰ひませう。

主人。恐れ入ります。以後氣を附けますが、御勘辨は。

古川。いえ。わしの方で御勘辨が願ひたい。

小川。なる丈嫋をふくらませますやうに申し附けますふ。

古川。お默なさい。○あ。羽織は。

（蓮田叠みありたる羽織を恭しく出す。古川憎げに見て、手より奪ふやうに羽織を取る。○幕。）

大正七年二月十六日印刷
大正七年二月十九日發行

（高瀬舟）
定價金壹圓貳拾錢

著者檢印

著作者　森林太郎
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦
東京市麻布區本村町十八番地
印刷者　中野鉄太郎
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷所　東洋印刷株式會社
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂
電話本局五十一番
振替口座東京一六一七